

感涙を止められませぬ。或る時の御歌に、

古の文よむごとに思ふかな

おのが治むる國は如何にぞ

日々夜々民安かれと思召し下されて、夜雨青燈、古の文讀みたまふ毎にも、われくのこを思召し下さるゝのであります。九重の奥深き處、錦繡綾羅の御衾を重ねたまひても、賤が伏屋に起臥をしてをる民のあはれを思ひやられて、

冬深きれやのふすまを重ねても

思ふは民が夜寒なりけり

と詠じたまひしは、吾等の忘れんとして忘るゝことの出来ない御聖徳であります、何の幸ぞ、此の日本の國に生れ、何の幸ぞ、此の叡聖文武なる、天皇陛下の下に立つ、これを思ひこれを思へば身を棄て家を棄て、も國の爲め君の爲めに盡さればならぬといふ思想が湧然として出るのであります、ここに臣たるの道はあるわれくの先祖は亦此の臣道を忘れず、遠き昔より「海行かば水つく屍、山行かば草むす屍大君のへにこそ死なめ、あだには死なじ」とて、大君の爲めに死をも辭せぬ精神は建國以來養はれて來たのであります、世界にはいろ／＼な國がありますが、其の多くは外より侵入して其の國を征服したので、君と

君民同祖

忠孝一致

國體の精華

民とは治者と被治者の關係の外、何の關係もないのですが、我が國は、君民同祖で、其の本を問へば、君も民も伊弉諾、伊弉册の二尊の末でありまして、今でこそ貧富貴賤さまざまに分れて居りますが、其の源は皆此の二尊より出たので、畏れ多いことではあるが、皇室は日本國民總御本家といふやうなわけであります、から君と民とは治者と被治者といふ冷かな關係ばかりでなく、本家と分家との關係、親子との關係があるのであります。されば君に對して忠義を盡くすといふことは、これやがて祖先に對して孝行を盡くすのと同じでありますから、我が國では忠と孝とは一つにして二でないのであります、書經にも維忠維孝とあり、論語にも忠信孝悌の教はあるのであります、忠孝一致といふことが實際に行はれて居るのは我が國の特色であると思はれます、治者を問へば萬世一系天壤と窮りなく傳へられたる皇室、被治者を問へば、皇祖皇宗の末裔、國土を問へば皇祖皇宗の親から經理したまひし所で、國家存立の三要素たる治被治者、國土共に皇祖皇宗を本とし、建國以來國民の精神を統一し、克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟し來つたので、我が國民教育の淵源は實に此にあるのです。

我が日本は教化的に一致して來たので、勝軍王所問經に「王は慈心を以て諸の人民を觀て既に子の如く想へり、彼の一切の人亦復王に於て其父母の如くなるべし」とある理想を現

人倫の  
要旨

實にし來つたのが我が國體の精華で、世界各國いづれの國民も理想としないものはありま  
すまいが、これを現實にしたのは我が國のみであるといふのは敢て誇稱ではありますまい。  
第二段は第一段の大綱を更に細説せられたので、初は人倫の要旨です之れを親子、兄弟、  
夫婦、朋友の四に分つてあるので、これは言ふまでもなく何人も承知して居る事で支那の  
儒教には詳しき説明があるのですからこゝには略しますが、人倫の事は餘り言はぬと思は  
れて居る佛教の方で説明する事にいたしませう、或る人の歌に

世を救ふ三世の佛の心にも  
似たるは親の心なりけり

孝道

とあり、梵網經には「孝順は至道の法なり」と示し、明教大師は「夫れ佛教萬行、戒を以  
て首となす、戒は則ち孝を以て本と爲す」とあり、法然上人の撰擇集には「縦ひ餘事なし  
といへども、孝養奉事を以て往生の業と爲す」とあり、其他心地觀經には、  
慈父慈母長養の恩によりて一切男女皆安樂なり、慈父の恩高きこと山王の如く、慈母の  
恩深きこと大海の如し。

といひ、忍辱經には「善の極は孝より大なるはなく、惡の極は不孝なり」とありて、孝を  
説くこと懇切、儒教に於ては孝を以て百行の基とし、孔子は「五刑の屬三千、罪、不孝よ

兄弟

り大なるはなし」と説き、曾子は「身は父母の遺體なり、父母の遺體を行ふ敢て敬せざら  
むや」といひ、孟子は「世俗の所謂不孝なるものに五あり、一には其の四肢を惰り父母の  
養を顧みず、二には博奕飲酒を好み、父母の養を顧みず、三には貨財を好み妻子を私して  
父母の養を顧みず、四には耳目の欲に徴うて父母の戮を爲す。五には勇を好み鬪狼を以て  
父母を危くするにあり」と之れを戒めたる等、枚舉に遑のないほどであります。  
次ぎは兄弟の道で、これは五本の指のやうなものでありますから友愛を旨とすべきはこれ  
宇宙の大道で、孟子の所謂「孩提の童、其の親を愛するを知らざるなく、其の長ずるに及  
びて其の兄を敬するを知らざるなし」と、顔氏家訓には、

兄弟は形を分ち氣を連ぬるの人なり、其の幼なるに方りてや父母左提右挈し、前襟後裾、  
食すれば則ち案を同じくし、表すれば則ち服を傳ふ、學べば則ち業を連れ、遊べば則ち  
方を共にす、悖亂の人ありと雖も、相愛せざる能はざるなり。

とあります、夫婦の道に就ては同書に、

夫れ人民ありて而して後に夫婦あり、夫婦ありて而して後に父母あり、父母あつて而し  
て後に兄弟あり、一家の親此の三者のみ。

とありて人倫の重んずべきをいひ、佛説六方禮經には夫の道を説いて、

夫婦

- 一 出入當に妻を敬すべし。
  - 二 之れに飯せしあ時節を以て衣被を給す。
  - 三 當に金銀珠璣を給與すべし。
  - 四 家中の所有、多少悉く用て之れを分付すべし。
  - 五 外に於て邪まに傳御を畜ふることを得ざれ。
- さあり、妻の道を示しては、
- 一 夫、外より歸り來らば當に立つて之を迎ふべし。
  - 二 夫出で、在らざれば當に炊蒸掃除して之を待つべし。
  - 三 外に姪心あることを得ざれ、夫罵り言ふも、還りて罵り色を作すことを得ざれ。
  - 四 當に夫の教誡を用ふべし、あらゆる什物を藏匿することを得ざれ、
  - 五 夫、休息すれば蓋藏して乃ち臥することを得。
- さ説き、優婆塞戒經には夫に對して「常に妻の心をして惱ましめず、貧富に隨ひて其の意を辨へ、殊に妻をして疑心を抱かしむる勿れ」さいひ、玉耶經には妻に對して「一には晩く眠り早く起き、家事を修治し、美膳あれば自ら口に向へず、先づ舅姑井に夫に進めよ、二には家物を看視して漏失せしむる勿れ、三には言語を慎み忍辱を旨として瞋ることなく

- 四には誠慎して及ばざるを恐れ、五には一心に舅姑井に夫に事して美名あらしむること妻の五善さいふ」さ説いてあります、朋友に就ては同經に親屬朋友を見る、當に五事あるべしさて、
- 一 之れが悪を作すを見ては私かに屏處に往きて諫曉止すべし。
  - 二 急あらば尙ほ奔り趣きて之を效護すべし。
  - 三 私語あらば他人の爲めに之れを説くことを得ざれ。
  - 四 當に相敬愛すべし。
  - 五 所有の好物、當に多少之れを分與すべし。
- さ説き、華嚴經には常に善友に親近せよさいひ、了義經には「若し善男子彼の善友に於て惡念を起さざれば即ち能く充意して正覺を成す」さあり、論語には、
- 子貢、友を問ふ、子曰く忠告して善く之れを違ふ、不可なれば則ち止む、自ら辱るなし。さいひ、又
- 益者三友、損者三友、直を友さし、諒を友とし多聞を友さするは益なり。便辟を友さし善柔を友さし、便佞を友とするは損なり。
- さあり、孟子は「善を責むること朋友の道なり」さいうて居る、皆これ朋友に信ならしめ

恭儉

んこの教であります。  
 以上は人倫の要旨たる親子、兄弟、夫婦、朋友の道で、主として家族主義の道徳を説いたのであります、毎度申します通り我が國民道徳は家族主義の上に立つので、われわれの日常道徳の要項はこれで盡きて居るのであります、併し家族相互の關係に於てのみ道徳があるのではない、個人的には「恭儉己を持す」の必要があるので、恭と儉とは共に自ら守るの根底で、自己心内の我見を征服して其の人格を高めて行くには是非此の二つがなければなりません、個人を本位にして人生の本務を見ましてもこれは自制と自訓と自護との三があるので、自ら慾望を制して貪瞋痴慢に打ち克ちて行くのが自制で、今いふ恭儉はこれであり、恭は敬しむの義で、禮記に「君子は恭敬樽節退讓して以て禮を明す」とあり、論語に「溫良恭謙讓」とあり、儉は恣ならざるの義、事を省き用を節するの義で、左傳に「大羹致さず、饗黍食鑿らず其の儉を昭す」とあり、書經に「克く邦に勤め、克く家に儉なり」とあつて自訓の本務に當る、自訓といふのは自ら教訓するので、次ぎの學を修め、業を習ひ次で智能を啓發し、徳器を成就するのが當り、自護とは常に國憲を重んじ國法に遵ひて自ら護る事にも當てることが出来るが、倫理上では主として身體を健全にして自己の生存を完うする事に當つて居る、さて此の自利的なるに反し利他的方面には博愛衆に及ぼ

博愛

義勇奉公

しの仰せがある、これは共同生活の美を圓滿に發揚する所以で、國家的には國憲を重んじ國法に遵はればならず、社會的には世務を開き公益を廣めて世の中の爲め人の爲めになることをして行かれればならぬ、前者は消極的に守る方であるが、後者は積極的に進んで行方もあります、而して一旦緩急あらば義勇公に奉じて、公義公道の爲めには命を捨て、でも働いて、先きにいうた智と仁と此の勇とで三徳圓滿することが出来るのです、これ實に人生の本務で國民としては「天壤無窮の皇運を扶翼するの道であります、此三徳のことは既に説きましたで今は略して置きますが、われわれの祖先是此の如くにして此の日本の國を保持して來たので、此の心掛が、音に陛下に對して忠なるのみならず、祖先に對して孝なるのでありますから、勅語に「是ノ如キハ獨リ朕方忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン」と仰せられて忠孝一致の旨を明にせられたのであります。

第三段は前二段を結ばれたので「斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所」とあつて、此の御教訓は陛下御自身の御考へといふのでなく、皇祖皇宗の御遺訓を示されたので、今日唯今ばかり守ればよいといふのではなく、行く末永く守らればならぬことを仰せられたのであります、かくいへばこれは我が日本のみの教へ、外國

には通ぜぬことのやうに思ふ人もあらうが、御聖旨のある所は決してソナナ小さなものではなく、古今に通じて謬らず、中外に施して悖らざる、古今を通じて確乎動かすべからざるの眞理であります、コソで陛下は臣民にのみ之れを守れと仰せらるゝのではなく「爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ成其徳チ一ニセンコトヲ庶幾フ」を詔らせらたまうて天に高き一輪の月影を萬機の器水に浮ぶるが如く、臣民の心の水に陛下の御聖徳を映じて月や我れ、我れや月かさわかぬまで心も空にさする夜の月といふ風に、上下一心、咸な其徳を一にせよとの御語であります。

語、卑近にして 聖言を冒瀆したりと雖も、大要此の如し。これ實に古聖先賢の教示と其の揆を同じくし我が民族修養の規箴たるべき道義の標準たり。否な、聖旨のある所は至公至平、單に我が民族道義の標準たるのみならず、之れを古今に通じて謬らず中外に施して悖らざる宇宙の大道たり、天下何れの所か父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋反相信するを以て没道義とし、天下何れの地か、恭儉己を持し、博愛衆に及ぼすを以て不徳とせん、學を修め業を習ひ、以て智能を啓發し、徳器を成就するは人生の本務にして、公益を廣め世務を開くも亦吾等共同生活の一員たるものが當然爲すべきの職責たり、誰か國家を離れて自己の生存を完うし得るものぞ、國憲を重んじ國法に遵ふは以て自己の生存を完うする所以に

國民道徳の長所

して一旦緩急あらば義勇公に奉ずるも亦其の國家保存の義務にあらずや。祖宗此の如くにして來り、子孫亦此の如くにして行く、かくて歩々宇宙の大道を實現し、人類の理想に臻達する、これ獨り我が國民の標進たるのみにあらず。聞く個人主義の道徳を因襲し來れる歐洲諸國に於ては其の道とする所、東洋の父子を本位とするに反し夫婦を本位とするが故に孝道に於て全からざるものありて老者の流離困頓するもの少からず、終に老者扶養の必要を感じ、養老年金の議、近者屢議會に提出せらるゝと、これ殆んど我が國民の思ひ及ばざる所にして我が道徳は能く此の缺陷を補ふにあらずや。吾等は此の國民道徳の精髓を發揚して以て人生の本務を遂行せざるべからず。

### 三、國民道徳と大道

人或は吾等の論議を以て國家偏重の弊に陥り、頑迷固陋、唯だ自國の美所長所を見て、世界文明の大勢に盲なる僞愛國論に類するを笑ひ、其所説を以て至公至平なる宇宙の大道と相容れざる迂腐の見となさむ、然れども、渾圓球上何れの所か國家組織なくして弱肉強食を免れ、往古來今、何れの時か國家組織なくして人道の發現を見得べき、孔孟が治國平天下を標榜して道義の開發を企て、プラトーン、アリストテレースが理想的の國家を以て道義實行の

國家の使命

國民道徳と大準

機關を目したりしは當に然かあるべきの理にして、草味野蠻水草を追うて轉移したりし時代  
に於ても早く共同生活の機關を有し、其の一定の土地に住するに至ては此に有機的の組織を  
爲して治者被治者の關係を生じ、此の組織に依りて人類は其の生命財産を安固にせられ、後願  
の患なうして靜かに其の本務を遂行し、天地の化育を助けて、文明の圓滿理想の實現に向ひ  
得べきにあらずや。國家を離れては個人の生存だも保持し難し、何ぞ況んや人道の發現をや  
彼の徒らに國家を無視して人類の平和を説き、現實の脚痕を洞觀する能はずして妄りに高遠  
の理想に走するものは未だ以て眞の人道の爲めに立言するものといふ能はず。

自然界  
の一面弱肉強  
食

自然界の一面には適者生存の法遍く行はれ、優勝劣敗の理は到る所に其の實例を示し、奮  
闘争擾の外、殆んど何者をも見る能はざるが如きも、他の一面には調和融合、相依り相助け  
て其の生存を保持するが如く、人類界の一面も弱肉強食の慘狀は不斷に行はれて、生存競争  
の事頗る激甚なりと雖も、人類の進歩は漸次に無制限なる競争の不利益たるを發見し、他面  
に於て共同一致して以て其の生存を保持するの必要に驅られ部落の團結となり、國家の組織  
となり、此に個人の競争に制限を付し、一定の土地に居りて一定の法に従ひ、内は國民の福  
利を計り、外は他の部落若くは國家の侵入を防ぎて安全を企圖せしも、國家相互の發展は終  
に利益の衝突となり、個人の競争に制限を付したる國家と國家とは此に激烈なる競争を試み

## 國際法

共同生  
活の實

ざるべからざるに至り、有史以後、吾等の目する所のものは實に此の國と國との軌轢にして  
人道は蹂躙せられ公義は盪盡せらるゝに似たれど、一面に於ける平和の愛好と、共同生活の  
要求とは此の競争にもおのづからなる制限を生じ、中古の歐洲に於ては羅馬法皇なるものあ  
りて宗教の權威を以て此の争闘を調停し、法皇の威衰ふるも正義を以て事を決するの思想は  
終に國際法なるものを生じて争ひを未然に防ぎ、若くは其の永續を防ぐの要具となり、初め  
は基督教徒にのみ行はれて他教徒は其の恩澤に均霑する能はざりしが、かゝる偏狹なる思想  
の、正義を標榜せる國際法と相容るべきにあざれば、曾ては異端外道として排斥せられた  
りし他宗教徒の國家も、苟くも文明を以て許さるゝものに對しては等しく國際團體に加はる  
ゝを得るに至り、殊に人文の發達は交通をして益々利便ならしめ、各國利害の關係愈々密接  
となりて共同生活の意義は漸次全人類に及ぼんとするの傾向を生じ、其の争闘の狀態も亦漸  
く獸的吞噬を離れ、財的となり智的となり、相和して相侵さざる理想の實現に近づかんこと  
これ國家を離れて得べきのこゝならむや。吾等は此の國家に忠實なることに於て初めて宇宙  
の大道を發現し天地の化育を助け得べしと信ず。國。道あれば榮え、國。道なければ亡ぶ、  
國家をして大道の發現に近づかしむるは吾等の任務たり、我が國民道德の標準は端を此に發  
せざるか、維新の宏謨は空前の大業なり、陛下が詔らせたまへる、

天地の公道

文明の惠澤

戦争

軍人

舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。

の聖言は能く我が國是を言明して、宇宙の大道を體現せしめんことをたまふものにあらずや。其の戊申詔書に於て、

方今人文日に就り月に將み、東西相倚り彼此相濟し、以て其の福利を共にす、朕は爰に益國交を修め友義を惇し、列國と與に永く其の慶に頼らむことを期す。

との詔旨は平和の福音にして、現代各國民の理想にあらずや。誰かいふ、日本は好戦國民なり。我、豈に戦を好まんや。蓋し己むを得ざるに出づ、呂氏春秋に曰く、

家に嚴父の怒咎なくんば堅子嬰兒忽ち驕肆、國に刑罰なくんば百姓人民立るに不逞天下誅伐なくんば諸侯牧伯俄かに暴戾、故に怒咎は家に偃すべからず、刑罰は國に偃すべからず誅伐は天下に偃すべからず。

と、宇宙の大道を體現し文明の惠澤を共にせんが爲めに己むを得ずして戦ふ、建國以來未だ一の暴戦なし、これ 皇祖皇宗の芳躅にして、今上の聖旨なり。されば彼の弓馬刀槍を事とする武人に於ても他邦に於て多く其の比を見ざるの道義的性格を醜釀し君臣の義を重んじて忠節を専らし、義は山嶽より重く死は鴻毛より軽く、道の爲めには身命を惜まざる義勇の心となり、一諾の信、萬金よりも重き信義の念となり、秩序を正しく規律を嚴守する禮儀の行

となり、驕奢放縱を避くる質素の風となる。蓋し忠節義勇信義禮義質素は我が軍人の精神にして軍隊勅諭には「左の五個條は軍人ならんもの暫も忽にすべからず、之を行はんには一の誠心こそ大切なれ。抑此五個條は我軍人の精神にして一の誠心は又五個條の精神なり、心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆うはべの裝飾にて何の用にかは立つべき、心だに誠あれば何事も成るものぞかし」と仰せられ、此の五事悉く一誠に出で、至誠奉公を以て軍人の本領とする等一切の行動道義の實踐にあらざるはなし。

山鹿素行士道を論じていふ。

曾子曰く、士以て弘毅ならざるべからず、任重うして道遠し、仁、以て己が任を爲す亦重からずや。死して後已む、亦遠からずやと、士は其の器最も廣く、能く忍ぶ所あらずしては重きにたへ遠きを致す事叶ふべからざるなり。職分を知り、其の道に志すといふことも、一生これをつさめて死して而して後に已むにあらざれば中道にして廢す、道の途ぐべき所なし、故に勤行を以て士の勇とするなり、孔子曰く君子は言に訥にして行に敏あらんを欲す、言ふことはこれ易く、行ふことはこれ難しといへり、職分を知て志を立て道に志あつて其の道の次第をきくことを得ると云とも、勤め行ふ所を専らす、而して、勤め行ふこと大方の志にては遂る事難し、今少しの入らざる事を致し習へる業すらこれを改めんとする

武士道

國民道德と大道

武士の心得

には甚だ力を入れずしては安じがたし、殊に利害の間、色欲の妄動、名根の萌す所、因循すること久しきを以て、更に間斷する所なく、其の意妄りに先んず、こゝに於て我に大力量あらずしては必ず引おとされて其の誠を盡くすこと叶ふべからず、我に大力量を出さしむるは志の淺深によることあり、志す所淺くしては、勤むる所、深かる可らざるなり、志は自ら省みて人の人たらざる所を確かに辱る處深からざれば、此の志出でざるなり故に中庸に、子曰く、學を好むは知に近く、力行は仁に近く、恥を知るは勇に近しと出せり。孟子曰く、富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず此を之れ大丈夫と謂ふこと云へり、富貴は人の大に好む所にして、貧賤は人の大に惡む所、威武は人の大に恐るゝ所にして、此の間に聊か心を付る處なきにあらざれば大丈夫といふべからず、大丈夫といふは是れ士の道に志して、其の志す所を確かに行ひつゝさめたるもの、事なり、其の厚く正しき所此の如くつゝさめずしては士の本の立つといふべからざる也。

と、これ豈に弓馬刀槍を事とするものみの教訓ならんや、石平道人も亦武士道を説て「隨分武勇を勵まし一命を捨て粉骨を盡くし、名譽を世に顯はす人の恩賞の輕重、所領の大小を論ずる輩あり、拙哉」とて十條を設けて武士の心得とす、

第一 可守生死事

第二 可不知因果理事

第三 可用浮心事(浮心とは道義を守る心を指す)

第四 可守無差別理事

第五 向諸境界不可變心事

第六 守己可不知己事

第七 滅己可樂己事

第八 知恩可報事

第九 可惜光陰事

第十 知難到理可離著相念事

と、こも亦唯だ武士のみの教訓にあらず。我が國民道徳は何れの點に於ても常に宇宙の大道に遵據し、吾等をして之れが發現に努力せしめんこと、吾等は日本國民なり、吾等が祖先の遵據し來れる這般の道徳を遵守し、更に發展し擴張して初めて人生の本務を完うし得べきを信するが故に、此の如く立言し、此の如く論議す、敢て偏狹守舊の妄想に驅らるゝにあらず、吾等は立憲治下の國民たり、舊習に盲從し、爲政に屈服するの卑屈を學ぶべからず、自ら國家組織の一員として堂々として、之れを論じ、諍々として之れを言ひ、其改むべきを改め、



矯むべきを矯め、極力我が國家をして理想の組織に近づかしめ、宇宙の大道と相離るゝなきの畫策を立てしめざるべからず。

報レ汝修道者。進求ニ空勞神。人有ニ精靈物。

無字復無文。呼時歴歴應。隱處不レ居レ存。

丁寧善保護。勿レ令レ有ニ點痕。 (寒山詩)

### 第三章 處世論

#### 一、道徳の價値

倫理道徳に關す諸問題の中心概念は善惡の標準にありて往古來今學者の論ずる所、多岐多端にして其の歸一する所を得るに苦むと雖も、其の大體の形勢を辿りて之れを二個の思潮に分類することを得、一は現實の要求に重きを置きて社會の幸福を計るの行爲を以て善とし他は理想の追求を専として良心の満足を善とす、前者は結果に重きを置くものにして、後者は動機を主とするものなり。動機善なれば結果の如何を問ふを要せずとすものは後者の立脚

地にして、動機の如何は問はずもあれ、結果だに善なれば即ち可なりとするは前者の根據たり。

凡そ道徳であるとか倫理であるとかいふことは何をするのが目的であるかといふならば、むづかしい、理窟を云へばイロ／＼ございませうけなごも、一言で云ふならば善い事をして惡い事をするなといふことを教へるに過ぎないのであります、孔子の數萬言の教も釋迦が八萬四千の經文も、基督の教もソークラテースの教でも詮じ詰めれば、善い事をして惡い、事をするなといふに過ぎない、實に是れ程世の中に分り切つた事はないのであります、又是れ程世の中に分らぬ事はないのであります、何故是れ程世の中に分らないことはいふかといふと、善をせよ、惡をするなといふことは誰にでも分つて居るけれども、善とは何であるか、惡とは何であるかといふことになりますと、餘程話が面倒になる、試みに善といふことはどんなことかと云ふと、それは惡くない事は善であるといふ、今度は惡といふことはどんな事であるか、それは善くないことである、是は循環論法といふ、善い事といふんが惡くないことである、惡いといふはどんなことか、善くないことである、一寸分つたやうで考へて見ると矢張分らぬ(笑聲起る)そこで善い事をせよ、惡い事をするなといふのが教であるならば善い事といふはどんなことか、惡い事といふはどんなことか、是から極めて往ければ

分りませぬ、先づ普通の人が申しまする例を以て云ふならば、人を助けるといふことは、善い事である。斯う極つて居る、人を助ける、是は餘り悪いことではござりませぬ、けれども人を助けるといふことは善いと云ひながら兵隊が戦争に参りまして人を殺すといふことは悪い事であるか。さうして無暗矢鱈に人を助けて居つてこれで善いと云へるか、更に言葉を変へて云ふならば——例を變へて云ふならば、巡査が泥棒を捕へて居つて之を引張つて行くのは氣の毒だからさうして泥棒を逃がしてやつて是れが善いと云へるか、人を助けるといふことは善い事であるけれども、時と場合に依つては助けてはならぬことがある、人の體に傷を附けるといふことは善くないことであり、人の體を無暗矢鱈に傷附けるといふことは善くないことであるけれども、腫物が出来た節にお醫者様が之を截らなくてはならぬと仰しやる、截る方が宜い、それで截つたところが其腫物が癒つた、斯の如く助けて善いこともあり、助けて悪い事もある、サア善とは何であるか、助けて宜い事もあるし助けて悪い事もある、切つて宜い事もあるし、切つて悪い事もある、善とは何ぞや、悪とは何ぞや、善と悪とは其時と場合に依つて變はる、時と場合に依つて變はるならば何をか善と云ひ、何をか悪と云ふ、遂に決することが出来ない、極まらない、善をせよ、悪い事をするなといふのが教であつても、極まらないければやる譯に往かぬ、善い事をせよ、善い

事といふてもどんな事かそれが分らぬ、悪い事をするな、悪いとはどんな事かそれが分らぬ、分らなければやる事が出来ないそこでどうしてもそれが問題の第一着として善とは何ぞや悪とは何ぞやといふことを極めなければならぬ、今云つた通り善と悪とは時と場合に依つて變るだけなら宜しうございますけれども、まだもつと變はる、「所變はれば品變る難波の蘆は伊勢の濱萩」所が變ると善と悪が變る例が澤山あります、最も諸君の見易い例を引いて見るならば、日本人はお辭儀をするといふ事を別に悪い事とは云つて居らぬ、人の前で頭を下げる實に失禮な奴だと怒る人はない、ところが西藏の國の風俗は御承知の通り人と出會ひました折の禮式は拇指を二本前へ出すのださうです、拇指を二本前へ出すだけならば可笑しくないけれども、拇指を二本前へ出してそれから舌を出すのである、餘程妙な風であります、私が此處でやつて見ても宜いけれども……(笑聲起る)、やりませぬが、それが西藏の人は不思議はない、是れが禮式なんでありますから、人々も出會ふと拇指を二本出して序に舌まで出す、西藏の人は之れをやらなければ無禮である、日本で之れをやれば無禮である、して見ると西藏で善い事が日本では直ぐ其儘に用ゐられない、それはマア所に依つて變る話であります、又時に依つても變る、日本の國でも昔も今は變つて居ることがイロ／＼あります、敵討です、親の敵を討つ、曾我の十郎五郎といふ人

が十八年の艱難辛苦をして親の敵を討つて實に孝行の人であると云はれたけれども、今日の日本で親の敵であると云ふ人を殺してしまへば矢張り殺人犯を以て問はなければならぬのである、昔はそれが善いと思はれたけれども、今は善くないことになるのであります、すると善と悪とは時に依つて變る、國に依つて變る、所に依つて變る、場合に依つて變はる、それぢや善をせよ、悪をするな、さいふても、善と悪との定義が明かであれば到底善を行ひ悪を止める譯に行きませぬ、それであるから致しまして、昔から倫理學者と云はれる人が、善と何である、悪とは何であるさいふ此善悪の問題に付いて様々の議論がある東西兩洋の倫理學史は其善惡問題に付いて填められて居るさいうても宜い位であるが、併し其議論を大別して見るに二つに分けることが出来る、其二つは何のであるかといふと、一つを結果論と云ひ、一つを動機論と云ふ、結果論といふのはどういふのか、それは結果を見て善惡を極めて行くのです。動機論といふのは結果の如何に依らずして其人が行ふ時の心持を土臺として論ずる議論であります、結果論で云ふと斯ういふ議論、世の中の多くの人の爲になることをした者を善と名付け、世の中の多くの人の爲にならぬことをしたのを惡と云ふ、最も明白である、世の中の多くの人の爲になることをすれば善である、世の中の多くの人の爲にならぬことをすれば惡である、最大多數の幸福主義多くの人の爲にな

動機論  
と結果論

ることは善、多くの人の爲にならぬことは惡、實に明白であります、是れで分つたか、分つたやうで分からぬ、何故分らないかといふと、多くの人の爲になることならぬとはどうして極めるか、やつてしまつてからは多くの人の爲になつた、是は多くの人の爲にならなかつたと後で極めることは出来るけれども、今やらうといふ折に是は多くの人の爲になるかならぬかはどうして極める、自分の心で極める、より外に仕方はない、そこで自分の心で善いと思つたことが善、自分の心で惡いと思つたことが惡、善と惡とは心で極めるさいふ動機論が勢ひ出ざるを得ないのであります、自分が善いと思つてしたことは善い、惡いと思つてしたことは惡い、是は一番流行る議論であります、けれども之を考へて見るに餘程變てあります、自分が善いと思つてやつた事が果して善いことでありませうか、自分が惡いと思つてしなかつたことが、果して惡かつたでございませうか、例へば茲に放蕩をして居る人がある、其人が身を持崩して居るから氣の毒であるさいふので善意を以て忠告してやるどうかして彼の人の放蕩を直してやりたいさういふので諄々忠告をしてやる、するに其人が成程と考へて悪い事を止めれば此方の考も善い事であり結果も善かつたのでありますところがさういふ放蕩息子に忠告をしてやるに其男が、何だアンな男に其位なことを云はれるなら、俺はもつこヒドクやつて見せると、却て向ふの奴が反對になると此方の言つた

心の不  
完全

こゝは善かつたけれども、結果は餘り善くないことになる、或は此方が悪意を以て悪いことと思つてやつても其爲に向ふの人が反省をして善くなることもある、吾々お互の心といふものは是か善、是が惡と明かに見ることが出来るものならば、それは自分の心で善と思つた事が善、自分の心で惡と思つた事が惡で宜いけれども、吾々お互の心はそんな明かに立派な心ではない、惜しい、欲しい、可愛い、憎いといふやうな様々の迷ひの雲に覆はれて移り行く初めもはても白雲の怪しきものは心であつて、吾々の心と云ふものは實に怪しいもの、ごうでもなるのであります、人が宜いぜと云へば成程宜さうにも見える、悪いぞと云ふささうかとも見える、何方へでも行くのである、實に吾々の心は風のまにまに飛び行くところの一枚の紙片か或は浪のまにまに浮べるところの船の如くに風に弄ばれて様々に何れへでも行くのが吾々お互の心ではありませぬか、實際さうであります、「君斯うやる」といふぜ、「さうか」、「さういふやうなことを云ふ」、「それも宜くないぞ」、「ウム、さうかも知れぬ」、「何方が本統が分らぬ、何方にでもなる、そんな頼りない心で、是が善だ、惡だと極める譯には行きますまい、心が既に頼りないものであるから、其心に依つて是が善、是が惡と極めることは出来ないさするならば、之には極めるものが必要である、ごうして善と惡とを極めるか、そこで宗教がある、サア其處が俺の領分であるといつて飛出すところであ

神を標  
準とす

る、それは吾々お互のやうな不完全極まる、そんな不完全な心で善と惡とを極めやうとするから間違つて居るのである、完全圓滿なる神様の御心に随つてやる之を善といふ、神の御心に背く之を惡といふ、是は大分立派な議論でありますけれども考へて見ると立派でないところもある、一寸立派です、何故かといふと人間のやうな不確な心でやるから善惡は間違ふのです、完全圓滿なところの神様の心に隨ふのが善であつて、其神様の心に背くのが惡、一寸分るけれども、それは其宗旨々々を信じて居る人だけに是が行はれる議論であつて、未だ宇宙の眞理として此處に持出すことの出来るものではない、何故かと云ふと天理教の信者であると天理王命の仰しやつたことが善であつて、天理王命の仰しやらぬことが惡であるといふ、基督教は「エホバ」の神様の云うたことが善であつて、之に背くものは惡である、イヤ觀音様の仰しやつたことが善であつてそれに背くのが惡である、さういふ工合に宗教といふものは本尊が様々にある、その様々なる本尊が云ふから成程天理教の人は天理王命の云ふことを以て極めることが出来るけれども、天理教でない人はそんな神様は何だといふ、それだから唯神様の云はれたことが善、神様の云はれないことが惡といふことは、其宗派の中だけに行はれる議論であるけれども、未だ宇宙の眞理として此處に引き出すのには少し不完全な所がある、然らば善と惡とはごうして極めるのであるか、

順理と  
背理と

善悪はどうして極めるのか、茲に於て佛教の中に斯ういふ説がある、理に順つて心を起す之を善と名付く、理に背いて心を起す之を悪と名付く、理といふのは道理の理であります、道理に従つて心を起すのが善、道理に背いて心を起すのが悪である、だから道理に従つてやるのが善、道理に背くのが悪であるといふ一寸分つたやうですけれども是も亦考へるさ分らぬ、何故分らぬかといふと、道理に従つてやるのが善、理に背くのが悪といふことは分つたが、そんなら其道理とはどんなものであるか、道理とは何であるか、其道理が分らなければ道理に従へぬ、道理とは何だといふと佛教の中にそれを解釋してある、葛城の慈雲律師でございますが、理とは法性の理なり法性の理に従ふ之を善と名付く、法性の理に背く之を悪と名付く、分つたか、イエ分らぬ、分らぬければ駄目である、サア法性の理とは何であるかといふと、是はナカノ口を以て云ふのはむづかしいけれども分り易い言葉を以て云ふならば天地自然有りの儘の道理といふ、即ち天地自然有りの儘の道理に従ふ之を善といふ、天地自然有りの儘の道理に背く之を悪といふ、天地自然有りの儘の道理であります、諸君天地自然有りの儘の道理即ち宇宙間に現れて居るところの眞理であります、宇宙の大道であります、此宇宙の大道に現れて居る天地自然の妙用、之に従つて行くこれを善と云ひ、それに背く之を悪と名付く、此宇宙を申しますものはどんなものでござ

宇宙の活動  
の三段

いませうか、宇宙は實に一物も靜にして居るものはいませぬ、天地は活動して居る、宇宙のあらゆる一切の萬物は悉く動いて居ります、活動して居ります、其天地宇宙間に活動して居る働き方を三つに分けることが出来る。先づ一番下の働きを名付けて無意識的活動といふ、——無意識的活動といふ言葉は或は如何か知れませぬけれども、先づさういふ方が適當であると思ふ——無意識的活動即ち意識の無い活動であります、是れが一番下の働き、其次には意識的、斯う三つに分けることが出来る、宇宙間の何の活動でも一番下の働きは無意識的活動であります、其無意識的活動は何かといふと之を此方へ動かせる(此時辯士盆の上にある茶碗を動かす)此の盆の上に載つて居る茶碗が右せむと欲すれば右し、左せむと欲すれば左に行くのではない、是は無意識に動いて居る、若し思つて居るなら、貴様右へ行け、俺は嫌やだといふかも知れないがそんなことはない、是が無意識的活動、石が坂の上からゴロ／＼落ちて行く、石が上に居るのが面倒だから下へ降りむとして降るのではない、石がゴロ／＼落ちる、是が無意識的活動、ところが犬が歩いて居るのは無意識的活動かといふとさうではない、意識的活動である、犬が此方に餌があるだらう、此方に自分の主人が居るだらうといふて歩くのが犬なり、猫なり、又鳥の飛んで居るのは意識して居る、右する方が宜い、左する方が宜い、東せむか、

道德の價値

自ら知る

西せむか、自ら意識して歩いて居るから、鳥や獸の歩いて居るのは意識的ですが動物は意識的に歩いて居る、意識的であるけれども、自分の究竟の目的、自分の目的といふものを意識して運動をして居るものではない、此目的といふものを意識して、活動して居るものは此宇宙間に唯人間があるだけであり、殊に高尚なる人があるだけであり、人間の中には随分無意識に活動して居るものがあるし、目的意識なくして活動して居るものがあります——ありまするが、先づ宇宙間の活動を別けて言ふならば、此目的を意識してやるといふことが即ち人間の特長でありませう、それでありませうから宇宙の目的は何か、人間の最も高尚なる目的即ちそれは宇宙の目的に随順する目的である、昔の人が云うて居る、人といふものは小體の天にして天は大體の人なり、是は中江藤樹先生が言つたのであります、人といふものは小さな天地である、それから人の大きいのが即ち天である、即ち此宇宙といふものは大なる人間と同じこととあります、既に此宇宙が即ち人間と同じもの、宇宙といふものが何等かの目的を有つて活動し、人間は宇宙の一員として目的を有つて活動して居るならば天地の則に従ひ、宇宙の大法に従つて行くといふことが人間自からの務めでなければならぬのであります、そこで道德の第一歩は汝自身を知る、ソークラテースといふ人が汝自身を知れ、諸君汝自身

を知る、是れ實に道德の根底であります、知識の根底でありませう、お前自身を知れ、其お前自身を知らぬ人が澤山ある、昔斯ういふ話があります、魯の哀公が孔子に問うて曰く、我れの家來に實に粗忽かしい奴がある、其居を移して妻を忘る、轉宅をして妻君を置き忘れて來た、随分粗忽かしい男だ、魯の哀公が孔子に遇うたときに自分の家臣に實に粗忽かしい者があつて其居を移して其妻を忘る、轉宅をして妻君を忘れた、孔子曰く、——孔子がそれに答へて云ふのに、それはまだ餘り粗忽かしいのぢやない、もつと粗忽かしいのである、桀紂は其の身を忘る、夏の桀紂や殷の紂王は妻を忘る、どころではない、自分の體を忘れてしまつた、世の中に妻を忘れたる人は少いが、其身を忘れる人は多いぞよと孔子が云はれました、随分其身を忘れる人間の方が多いです、其身を忘れる、其身を知る、自分の身を知るといふことが即ち是が倫理道德修養の根底である。(明德會講演)

これ予が曾て講説せる善惡論の一節なり。汝自身を知る、汝の身は宇宙の一員として天地の化育を助くべき者にあらずや、唯汝が善と思惟したる動機のみを以て善といふべからず。汝には目的の意識あり、偶々汝の行爲が世の福利に合せりとして遽かに善なりと斷すべからず。善惡の分別には自ら四段の階級あり、其の最も下等なるものは動機惡にして結果も惡なるものにして、之れ惡を爲すの目的を以て惡を爲し了せるなり。次ぎは動機は惡なりしならむも

善惡の四階段

道德の價值

結果の幸に善たりしものにして之れ偶然のみ、眞の善行にあらず。次ぎは動機善にして結果悪なるもの、之れ善に似たりといへども其結果の悪たるべきを豫想し能はざりし不注意の貴は辭する能はじ。吾等の目して善行爲となすものは動機も善にして結果も亦善なるものならざるべからず。動機をして善ならしめんとす。吾等は知識の啓發を忘るべからず。知識にして啓發せられざらんか、人生の本務を自覺する能はず、其の善と思惟し惡と意識することにして於て大なる誤謬なき能はず、これ吾等が知識の啓發を以て修養の一要件とし、個人的には知識の整理と知能の啓發をいひ、社會的には世態の通曉と知識の應用とを説く所以なり。されど知識のみにて道德的行爲の完成せらるべきにあらず、人は冷やかなる理性のみにて萬事を處理し得べきものにあらず。此に於て個人的には趣味の涵養と發展とをいひ、社會的には寛容の徳量、同情の發揮を以て缺くべからざる修養の要件とする所以なり。然れども此の二あるのみにして意志の鍛錬を缺く時は、善の動機も之れを遂行するの勇なく、善と知つて之れを行ふ能はず、惡と知つて之れを去る能はざる薄志弱行の徒となるなき能はず。吾等が更に個人的には氣力の蘊蓄克己修練をいひ、社會的には堅忍の精神、不撓の努力を説く所以のもの此に存す。蓋し智、情、意は人心の三方面にして此の三にして圓滿に修養せられたるにあらずんば動機善にして結果も亦善ならしむる能はず。よし如上三者の精神的方面に於て修養せら

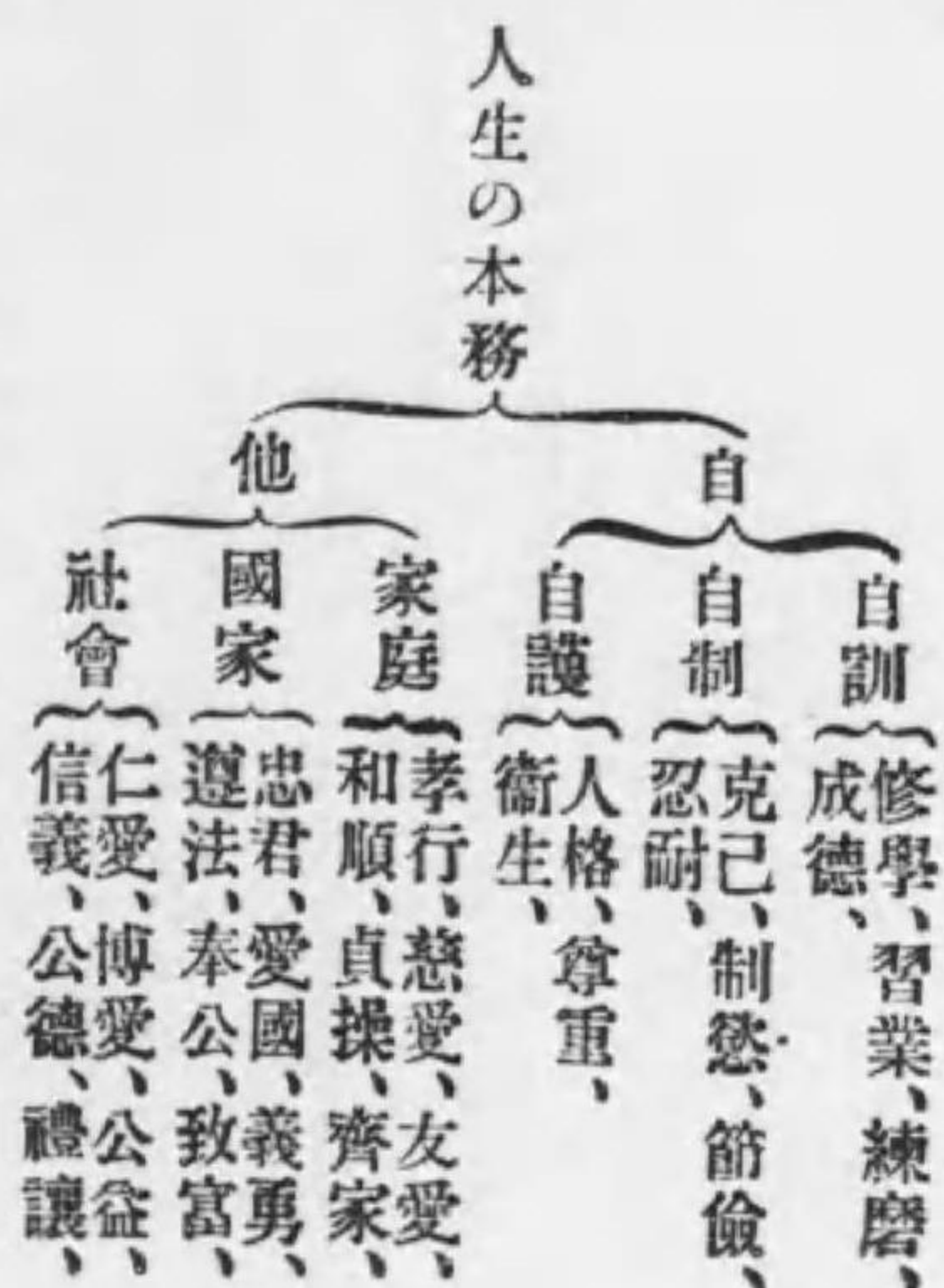
道德と  
修養

れたりとも、若し身體にして羸弱ならんか、其の志す所も行ふ能はず、却て他の扶助の下に育養せられざるを得ざるに至ること少からず。

所詮吾等の説く所の修養は全人格に亙り、其の遂行せんとする道德も亦唯獨り動機の善を貴んで結果の如何を問はざる自獨善主義のものにあらず、徒らに結果の善美を見て動機を問はざる皮相のものにあらず、心の淨きを喜べど世と没交渉なる仙人者流は吾等の取る所にあらずして、行の善なるを貴べど、心の汚れたる偽善の徒は斷じて斥けざるを得ず。吾等が心の淨きを喜ぶは其の行ひをして淨からしめんが爲めなり。吾等が行の善なるを貴ぶは其の善き動機より出でたるを以てなり。

道德の眞價値は宇宙の大道を體現するに偉大の力を與ふにあり。吾等は此の力に促されて手を實社會に下す、此に於て吾等の説く所の道德は現實社會を離れず、吾等の言ふ所の修養も亦家庭を離れ國家を離るゝものにあらず暫く吾等の本務を分類せんか、

本務の圖解



これ吾が提げ來れる道德の大綱にして、教育勅語の既に明示する所。されど吾等は唯だ人と人との調和を旨とせる道德のみを以て修養の義を盡せりとするにあらず。吾等は更に人以上の實在との調和に其の根底を置くにあらずんば此の人と人との調和たる道德の實行に力あらしむる能はずとするものにして、其のしばく宇宙の大道を喋々する所以のもの亦此に存す。

二、處世と道德

超越主義

世に一類の徒あり、人と人との調和に成るの道德を以て塵界の俗事とし、之れを超越するにあらずんば以て宇宙の大道に密接し難しとし、獨り山林に閑居して心境の清淨なるを樂み、こゝも亦浮世なりけりよそながら

思ひしまゝの山里もがな

(兼好)

と詠じて俗塵の我が心境を汚すを慨き、昔、支那にありしといふ許由が帝王の勅を受けて我が耳を汚すとして潁川の水に洗ひし如き、希臘にありしと聞くゾオゲネスが陋巷に放浪して寡欲に誇りしが如き生活は、凡情を脱却して、いと氣高きが如しと雖も、世を擧げて此の如きの人となりたらんには、國家の富強、社會の發達如何にしてか期し得べき。水戸光圀、曾て許由の圖に題していふ。

耳を洗ふ心の水は清けれど

ながれば汲まじ世を救ふ身は

社會的自殺

と、耳を洗ふ心や則ち清し、されど其の心を以て塵俗に處するにあらずんば何を以てか修養の至れるものとせん。超越的生活は社會的自殺なり。自己を社會の外に出して獨り自ら淨う

處世と道德



死道徳  
活道徳

せんとする者、其の修養の階梯としては閑寂も可なり、孤立も不可なれど、之れを以て修養の極致とし世と没交渉なるを誇るに至つては、人類生存の本義を無視するものにあらずや。之れを自調獨善主義の死道徳といふ。死道徳は世に效なし、吾等の言ふ所のものは活ける道徳なり、活ける道徳は活社會に處して活運動を試み得べき活力の源泉となるにあり。

岸に上らぬ渡ししりかな

人上人  
以上人  
の關係

利他博愛、共同生活を助け、其の進歩發展に貢献する所に道徳の要あり。道徳の源泉には人上人以上の實在との關係を要すべけれど、此の源泉にのみ安住して流れて人と人との關係に及ぼすなくんば、山上の源泉、一碧泓として風光の明媚を致すべきも、下つて現實社會を灌溉するにあらずんば利用厚生に於て何の功があらん。蓋し仁義道徳と利用厚生とを以て全く其の趣を異にするものとし、眞の道徳は現實社會を脱離するにあらずんば行ひ難しと思惟したりしは古代の迷想にして、眞の道徳は現實社會を離れず。眞の利用厚生は仁義道徳と相戻らず。下流の涸れざるは山上の源泉に由り、山上の源泉、流れて初めて其の用あり。人上人との調和を計るの道徳には、人上人以上の實在とを調和する根本的源泉あつて初めて確乎不拔なるべし。此の論移して以て處世と道徳との關係を示すべきにあらずや。人の世に處し

仁義道  
徳と利  
用厚生

目前の  
利と永  
久の利

て其の生存を保たんとするや、衣食住の供給悉く之れを他に仰がざるを得ず、而して其の他に仰ぐに缺くべからざるものは金錢なり。此に於て人は財利を求むるにあらずんば一飯の食も一糸の衣も之れを得る能はず。處世の要件は實に此の利を得るにあり。人々其の利を争ひて飽くことなく、世の修羅の巷となりて、俗情紛々互に他を排して毫も道徳の其の間に存するを認め難しと雖も、靜かに其の歸趣を窺はんか、利と道と終に離るべからず。利に二様あり、一を目前の利とし、他を永久の利とす、目前の利は道に違して之れを得べけれども、永久の利は道と相戻るべからず、或る商人、其子を戒めていふ、商人の道は底なき柄杓を以て水を桶に盛るが如し。一滴二滴の少量なりと雖も、酌んで倦ますんば以て桶に滿つべし。徒らに目前の利に走りて柄杓に底するを知ることも、桶に底なければ滿つるの時なしと。桶の底さは何ぞ、曰く道徳なり。道徳の根底だに確乎たれば、目前の利は薄くとも、終に永久の利を得べし、「商人生業鑑」にいふ、

屏風と  
商人

屏風と商人とは直ぐにたゝぬさいふ事あり、然し屏風は下のゆがみし所へたゝぬものなり。商人も其の通りにて五歩と一割の利は極りし徳用なり、此の外に大怒に非道の利を取るは下のゆがみし所へ屏風を立つるに異ならず、終にはこけること疑ひなし。

と、石川梅巖はいふ、

## 商人の道

商人の其始めを云はゞ古へは其の餘りあるものを以て、其の足らざるものに易へて互に通  
用するを以て本とすまかや、商人は勘定委しくして今日の渡世を致すものなれば、一錢輕  
しといふべきにあらず、これを重ねて富を爲すは商人の道なり、富の主は天下の人々なり、  
主の心も我が心と同じき故に我が一錢を惜しむ心を推して賣物に念を入れ、少しも疵相に  
せずして賣渡さば買人の心も初めは金錢惜しと思へども代物のよきを以て其の惜む心自ら  
止むべし。惜む心を止め、善に化するの外あらんや。  
と、利を事とする商人既に然り、況んや其の他をや。

道德に棲守するものは一時に寂寞たり。權勢に依阿する者は萬古に淒涼たり。達人は物外  
の物を觀、身後の身を思ふ、寧ろ一時の寂寞を受くるも萬古の淒涼を取る勿れ。(菜根譚)  
利と道との關係に於ても此の如きを見る。目前の利を争ふものは不義に流れて浮べる雲の  
如き榮華に誇り、一時に誇耀するも萬古に寂寞たり、永久の利を思ふものは道德に棲守する  
るが故に一時に寂寞たるも、萬古に赫灼たり、活ける道德には眞實の利之れに伴ひ、眞實の  
利は活ける道德に於て之れを得べし、利と道と相背反せりと見たるは目前の利と死せる道德  
に於ての立言にして、水久の利と活ける道德とは終に相悖らず。

## 道と利との調和

## 三、簡易生活

## 生計の獨立

世に處して道を行はんとす。吾等は先づ吾等自身をして獨立不羈ならしめざるべからず。  
吾等自身をして獨立不羈ならしめんとす、吾等は先づ其の生活に於て、敢て他の補助を仰が  
ず、我が力によりて之れを保持するの策を樹てざるべからず。自家自ら其の生活を保持する能  
はずんば何を以てか社會の共同生活を助け其の進歩發展に貢献することを得む。即ち身體上  
に於ては醫師其の他の扶助を受くることなく、剛健の體以て其の業を勵むべく、生計上に於  
ては親戚故舊其の他の恩惠の下に立つことなく、獨立特行、吾れ我が生を養ふ。此の如くに  
して初めて道を行ふべし。世には自ら道を行ふと稱して、然かも自家は他の扶助の下に立ち  
て米鹽の資常に空しきものあり。病弱は決して誇るべきことにあらずして、自ら招くの貧困  
も亦一種の不徳なり、世には不時の災厄あり、自ら求めざるに貧困に陥り、自ら招かざるに  
病苦に呻吟することなきにあらずと雖も、多くは平素の攝生其の宜しきを缺き、若くは平生  
の心掛當を得ざりしにあらざるはなし。由來東洋才子多病と稱し、蒲柳の身を以て誇るべき  
資質の如くに見做し、一簞の食一瓢の飲、人は其の清貧を以て欣慕すべしと爲す。才子は嘉  
みすべきも多病なるは喜ぶべからず。清貧に安するは賞すべきも負債山積、累を他に及ぼす

## 清貧と濁貧

## 簡易生活

勤と儉

濁貧は賞すべからず。清貧は分に安んずるに成り、濁貧は分を守らざるに出づ。世に處するの第一義は身體財産共に他の援助を受けざるにあり、身體の攝生に關しては暫らく之れを後章に譲り、此に財産に關する獨立談を説かんか、云ふまでもなく、積極的には勤勞にして、消極的には節儉なり、勤勞は以て産を成す所以にして、節儉は以て産を守るの所以たり、勤あつて儉なくんば、篋に水を盛るが如く、入るに隨て出で、儉あつて勤なくんば、壺中の水を守るが如く、終に腐敗せずんば止まじ。勤は以て道を行ふ所以にして、儉は以て徳を養ふ所以なり。世には四類の處世法あり。

- 一 勤なく儉なき者、
- 二 儉あつて勤なき者、
- 三 勤あつて儉なき者、
- 四 勤あり儉ある者、

勤なく儉なきものは社會の厄介物にして獨立特行、道を行ふの資質を缺くは亦喋々を要せず。吾等の望む所は勤あり儉あるの處世法ならざるべからず。浮世意の如くならず、足るを知り分に安んずるなくんば、其の慾望に限りなく、不平鬪々の情常に絶えざるべし、足るを知り分に安んず、之れ儉の徳なり。驕る平家の久しからずして三十餘年が榮華の夢、南海の

知足

ヒューム

春吹く風と消えたるも、さしもに萬代不易と驅はれし羅馬の帝都が土崩瓦解の慘狀を呈せしも此の徳に於て缺くる所ありしに因す。況んや盛衰の顯著なる個人生計に於て此の儉を守らんか其の衰滅實に目睫の間にあり。蓋し儉の一字には自個の慾望を制御する克己の精神に出で、分に安んじ足ることを知りかては不時の準備に供する遠慮にも基きて家計の秩序を保ち獨立を致すの諸徳を備ふ。英國の史家ヒュームは實に節儉の力を以て其の名著を公にしたるの人なり。彼れ素と良家の子たりしも、幼にして父を失ひ、二十三歳にして笈を負うて佛國に遊び、僅少の學資を以て業を遂げんとし、其の自叙傳中に記していふ、

佛國に在りて予は一生の生計を立て、嚴格なる節約によりて富の不足を補ひ以て自己の獨立を保持し、文學上の才能を發揮するの外、總ての目的を輕視せんことを決心したり。

さ、かくて彼れの第一回の出版は失敗に終りたれども、毫も撓むことなく、此の著書を公にして漸く效を奏したれど、尙ほ之れによりて金錢上何の得る所なく、節約に節約を重ねて其の獨立を傷くることなかりき。其の友アダマスミス、彼れを評していふ、

ヒュームは其の財産の最少の境遇にありても尙ほ慈善と博愛との行爲を忘れざりし蓋し彼れの節儉は吝嗇の上に築かれたるものにあらずして獨立の上に出でたるものなり。

さ、吝嗇と節儉との別は今更此にいふの要なし。ヒュームは實に此の節儉を以て獨立を妨げ

貧に處  
するの  
心

ざしなり、二宮尊徳翁も亦節儉を以て獨立を得たる人なり。彼れ治産の要を語りていふ。心を貧に處する者は常に富み、心を富に處する者は必ず貧となるを免れず。例へば茲に百石の田産あるものにして、我が田産は五十石しかなきものさ心得、常に五十石だけの生計を爲さば常に必ず富まん、然るに五十石の田産しか無きものにして我が田産は百石あるものさ信じ、常に百石の生計を爲す時は終に無産の貧者となるべし、要するに何時も貧に居る心持なれば、家門は榮え、富に居る心持なれば家門は衰ふるものなり、故に心は常に貧に處して敢て富に處することなかれ、これ處世の秘訣なり。

家政の  
經驗の

さ、之れを家政の經驗に聽く、百圓の月收あるもの百二十圓なり三十圓なりを以て生活するはやがて其の産を破るの基にして、百圓を以て生活するは可もなく不可もなければ、不時の備なきが故に失敗を免れず。七八十圓にて生活してこそ適當さいふべけれど、三四十圓にて生活せんとするは吝嗇に流る。家族の人數職業の如何によりて此の比例のみにては定め難けれど、大凡此の如くにして誤なかるべきか。同じ人語りて國家の財政は出るを計りて入るを制すべけれど、一家の經濟は入る計りて出るを制せざるを得ざれば、月収を基礎として豫算を確定し、生計費、臨時費等及ぶべき限り明細に定め、其の以外一歩も出でざるの企畫を爲し、若し負債あれば第一に償却の途を立て、生計に累せらるることなきに至らば到底世

高尚の  
理想の  
簡易の  
生活の

に處して道を行ふ能はざり、理想は高尚なるべきも生活は簡易なるべし。汝が日常使用せるもの果して不用の品なきか、汝が生平需用する所のもの果して必須の物のみなるか。汝は此の不用の品の爲めに其の生活を繁雜にし、此の不必須の物の爲めに其の家計を苦むることなきか。汝の家計をして規律あらしめよ。汝は財と時とに於て多くの剩餘を得べく、汝の生計をして簡易ならしめよ。汝が道を行ふの力と資とは其の内に給せらるべし。我等は亂雜なるが爲めに自ら苦み、不規律なるが爲めに獨り悶ゆ。遺教經に曰く、

諸の苦惱を脱れんと欲せば、知足を觀すべし。知足の法は輒ちこれ富樂安穩の處なり、知足の人は地上に臥すも雖も、尙ほ安樂なりと爲し、不知足の人は天堂に處るも雖も、また意に適はず、不知足の人は富むも雖も、而も貧しく、知足の人は貧しき雖も、而も富む。さ、足るを知るが故に節制あり、節制あるが故に簡易なり。簡易なるが故に規律あり規律あるが故に餘裕あり、餘裕あるが故に心常に安し。世上紛々足るを知らざるの徒妄りに外見を街うて一日の安なく、終に負債の爲めに壓迫せられて其の獨立を傷く世にも恐るべきは足るを知らざるに出でたる負債なり、此の負債によりて虚言、卑劣、羞恥、心勞、欺瞞等の惡徳を生じ終に墮落の深淵に陥る。

決して負債を作ること莫れ。汝自身の分限に安んぜよ。一年二十磅を以て生計し能はざる

簡易生活

負債

ものは四十磅を持つまでも生計し得ざるものなり。彼等は逸樂の人なり、實質に比して高きに過ぐるの一種なり。

(シヨーツ、ハーバート)

と、分に安んじ足るを知り、其の生活に規律あらしむ、これ吾等が處世の要義なり。予は屢く慈受深禪氏が、

屋可<sub>レ</sub>蔽<sub>ニ</sub>風雨<sub>一</sub>、何苦<sub>聞</sub>華麗、堯舜古聖君、光宅天下被、茅茨未<sub>ニ</sub>嘗剪<sub>一</sub>、土塔亦不<sub>レ</sub>砌、不<sub>レ</sub>知爾何人、麟々居<sub>ニ</sub>大第<sub>一</sub>、

さいひ、雲棲大師が、

食可<sub>レ</sub>充<sub>ニ</sub>饑腸<sub>一</sub>、何苦<sub>尙</sub>腹靡、孔顔古聖師、悅心飽<sub>ニ</sub>義理<sub>一</sub>、一簞復一瓢、飯<sub>ニ</sub>蔬食<sub>一</sub>飲<sub>レ</sub>水、

不<sub>レ</sub>知爾何人、肥甘滿<sub>ニ</sub>砧几<sub>一</sub>

衣可<sub>レ</sub>蓋<sub>ニ</sub>形腸<sub>一</sub>、何苦<sub>競</sub>文飾、迦葉首<sub>ニ</sub>傳燈<sub>一</sub>、聞譽千古溢、頭陀百絆鴉、老死終弗<sub>レ</sub>易、不

知爾何人、遍身皆綺縠。

といへるを以て自省の資とし、俳諧寺一茶勸農の詞を以て簡易生活の福音とす。

風流を樂しむ花園ならで、後の畑前の田の作物に志し、自ら鋤を採つて耕し、先祖の賜と命の親に懇をつくし、芳野の櫻、更科の月よりも、己が業こそ樂しけれ。朝夕心を留めて打むかふ菜種の花は、井戸の山吹より好しく、麥の穂の色は、牡丹芍薬より腹ごたへありと

覺ゆ。朝顔より夕顔こそよけれ。萩菊よりも芋牛蒡に味あり。すべて花紅葉より栗柿は實の植木なり。稻の穂並の賑はしく、菊の花より腹滿る心地して、粟穂の鶉、野邊の蟲の音聞くが面白く、遠き名所舊跡まり近き田甫の見廻りが飽かず、松島鹽釜の美景より飯釜の下肝要なり。上作の名劍より鎌鋤は調法なり書畫の掛物より、掛けて見る作物の肥を油断せず。投入立花の工より、茄子大角豆の正風なるが見處多く、茶湯蹴鞠の遊より、遊茶を呑んで昔話こそをかしけれ。玉の臺より茅葺の家居心易く、高きに居られば、落るあぶなげなく、迷れば悟らず。念佛の替りに業を怠らず、實義を盡すは神詣に比し、仁者に習うて山には木を植ふ智者の心を汲んで田の水加減を専らにし、珍肴鮮肉の料理より、錢入らすの雑炊が後腹痛める氣遣なし。すべて世の中は、飛鳥川の流れ、昨日の淵は今日の瀬となる如し。唐の咸陽宮、萬里の長城も、終にはほろび、平相國の驕りも一世のみ。鎌倉の將軍も三代を過ぎず。北條足利の武威盡き、織田豊臣の榮も遂に一代なり。時すぎ世かはれば、誠に夢の如し。世に稀なる珍味も舌の上にある内、伽羅蘭麝の薫もかぐ中のみ。樂は苦の基、財寶は後世の障り、遊興は暫時の夢。他の富も羨まず身の貧も歎かず。唯慎しむべきは貪欲、恐るべきは奢りなり。抑々田地は、萬物の根源にて、國家の至寶なれば、父母の如く敬ひ、主君の如く尊み、妻子の如く育み、寸地をも捨てず、何處にても鋤先の天

眞面目  
の生活

下泰平、五穀成就を願ふより外さらになし。これ簡易生活によりて得べき快樂にあらずや。自ら節して敢て他を煩はさず、不羈獨立、其の生を營む、何の累か我が頭上に加らむ。されど吾等は唯だ消極的なる這般の覺悟のみを以て世に處せんとするにあらず、大に節するは大に用ゐんが爲めなり、簡易生活は外見と虚飾とを去りたる眞面目の生活なり、獨立特行の根底を堅固にするものなり、脚底既に動かす、以て行ふべし。佛源禪師いふ、

財を惜  
む

君子は財を惜む、之れを用ふるに道あればなり。

さ、道の爲めには千金を惜まず、私欲の爲めには一錢を費さざる所に節儉の功あり、昔、眞田昌幸の高野山に隱遯するや、帶ぶる所の大小刀、其の欄糸悉く木綿を用ひ、人の之れを笑ふものあれば即ちいふ、「大丈夫は外見の美を貴ばずして内實の優れを喜ぶ、見よ、我が大小刀其の欄糸は巻くに木綿を以てすれど共にこれ五郎正宗の名刀なり」と。傳へて以て武士道の龜鑑とす。吾等が財を用ふるの道亦以て此の如くならざるべからず。

#### 四、努力生活

儉の徳は以て其の生活を簡易ならしめ自己の社會に於ける獨立の基礎を鞏固にすれど、吾

人文發  
展の鍵

勤勞と  
人道

等の生存をして意義あらしめんには勤勞努力を以て道を行ふ積極的方面を忘るべからず。既に云ふ如く人の勞働を以て生きんが爲といふは無意義にして、人は働くが爲めに生き、道を行はんが爲めに存するものなれば、勤勞努力は人道の大本、人文發展の鍵鑰なり。天惠の倉庫は此の鍵鑰を以て開かれ、生存の意義は此の大本によりて發揮せらる。盛んに節儉の必要を説き簡易生活を奨励したる二宮尊徳翁は又勤勞を説て、

天理は萬古變せず、人道は一日怠れば即ち廢す、然れば人道は勤むるを以て尊と爲し自然に任ずるを尊ばず、夫れ人道の勤むべきは己に克つての教なり。

己に克つて以て道に勤む。これ翁の所謂天地の化育を助くるの道にして、

夫れ我が道の尊む増殖の道は直に天地の化育を賛成するの大道にして、米五合にても、麥一升にても、苧一株にても、天ツ神の積置かせらる、無盡藏より鉄鎌を以て此世上に取出す大道なり、これを眞の増殖の道といふ、尊むべし、務むべし。

天つ日の恵み積み置く無盡藏

鉄で掘り出せ鎌で刈り取れ

さ、朝々、日は東より出で、夜々、月は西に沈み、天地一日も其の活動を止めず、苗々たる春草、生々を怠らず、滾々たる水流も亦終に石を穿ち、萬象常に其の爲すべきを盡くす。

#### 努力生活

百丈

昔、百丈禪師なるものあり、齡既に九十、しかも尙ほ其の作務を怠らず常に其の徒を戒めていふ、

一日作さずんば一日食はず。

と、傳へて以て美談とす。一日作さずんば一日食はず。これ吾等が處世の覺悟ならざるべからず。青年重ねて來らず、一日再び晨なり難し、我が世に存するの一日は眞にこれ復び遇ひ難きの一日にして時々刻々、晝夜を捨てざる水の流れにも似たる光陰は過去の中に消え去るにあらずや。稻葉濃州、曾て長日の勤仕、懈怠の念を生ずるをいふ澤庵禪師、爲めに左の語を書して誠めていふ。

此日無<sup>ニ</sup>再日、光陰一尺壁。

あさましや思へば日々の別れかな

昨日の今日に又も遇はれば

と、濃州、常に之れを服膺して怠るなきを得たりと、時は金なり、金の空費すべからざるが如く、時も亦空費すべからず。人の一生は時間の連鎖なれば一時を空費するものは自ら生命の一分を削り去るものなり、之れをフランクリンに聞く、

汝、生涯を愛するか、さらば汝の時間を徒費することなかれ、汝の生涯とは汝の時間より

別日々の

時間の活用

時間の厳守

成るものなればなり、

と、汝の生涯を愛す、汝は汝の時間を活用せざるべからず。如何に時間を活用すべきか。それは汝が職務に對する怠りなき勤勞努力の外なきにあらずや。唯だ一日、唯だ一時、唯だ一分、唯だ一秒、嗚呼、これ去つて復た來らざるなり。

既に一たび去つて復た來らざれば時間の規律を嚴守するはこれ努力生活の要義たるや言を待たず。ジョン、シンクレーアは其の大學に遊べる頃より一日の時間を左の如くに配當して之れを實踐し、八十一歳の高齢に達するまで孜孜として倦まず、終に生前著はす所の書十種十八卷、其の監修の下に編纂せられたるもの四種合せて百六卷、各種の小冊子に至りては三百六十種を下らざるの大著述を成しぬ。

睡眠 七時間、

服装 半時間、

食事と娛樂 二時間半、

運動 二時間、

學業 十二時間、

佛語辭書によりて有名なるリットトレは毎朝八時に起きて書齋の洒掃中は階下に於て雜務を執掌し、九時より食事の時刻まで校正に従事し、一時より三時まで學藝時報に筆を執り、三時より六時まで辭書を編纂し、六時に食卓に就きて一時間を費し、七時より翌朝三時まで辭書の稿を續ぎて寢に就き、五時間の睡眠に元氣を恢復し復た八時に起きて怠ることなく、八十

努力生活

の高齡を以て逝きしが、佛國學士會院が全力を費しても三十年間を要すべき事業を六十二歳より着手し獨力を以て完成したりといふ。これ皆時間の嚴守より來れる秩序ある努力の結果にあらずや。更にジョン、ラボックが其の著「人生の快樂」に於て引用せる諸種の格言を擧げしめよ、

懈怠

ツエレミー、テールロルはいふ、懈怠は世界に於ける最大の奢侈物なり、そは極めて貴重なる時間を放棄して顧みざるにあり。

チエスターフィールド公、曾て其の子を戒めて、時を徒費するはこれ得べき利益を失ふなり、之に反して能く時を利用するものは之れ夥多の利子を付して貯蓄し置くに異ならず。ゲーテはいふ、爾にして眞に熱心ならしめば、後云はず今直に此の瞬間に於て爲すべきを爲し始むべし。

水車の  
喻

勤勞は時の節儉にして、努力生活の要義は時間の嚴守にあり。

精出せば氷る間のなき水車

この心は商人職人たりとも、隨分精を出して稼ぎさへすれば金錢の通用滞らず、くるくさまはるこそ水車の如し、寒中にも大晦日にも滞ることあるべからず。若し不精にしてまはらざれば氷りて滯り勝ちなり。

(心法抄)

シドニ  
スミス

龜勉努力して怠るなくんば何の業かならざらむ、南都の明證は學の成らざるを慨きて寺を逃れんとし、偶々雨滴の地に下りて穴を穿つを見て發奮激勵したりと。シドニスミスは其の座右に、

我、誓つて道路を發見せん、能はずんば自ら之れを開かんのみ。

と掲げて自己の啓發の料としたりと。運は天にありといへども、之れを開くは腕にあり、勉めて倦まずんば天下何事か成らざらむ。倫安と姑息は汝が開運を妨ぐるの荆棘にして、處世の前途に横はるの毒蛇たり。之れを拓き之れを除きて其の行ふべきを行ひ其の爲すべきを爲す、此に大道の發現あり、吾等は一面には簡易生活に安んじて其の分を守るを忘れざるに共他面に於ては勇猛精進、歩々向上の大道に向はざるべからず、蓋し吾等の處世は保守と進歩との兩面を存す。保守的一面のみを以ては其の進運を計るべからず、進歩一面のみを以ては常に心中悶々の情絶えず、一步は止め、一步は出す、徒歩的精神こそ吾等が處世の覺悟なれ。

處世の  
兩面

徒歩的  
精神

偏に歩を進むるに急にして兩足等しく出さんとするれば必らず倒れ、唯だ分に安んずるに専らにして兩足を出さずんば歩む能はず、吾等は此の兩面を調和して能く道を行くことを得、處世の大道も亦之れに異らざるなきか、古人は彼の進歩に急にして心中悶々の情絶えざるを

努力生活



向上

戒めて、

上見れば及ばぬことの多かりき

笠きてくらせ人の世の中

さいひて知足安分の要を説き、一足安立の地を得せしめたと共に、

下見れば我れに優りしものはなし

笠ざりて見よ空の高さを

と示して因循姑息、進歩向上の志なきものを戒めて一足踏み出さしめんとす、人の世に處するの所詮は實に此に在り。歩々其の脚痕下に注意して向上を怠るなくんば千里萬里豈に必ずしも遠しとせんや、昔、江戸より京都に使用する飛脚を業とする老人あり足頗る健にして常に壯者を凌ぐ、同日同時に江戸を出でしものにして、何時しか二三日の遅れを此の老人に取る。壯者、禮を卑うして歩行の法を老人に問ふ、老人答へていふ、東海道は坦々として何の嶮なけれど、街道處々に赤き石あり、此の石だに踏まざれば足の疲れ少くして終に諸子を凌ぐのみと、壯者其の教を奉じて脚下に注意し歩々赤石を求むるに五十三驛、一もかかるものなし、而かも行程平生に越え常に十日を費す所、七日にて達す、歸路亦其の石を求むるに痕跡どもあらざりしも、行程の早きこと往路の如し、此に於て老飛脚を問ふて赤き石の求め難

飛脚の逸話

きも其の行程平生に越えたるを告ぐ、老飛脚何々大笑していふ、赤き石もさよりあるなし、唯だ汝の脚痕下に注意せしめたるのみと、一話以て處世の箴とすべきにあらずや、歩々其の脚痕下に注意して怠ることなき努力的生活こそ、汝が成功の要義なれ。

### 五、趣味生活

仔細に世人の生活状態を視察するに大約之れを五類に分つことを得べし。一は最も擯斥すべき罪惡生活にして惡を行つて恥づることなく、自らいふ、人生僅五十年、終に死の運命を免るべからず、營々として働いて抑も何かせん、寧ろ太く短く愉快に生を送るに如かずと、彼等に道念なく彼等に正義なし、共同生活を害し進歩發達を妨げて獨り自ら樂まんすと、彼等にして跳梁跋扈せんか、社會一日の安なく國家一瞬の寧なし此に於て法律なるものあり彼等を捕へて之れを社會と隔離し、其の自由を奪つて惡業を逞うせざらしめんとす、二は國法の罪人たらざるを以て生活法の範圍とし、法律にだに背かずんば如何なる罪惡も行つて不可なるなしと心得、唯だ法に觸れざるを以て足れりと爲す法律的生活にしてこも亦未だ人生の本務に於て貢獻する所のものといふべからず、國家は素より何等の制裁を彼等に施す能はずと雖も、社會の共同生活を害すること少からざるものあり、殊に文明國の法律は正條に遵據

罪惡生活

法律生活

趣味生活

社會の  
制裁に  
基く生  
活

して其の疑はしきものは之れを罰せざるが故に僅に一歩の差によりて公々然社會に横行せるものを生じ、法律之れを許すも社會に於て忌避せらるゝもの少からず、三は此の社會の制裁を範圍として人に誹られじ譽められたしこの用意を以て生活するものにして滔々世間此の類最も多し、彼等が善を爲すは名聞を得んが爲めなり、彼等が悪を爲さざるは世評を恐るるが故なり、之れを前者に比ぶれば優れること數等なりと雖も、未だ以て人生の本務を悟了して道を行ふものさいふ能はず。四は世評の如何を問はずもあれ、社會の共同生活を助け、其の進歩發達を計るは人生の本務なり、我れ此の本務を行ふ、これ人たる我れの當に爲さざるべからざるの事たりと、之れを道義的生活さいふ、其の生活を簡易にするは自ら守る所を守るべかり、其の努力奮闘止まざるは其の盡くすべきを盡くすなりと、殆んど生活の上乗に類すも雖も、尙ほ一絲の其の間に蟠るあつて吾等の理想と同じからず、吾等は更に五の趣味生活に入らざるべからず、道義的生活には義務敢行の思想ありて其の本務を完うする上に於て聊かながらも苦痛の伴ふ感あり。趣味生活は此苦痛より解脱し、本務遂行の上に愉快を感じるにあり、予曾て此の二者を説明して、

道義的  
生活  
道義的  
生活  
趣味的  
生活

既に宇宙の大道を感得し人生の要路を看取す、吾等が生活の本義は明かになつたのである。吾等は生きんが爲めに働くにあらすして働くべき爲めに生くるのである、其の働くは生

存の爲めにあらすして道の爲めでなければならぬのである。かく考へて來ると我等は此生活を以つて一種の苦痛なりとは考へないであらうか。誰れも働きたいさいふものはない、遊んで居りたいさいふのが人の常情である。それに對つて働かればならぬといふのは強ひて厭ふべきことをなさしむるので何の面白味もないこととなる。人生はしかく無趣味なものであらうか。人生を斯く無趣味なものとするれば、生活は一つの苦痛である。吾等は此の苦痛を忍んで生活せねばならぬのであらうか。道の爲めに盡くすさいふ名は立派であるが、我身に取つては苦痛ではなからうか、朝起きといふことは善いことであるが、眠い目をこすりながら起きればならぬといふことは苦痛ではないか。自身が思ふまゝに放恣なる生活をしてこそ楽しくもあれ、道を行はねばならぬさいひ、道に背いてはならぬといふのは埒に繋がれたる悍馬の如く全く自由を束縛せられて居るので、毫も樂しきことはない。古人が人生を苦の海といひ涙の谷さいうたのも無理もなきことと思はれる。併しこれは未だ修養其の功を積まぬからで、修養其の功を積んで我と道と一になつたならば思ふがまゝに道に順ずることになるので、朝起きはつらいことであるが、一日より二日、一月より二月、一年より二年、三年、四年と早起きの習慣を造れば自然に起きらるゝといふ所にまで達し、此所に達すれば早起きをせれば不快を感じるさいふやうになる。かくなれば知らず識らず

義務と  
權利

道に順ずることが出来るので何の苦痛もないではないか。かくいへば又其の修養功を積むといふことが苦痛であるといふ人があらう。然り強ひて狂ひ易き心を止め、散じ易き妄念を抑へて精神を修養するといふことも苦痛といへば苦痛でないことはない。されど、それは其の當初のみの苦痛で、これを繼續して行けば慣ひ性となつて苦の苦たるを感ぜぬやうになる。繼續して行けば苦の苦たるを感ぜぬやうにならうで、其當初は既に苦痛でそれを繼續するのも亦苦痛ではないかといふ人があらう。論歩もこゝまで進んで来れば直に根本義を明にすることが出来る。元來苦といひ樂といふのは其人の心の持ちやうで、爲さなければならぬ義務であるに感ずればこそ苦痛であるが、喜ばしや今日も亦かく爲すことが出来ると思へば快樂である。朝早く起きて今日も働かねばならぬと思ふからつらいのであるが、今日は一日遊び暮らすことが出来ると思へば自然に朝早く起きらるゝではないか。道を行ふといふことを義務と思ふから苦なので、權利と思へば樂である。これが道義的生活と宗教的との異なる所で、道義的生活は義務であると思ふて道を行ふのであるが、宗教的生活は權利であると思つて行ふのである。權利といふのは少しく穩當な辭でないが、先づ一應はかう見ることが出来る。更に適切なる語を以ていへば、道義的生活は義務の生活であるが、宗教的生活は感謝の生活である。生を此天地に受け自から其化育を助くるの業を

感謝の  
生活趣味生活  
と宗教生活

勵むことを得る、於戯これ何の幸ぞやと感じてゆくので、厭や／＼ながら行ふのでなく、樂しんで行ふのである。樂しんで行ふといふ中に生活の趣味は存するのである。趣味生活は宗教生活なり。其の簡易生活に於ても唯だ努めて己に克ち、強ひて慾を制するのみならず、其の克己制慾の上に無限の趣味を感じ、

何のその百萬石も筐の露

と喝破する安心の一境を拓き、

我が心秤の和し、人の爲めに低昂を作す能はず。

(諸葛孔明)

と毀譽の外に超然たる見地を養ひ、其の努力生活に於ても、人を相手とせずして天を相手とし、不斷の力行に無上の趣味を感じ、道を行ふを以て嚴格なる道德上の命令に出づとは思推せず、

義務を以て寧ろ親切に且つ慈悲ある母の如く、常に吾等を冥護して此の世界の中に於て憂慮なからしめて平和を與へんとするものなり。

(ラボツク)

と思惟し感謝怡悦の情を以て之れを遂行する所に、眞に生活の趣味を感得す。苦樂は悉く汝の心にあり、汝の心にして歸着を得んか、煩悶懊惱跡なく消えて、

春有百花秋有月。夏有涼風冬有雪。若無閑事掛心頭。便是人間好時節。

趣味生活

同情

(無門)

たるべし。如何にせば吾等の心をして安からしめ吾等の生活をして趣味あらしめ得べきか。生存競争優勝劣敗の社會生活を圓滿ならしむる同情、これ實に趣味生活の要素なり。乾燥無味なる社會も之れあるが爲めに春風駘蕩の和樂を得賤が伏屋の佗住居、親は子を、子は親を、夫は妻を、妻は夫を相思ひ相慕ふ中に和氣の霽々たるものあり金殿玉樓の裡も親は子を疑ひ、子は親を疎んじ、夫は妻を忌み、妻は夫を嫌ひたらんには秋風蕭條、生活の趣味何れにか求むべき、源義經の屋島に戦ふや、其の臣佐藤繼信彼れに代りて能登守教經に射らる、義經、繼信の手を執つていふ、「主となり家來となる宿世如何なる縁にてありけん、死なば諸共と思ひしに汝を先き立つるこそ遺憾なれ」繼信莞爾として「抑も初めて國を出でしより命は君に捧げしに、今、君の御身に代りて死すること、繼信、身にとつて此の上の喜びやあるべき」と主は臣を、臣は主を相思ふ所に殺伐なる戦記に一枝の花を添へたるにあらずや。俳諧師松雨の妻が、

我が子なら伴にはつれじ夜の雪

の一句は同情の念溢れて今尙ほ人口に膾炙し、

思へたゞ使ふも人の思ひ子を

我が思ひ子に思ひくらべて

の教訓は人心の秘奥を突く、人と人との關係は此の同情によりて初めて趣味あり。我れ同情を以て人に接す、何人が動かざらむ、社交の快樂は此に在り、マアカス、アウレリアスいふ、汝は己れを樂ましめんと欲せば汝と共に生活する所の美德を思ふべし、何となれば美德の我が知れる所の人に於て顯るゝを見るより樂しきはなし。

こ、同情の普及は唯だ人と人との間のみならず、これを一切の動物に及ぼして、やれ打つな蠅が手をする足をする

(一茶)

瘠せ蛙まけるな一茶こゝにあり

(同)

といひ、又は

行水のすて所なし蟲の聲

(鬼貫)

てすりにもたれて化粧の水を

何處へすてよか蟲の聲

(高杉晋作)

さ、これ實に徳禽獸に及ぶの概あり、之を植物に及ぼして、

朝顔に釣瓶とられて貰ひ水

(千代)

といひ、此の觀念を擴充して一切萬物に及ぼし、

趣味生活

徳、禽  
獸に及  
ぶ

天地の趣味は  
顯現

おもしろや散るもみぢ葉も咲く花も

おのづからなる法の御姿

(青樹)

と観するに至ては、天地を以て趣味の顯現、同情の一塊とし、我が日常生活に無限の趣味を感ずるにあらずや。吾等の謂ふ所の宗教生活なるも則ち之れなり、セント、メルナードは宗教の見地より生活を四段に分類して、

宗教の生  
段の四

- 一 己の爲めに己を愛す
- 二 己の爲めに神を愛す
- 三 神の爲めに神を愛す
- 四 神の爲めに己を愛す

とす。己の爲めに己を愛するものは主我的生活なり、何等の趣味あるなし、己の爲めに神を愛するものは之れ宗教を主我的に利用するものにして未だ生活の眞趣に合せず神の爲めに神を愛す、其の敬愛の清き喜ぶべしと雖も、終に現實生活と没交渉たる超越主義に流るゝの弊あり。吾等の望む所は吾等の現實生活に於ける一舉一動を以て直に神に對する感謝の生活なりとし、吾等が日常の行動を以て佛祖に處する報恩の作業なりとするに至て、此に興味を得するにあらずや。京都に大黒屋傳兵衛なる質商あり頗る慈善の念に富み、少しく利あれば

活宗教の  
活面目

常に之れを貧民に施興す、中山の智眞老師、其の見地を試みんと欲し、店に入れば、傳兵衛、帳合に餘念なし、老師直に問ふ、汝、今何をか爲すぞ、傳兵衛答へて曰く、大般若經を轉讀すぞ、老師、更にいふ、汝、其の大般若經によりて何等の功德をか得る、傳兵衛、懇懇に禮して、我れ日夜此の經を轉することによりて家内餓えず凍えず、且つ貧民を賑はすことを得と、活宗教の活面目は此に在り、かくて以て其の生活を趣味あらしむるを得んか。

我の前なる者、千古萬古、我の後なる者、千世萬世、假令我れ壽を保つ百年なるも一呼吸間のみ、今幸に生れて人たり庶幾くは人たるを成し終らんのみ。

夢中の我は我なり、醒後の我は我なり、其の夢我たると醒我たるとを知るは心の靈なり、靈は即ち眞我なり、眞我は自ら知る、醒睡に間なし常靈常覺、萬古に互りて死せず。

(佐藤一齋)

## 第四章 修養法

### 一、身體の修養

目的の中に手段は定められ、手段の中に目的は期待せらる。西せんとするものは西に向ひ、東せんとするものは東に向ふ、門を出づる一歩以て其の志す所を窺ふべし。上來縷述せる修養に關する諸種の論議は早や既に其の手段方法を明示して復た重説するの要なきに似たり。雖も、暫く茲に其の洩れたるを補ひ、其の散れを集めんか、其の修養せらるべき主體の上より云へば之れを身體の修養と精神の修養とに分つべく、其の修養の方法より云へば靜中の修養の動中の修養とに分つべし。蓋し身心の二や分つべからず、動靜の二や偏すべからず。健全なる精神は健全なる身體に宿り、病者の身體常に病的思想に流るゝを免れず、靜あつて動なきものは自調獨善に陥り、動あつて靜なきものは安立の地を得るに由なし。衛生の遵守、健康の保持は身體修養の靜的方面にして之れあつて能く屈勉力行の動的方面を完了すべし。身體にして羸弱ならんか、志を立て、道を行はんとするも、身、心に伴はず、腦、手、一ならず、徒らに心神を過勞して而かも其の功なきに了らむ、身體の健康は人生の本務を遂行する

目的と  
手段と

健康と  
生活

に於て第一の必要條件たり、更に其の遂行に趣味あらしめんとするに於ては健康は肝要なるはあらざるべし。ロングフェローはいふ。

健康を伴はざる生活は重荷なり、されど健康を伴へる生活は愉快なり。

と、吾等の身體は精巧なる一個の機械なり。二百個の骨格は個々其の用を異にして圓滿に調和せられ、五百の筋肉と無數の血管とは之れを滋養し、無數の神経は之れを齊整し、其の血管が中心たる心臓は一年三千萬回の鼓動を怠らず、二百萬以上の汗腺は體温を整へて皮膚内外の交通を掌り、伸さば數里に互るべき動脈、靜脈、毛細管あり、血球と稱する小有機體は算すべからざるの多數に達し、僅に一眼球に就て見るも水晶體あり、水様液あり硝子様液ありて各々精巧を究め、硬膜、脈絡膜の微妙なる、紙より薄きもの九層より成る、網膜は之れを掩ひ、其の内部は光の振動に感ずる三百萬の錐體、三千萬の柱體これを組成すといひ、更に活動の源泉たる腦に見んか、灰白色の細胞は其の數六億に下らず、是等の細胞皆各々數千の分子を有し、其の分子は又數千百萬の原子より成ると、粗雜なる一個の時針、一臺の機械だに少しく注意を怠れば直に其の運轉を止む、況んや此の精巧なる身體をや、グラッドストーン、曾て人に語りていふ、

矛が受けたる健康は常に一晷に二十五度咀嚼せよといへる古言を守れるにあり。と、些少

グラッド  
ストーン

病の十因

の注意は以て其の健康を保持するに足る、古來の身體輕賤を排し、夙に身心不二の教旨を以て立つ佛敎には、醫經なるものあつて衛生の注意を示し。

- 一 久坐 (不動不足)
- 二 不臥 (睡眠不足)
- 三 食不量 (食物の過不足)
- 四 憂
- 五 愁
- 六 疲極 (過度の勞動)
- 七 淫佚
- 八 瞋恚
- 九 忍大小便
- 十 制上下風

横死の九因

- とし、僧祇律には横死の九因を算して、
- 一 饒益にあらざる食と知て貪り食ふ、
  - 二 食を量らず、
  - 三 内に未だ消せずして更に食ふ、
  - 四 強ひて咽下す、
  - 五 己に消して出でんことを強ひて制す、
  - 六 食、病に應ぜず、
  - 七 病に隨て算量せず、

素問

管仲と孔子

八 服藥を怠る、

九 智慧多くして心を調ふ不能はず、

と、支那最古の醫書たる「素問」には、

飲食節あり、起居常あり、妄に作勞せず、精神内に守らば、病安んぞ從ひ來らん。といひ、管仲が、

起居時あり、飲食節あり、寒暑適すれば則ち身利して壽命益さん、起居時あらず、飲食節せず、寒暑適せざれば則ち形體累して壽命損せん。

と示し、孔子家語に、

人三死あり、而も其の命にあらず、己れ自ら取るなり、夫れ寢所時ならず、飲食節あらず、逸勞度を過すものは疾苦之れを殺す。

さあるもの皆な衛生保持の必要をいへるなり。支那古來、仙術なるものあり、養氣の法を實要して無病長生計る、河合清丸氏其の著「仙家秘訣無病長生法」に於て之れを分ちて五として示して曰く、

一 素食法 此の法を修し得る時は腸胃は壯健にし、能く食物を消化し、一切の飲食を悉く擧げて全身の滋養に供する故に食物より生ずる處の病根を其の根本より截斷す。

身體の修養

素食法

導引法

一、これ近時の所謂菜食論にして説の可否は暫く學者の研究に委するも、飲食に注意して其の消化を計り一切の飲食を擧げて全身の滋養に供するの必要なるは言を待たず、

二 導引法 此の法を修し得る時は能く氣血を循環して又淹滯澁着せしむることなし。故に氣血より生ずる所の病根より截斷す。

三、これ按摩按腹マツサーヅの法にして身體を摩擦して氣血の循環を計る、其の衛生の一法たるや疑ひなし。

灌水法

三 灌水法 此の法を修し得る時は毛孔を收縮し、皮膚を堅固にするによりて風寒暑熱等の外邪も亦冒すべきやうなし。故に外邪より生ずる病根を根本より截斷す。

四、こは近時流行する所の冷水浴にして彼の冷水摩擦は之れを導引法を兼ねたるものなり。毎朝之れを實行する人の皮膚の堅固なるは屢々實驗家に聽く所なり。

觀念法

四 觀念法 此の法を修し得る時は人の精神を自在に運轉遊戯せしむるによりて又鬱屈煩悶の羈絆なし、故に精神下より生ずる度の病根を根本より截斷す。

五、身心不二なり、内觀の法を修し靜坐冥想心神をして愉悅の境に遊ばしむ、悶々の情、跡なきに至らんか、(そは尙ほ後に説くべし) 氏は以上の四法を以て一切の病根を截斷するの法とし、更に、

吐納法

五 吐納法 此の法を修し得る時は元氣内に充實し、精神上に快活なるが故に、一切の諸病は三舍を避け、瘵癘瘟疫等の氣も寄りて付くべき手段なし。

六、此の吐納法は深呼吸法にしてペーケマンの強肺術の如きも亦一種の吐納法たり、近時衛生の術大に進歩し、吾等の身體に對する諸種の注意は皆な健康保持を資するものなり。吾等は之れによりて以て彼の邵康節が所謂、

病前自ら防ぐ

爽々口物多終作疾。快々心事過必爲殃。知君病後能服藥。不若病前能自防。

一些字

の覺悟を忘るゝなくんば以て人生の本務を行ふに於て、支障なかるべきか。氣力内に充つ、外、以て不撓の力行に當るべし。自ら身體を虚弱ならしむるは確かに不徳の行爲にして、不徳の行爲は又人をして不健康ならしむるの因なり。後水尾上皇、曾て江村專齊に對して養生の道を問ひたまふ、時に專齊壽既に百歳、視聽少しも衰へず、答へていふ、「臣、平生唯だ一些字を持す、飲食些し、思慮些し、養生些し、此の他豈に術あらんや」と、孫思邈に十二少の説あり。

十二少

善く生を攝する者は常に思を少くし、念を少くし、慾を少くし、を少くし、語を少くし、笑を少くし、愁を少くし、樂を少くし、喜を少くし、悲を少くし、好を少くし、惡を少くせよ、此の十二少を行ふは性を養ふの都契なり。



と、身體の修養は精神の修養と相離れず。吾等は道を行ふことを以て目的とす、一日健なれば一日其の道を行ふべく、一日病めば一日其の道を怠る、我が此の身や輕賤すべからず、正眼國師は近代の龍象なり、常に衛生を重んじ、衝を以て飯を量り飲酒頗る謹み、晩年に至りて廢せず、僧あり笑つていふ、

「盡せり、餘命を貪つて何をかせむ」と、師、戒めていふ、「生きて人に益なきものは天折するも惜むに足らざるも、生きて人に益あるものは一日殘喘を保てば兆民一日の利あり、衲が生を貪ること俗よりも甚しきは之れが爲めなり」

と、人々此の見地あり、以て内、衛生を遵守し、外道を行ふに足らむか。

## 二、靜坐と修養

動き易きは吾等が浮泛の心にして迷ひ易きは吾等が現實の感想なり。徒らに皮相の觀察に動かされて事物の眞意義を誤り、妄りに目前の衝動に惑はされて虚を以て實と執し、實を以て虚と爲し、紛々擾々、是非善惡の葛藤裡に没頭して自ら救ふ能はざるに至る。此の浮泛の心を靜め、此の現實の迷ひを轉じて紛々擾々たるものを統一し、是非善惡を整理して心裡の靈光に接觸せしむるもの靜坐より切なるはなし。想ふに吾等が智識的慾求は不斷に相續して

靜坐の  
必要

一日の  
生は一日の  
利

讀書觀  
察と靜  
坐

隴を得ては蜀を望み、一を得ては二ならんことを欲して止ることなく以て智識の啓發を計るべけれど、唯だ其の勢ひに任せて靜思反省の機を與へざらんか、其の啓發せられたりと思惟する智識も實に僅に新陳代謝したるに外ならずして、實質に於ては何の加ふる所なきものたるを免れじ、蓋し智識増進の方法一にして足らずと雖も、其の必要なる讀書と觀察とに過ぎたるはなし。されど唯だ書を讀みたりとも之れを熟慮し靜觀して自己の思想系統中のものとするにあらずんば、萬卷の書を讀破するも何の功なく、唯だ觀察を事とするも、綜合し分類し以て之れに一定の秩序を與ふるにあらずんば觀る所多きも偶ま以て其思想を感亂するに止らん。讀書をして功あらしめ觀察をして利あらしむる一に之を靜思反省の力に待ち、異を分ち同を合し末より本に遡りて第一原理を求め、之れを根幹とし、智識の系統を我が心内に明にし、其の大綱を攫んで綱目をして自ら知り易からしむるを要す。朱子いふ、

毎日半日靜坐、半日讀書、之れを行ふ數年長進せざるを患へず。

と、唐彪の「讀書作文譜」にいふ、

世人終日書を讀んで輟めず、竟に片時の靜坐なきものあり、これ唯だ讀書の益あるを知つて而して靜坐の却て大なるを知らざるなり。

と、靜坐冥想の時、吾等が曾て學修せる所のものは意識の表面に出で來りて今、得たる所の

智識の  
整理と  
靜坐

ものと比較按排するの便を與へ、靜坐良久して小は大に、末は本に統合せられて吾等の智識を整理し之れをして整然たる系統の下に統一せしむ。此に吾等の見識立ち又他の爲めに瞞せられず。末に走つて本を知らざるものは誤られ、小に通じて大に疎なるものは迷はざる。吾等が智能啓發の途上に於ても靜坐は缺くべからざる必要方法なり。若し夫れ其の靜坐が與ふる所の趣味に至ては津々として盡きざるものあり予曾て「冥想論」の劈頭に之れを示していふ。

金聖歎は絶大の才筆なり、彼れ曾て冥想恍惚の間、詩境湧然として起るの状を叙して曰く「筆下さんご欲して而して擱き、紙、舒べんご欲して而して仍ほ捲き、墨、磨せんご欲して而して仍ほ停む、而して吾の才盡きて吾の髻斷つ、而して吾の目躍み、吾の腹痛む、鬼神來て風雷忽ち迎ふ」ご平居動靜の間、胸境齟齬として客感俗想、蟻の如くに集り、左顧右盼爲さんご欲して爲す能はず、行はんご欲して行ふ能はざるも、徐るに想ひ、靜かに考ふるの時、吾人はこゝに神籟の聲を聞き、身は明窓淨几の下にあつて、心は遠く白雲流水の間に遊び、悠然として天地と同化し、宇宙、手に在り、萬化身に生ずるの快を感じ、恍惚として、我、吾を忘れ、奇思妙想、忽然として起りて殆んど鬼神來て風雷忽ち迎ふの感なき能はざるに至る。これ豈に冥想が吾人に與ふるの賜にあらずや、煩悶苦惱、我、吾を制す

靜坐の趣味

意志の鍛錬と靜坐

る能はず、心緒亂れて絲の如く、怒火焰々として燃ゆるの時、暫く冥想の樂みに耽らんか清風一陣心火を滅し、快刀一振亂麻を斷つが如く、吾人はいひ知れざるの爽快を感ず。靜坐冥想は趣味の源泉なり。胸中不盡の興趣滾々として湧き、恍として象あり。惚として理あり。坐禪は之れ大安樂の法門、冥想はこれ心身慰安の一境なり。これ音だ智能の啓發趣味の涵養に於てのみならず、意志の鍛錬に於ては殊に其の功の切なるを見る。請ふ勝海舟が實驗を語らしめよ、

予が本當に修行したのは劍術ばかりぢや、一體予の家は劍術の家筋であるからさて予の父も骨折つて修めさせんご、當時擊劍の指南をして居た島田虎之助といふ人に就けた。此の人は世間普通の擊劍家とは違ふ所があつた、島田のいふには今時皆人のやつて居る劍術はほんの型ばかりぢや、折角のこゝに足下は本當の劍術をおやりなされご、それより島田の塾に詰めて自ら薪水の勞を取て修行した。寒中になるご島田の指揮に従ひ、毎日稽古が済むご夕方より稽古衣一枚で王子權現に行て夜稽古をした。何時も先づ拜殿の石段に腰をかけ瞑目沈思心膽を鍊磨し、更に起て木劍をすぶりし、更に復たもこの石段に腰をかけ、再び心膽の鍊磨にかゝり、それより復た起つて木劍をすぶりし、此の如きもの數回、遂に天明に至る。それより直に歸て朝稽古を爲し、復た夕方より王子權現に出掛け一日も怠らな

かつた。始めは深更に唯一人、森々として樹木の茂れる社内に立ち居ることにて、何さなく氣怯れし寒風梢を拂ふ聲物凄く、覺えず毛髪を豎てたが、修業の積むに従ひ何となく感じなくなり、遂には四面寂寥の中にあつて、ヒュウ／＼と梢を掠める寒風の聲を聞くこそが一種の趣を添へるやうになつた。

さ、蓋しこれ靜坐が意志鍛錬に功あるの一例にあらずや。意志鍛錬の第一義は自己本來の主人公を徹見し、外物の爲めに動かさるゝなき根底を養ふにあり。我が心外物に動かさるゝの時、思想は散り亂れて終に自己本來の面目を没却して順境にあつては心踊り、逆境にあつては心萎え、毀譽に迷ひ褒貶に惑はされ、喜怒常なく、苦樂定らず飄々一紙片の風に翻弄せらるゝが如く、西に東に南に北に、唯だ外境の指す所に従ひて自己に定着する所なきに至らんかくては宇宙に於ける自己の存在抑も何の意義があるべき。試に靜思一番、淨泛の想を去り散亂の心を鎮めよ。心裏の秘奥に潜める實在の靈光は我が存在の意義を明かならしめ、天柱挫け地維割けんとも我此にあり、何物か其の存在を左右せんとの自覺を生じ、萬人よし否といふとも、我は斷乎として然といひ得るの見地を養ひ、毀譽は面上を吹く春風の如く、苦樂は鐵牛角上の蚊にも似て平然として能く逆順の二門を超越し、順境にあつて安んぜず、逆境にあつて撓まず、彼の山岡録舟が

逆境の修養

切りむすぶ太刀の下こそ地獄なれ

踏み込み行けばあまは極樂

さいへる劍道の歌を吟じつゝ、雲霞の如き官軍の中を過ぎて「朝敵山岡鐵太郎、此度總督府に對し歎願の筋あり罷り通る」と呼ばりたるの豪膽を養ひ、彼の快川紹喜禪師が火焰裏にありて、

安禪は必ずしも山水を須めず、心頭を滅却すれば火も亦涼し。

といひて火定に入りし勇猛心を鍛ふべし。

吾等は靜坐冥想によりて智識を整理し探れて其の源底に入り差別の相の中に平等の體あるを看守するに至ては絶對不二の境に安立して事物を達觀するが故に、生死も二なく榮辱も二あらず、毀譽は唯だ相の異にして苦樂も亦其の本一なり。佐藤一齋、靜坐の功を説ていふ。

靜坐の功は定氣凝神、以て小學一段の工夫を補ふに在り。要は須く氣容は肅に、頭容は直手容は恭に、神を背に棲ましめ、儼然として敬を持し、就て自ら胸中多少の雜念、客慮、貨色、名利等病根の伏藏を擯出し、以て之を掃蕩すべし。然らずんば徒爾のみ。

と、胸中に於ける病根の伏藏を擯出す、此に於て心地快潤、理眼明かに絶對不二の本體を照らして又事を過らず。吾等の意志の弱くして己に克つの工夫に於て缺くる所あるは此の達觀

靜坐の功

靜坐と修養

榮辱と  
達觀

に於て足らざる所あればなり。ジョン、フェルソンいふ「汝若し汝の意に満たざることあれば一より十までを算して而して後に怒れ」一より十を算す、散亂の心漸く鎮りて秘奥の靈光此に現はれて又怒るを要せざるべし。筆疇にいふ。

辱の來るや其の人の如何を察すべし、彼れ小人ならんか即ち直、我にあり、何の怒ることかあらん。彼れ君子ならんか、直、彼れにあり、何の怒ることかあらん。

と、これ達觀の與ふる教訓にあらずや。唯だ日前の感情に驅られて靜思反省の暇なきものは此の達觀を缺き、事を過らざるや稀れなり。靜坐は能く之れを救ふ。日に三たび省みて過なからん、とを期したるは支那の哲人にして、日々侍者に命じて「汝も亦人たるを記憶せよ」と呼ばしめしは希臘の賢王なり。吾等も亦日夜に反省して我が行動の過誤なかりしや否やを檢せざるべからず、其の之れを爲す亦靜坐冥想より便なるはなし。此の反省に伴うて吾等を警覺し來るものは懺悔の念なり、人誰か過なからん、過つて改むるなきが故に罪に罪を重ね惡に惡を積み、しかも自ら其の罪惡たるを忘れて終に墮落の深淵に陥る。之れをして自ら救はしむるものは懺悔の外あらじ。涅槃經に曰く、

先に罪を爲すと雖も、後能く發露し悔いて懺悔し敢て作さざるは、猶ほ濁水に明珠を置けば珠の威力を以て水即ち清きが如く、陰雲除けば月即ち清明なるが如し、惡を作して能く

懺悔と  
靜坐

悔ゆ、亦復た是の如し、懺悔して慚愧を想ふものは罰、則ち陰滅して清淨なること本の如し。

と、懺悔は力なり、能く其の性格を變換し、吾等をして向上進歩せしむ。紛々擾々定めなきの時、吾等の心は常に外物に迫はれて此の反省を缺くが故に亦懺悔の惠澤に浴する能はざれど、中宵人なく夜靜かなる時、獨り短檠に對して日常の行動を想ふ、誰か慚愧の我に迫るものなからん。こも亦靜坐の力にあらずや、これら倫理的價値の外更に其の身體に及ぼす影響を云はんか、司馬承禎は、存想の説を立て、

存は我の神に存するといふ、想とは我の身を想ふといふ、目を閉ぢて即ち自己の目を見、心を収めて即ち自己の心を見よ。心と目と皆な我が身を離れず、我が神を傷めんとすれば則ち存想の漸あり。凡そ人の目は終日他人を見る、故に心己に外を逐うて走る。終日他事に接す、故に目も亦外を逐うて瞻る。營々たる浮光、未嘗て内を照らさず、奈何ぞ病み且つ天せざらんや。是を以て根に歸するを靜といひ、靜を復命といふ、成性存々は衆妙の門此れ存想の漸、學道の功半す。

と、身體の修養に於ても靜坐冥想は吾等に偉大の功あるなり。道教者流多く此の流多く此の法を語り以て心身慰安の術とす。

倫理的  
價値  
存想

人は氣中に在り、氣は人中に在り、天地萬物、氣を須て生ぜざるはなし、能く氣を行ふ者は内以て身を養ひ外以て惡を却く、然も之れを行ふに法あり、子より己に至るまでを生氣の時と爲す……常に生氣の時を以て鼻中に氣を引き入るを多くし、出すこと少くし、閉ぢて之を數へ、九九より八八、七々、六々、五々、に至りて止む、乃ち微かに之を吐き、耳をして聞かしむる勿れ之れを習ふこと既に熟すれば増して千數に至る、此れを胎息と爲す。(抱朴子)

子より己に至るは午前なり、朝暾麗かに上るの時、静坐其の息を算す、これ亦一個の衛生法にしてかれて静坐の工夫なり。禪宗に於ては坐禪を要さず、禪は詳しくは禪那、静慮の義なり、其の法とする所は、清閑の室又は樹下石上に厚く坐物を敷き、身の衣帶を寛くし、先づ右足を以て左の膝の上に安んじ、左足は右の膝の上に安んじ、右の手を左の足の上に置き、左の掌を右の掌の上に置き、兩手の大拇指をして相拄へしめ、正身端坐、左に側ち右に傾き、前に鞠り後に仰ぐことなく、耳と肩と相對し、鼻と臍と相對せしめ、舌を上の上の齶に掛て唇齒相着け目は須らく常に開き、鼻息微かに通じ、身既に調うて欠氣一息し、左右に搖振して兀々として坐定するにあり、これを坐禪の正式とす。(坐禪のこと拙著「冥想論」に詳説したれば此に略す)かくて抑も何をか爲す、瑩山禪師曰く

夫れ坐禪は直に人をして心地を開明し、本心に安住せしむるにあり、之れを本來の面目を

露すま名け。亦本地の風光を現すと名く。

と、心靈の本源を開きて自己の實在を明にするにあり。かくて工夫功を積んで、一夜定中、忽然として前後際斷、絶妙の佳境に入り、恰も大死底の人の如く、一切物我あるを覺えず、只覺ゆ吾腔内一氣、十方世界に瀰滿し、光輝無量、須臾にして蘇息するもの、如し、視聽言動、豁然として平日に異る、是に於て試に天下の至理妙義を求むるに頭の上

(禪海一瀾)

に明かに、物々上に顯かに歡喜の餘自ら手の舞ひ足の踏むを忘る。の境に至らんか、靜的修養の極致に達したりとも云ふべきか、佐藤一齋も亦いふ、深夜闇室に獨坐す、群動皆な息み、形影俱に泯す、是に於て反觀するに但覺ゆ方寸内、炯然として自ら照らす者あるを、恰も一點の燈火闇室を照破するが如し、此れ正に我が神光靈照の本體なることを認得しぬ、生命即ちこの物、道德即ち此の物、中和位育に至るも亦只此の物の光輝宇宙に充塞する所なり。

と、然れども唯だ一時か、る境地に入り靈覺の域に觸れたりとも、雲の如くに過ぎ烟の如くに消えて日常行中に應用する能はずんば、鏡の徒らに明にして、然かも萬象の影を映す能はざるが如き無用の長物たらん。鏡の用は萬象の影を映じて其の爲めに汚されざるにあり、吾等は更に工夫一番して俗務蟻集の中にありて尙ほ且つ此の心を失はず、世事葛藤裡に交りて

動中の工夫

修養法

二三八

毫も此の澄靜を亂さざるの心地を養はざるべからず。これを動中の工夫とす、卍庵法語にいふ、

正念工夫は動作中に尤も修練すべし、必らずしも靜を求むべからず、往々靜なれば則ち修行事速かなるが如くに思ひ、動中は散亂する如く思へども、靜處の修練得力は動境に對する時に確實ならず、臆病懦弱の働きあるものなり、もし諸法に通達し萬事に自在なることを得んと欲せば動中の工夫に超えたるはなし。

と、榮根譚の所謂「靜中の靜は眞の靜にあらず、動處に靜し來て纔に是れ性天の眞境樂處の樂は眞樂にあらず、苦中に樂みを得來て纔に心體の眞機を見る」もの則ち是れ。

されど吾等は先づ此の靜中の工夫によりて精神の歸着を定め、自己が心鏡を掩ふの塵垢を洗滌し、萬象をして歴然たらしむるの素を養はざるべからず、靜動二面は双翼兩輪にも似て相離るべからざれど、修養の第一歩としては先づ靜中の工夫より初むるを要す。

三、讀書と修養

人の書を讀む自ら四個の別あり、一は學修の爲めに讀むものにして主として専門の學科に限られ、二は常識養成の爲めに讀むものにして時代智識の修得を目的とし、三は品性修養の

讀書の分類

學習の讀書

學生の新聞雜誌

爲めに讀むものにして、主として聖賢の書を手にし、四は娛樂の爲めに讀むものにして主として文藝の述作にあり。學修の爲めに讀むものは記憶を専らとし一たび讀み得たることは之れを忘失するなきを計らざるべからざれば唯だ讀書するのみに止らず、熟慮靜思して理を推し則を求め、自己心内に秩序整然たる一系統として存置して遺失せしめざるの法を計らざるべからず。或は其の要點を備忘録ノットブックに記入し、或は科段を分ちて本末を明にし、或は索引を設けて出處を明瞭にし圈點を施して一目の下に知悉せしむる等記憶の便を計り、其の大綱を捉へて逸失せしめざるを期せざるべからず。殊に學生時代にあつては潛心其の學科に向ふべきものなれば、我が書を讀むは之れ實に我が道を行ふ所以の素因なりとして側目を振らず事修するにあらざれば修養淺くして世に立つの後、悔いて及ばざるこそ多かるべし。山陰に一老儒あり、青年の笈を負うて東都に學ばんとするを送りていふ、「汝が成功の訣他なし、學修の間、希くは専門外の新聞雜誌を見る勿れ」と、青年以て頑迷の語と爲し東都に入るに及びて雜誌店頭諸種の新刊を獵り、朝夕新聞に親みて終に學業に専らなる能はず、終に志す所の學科を放擲して校を轉ずること再三、蹉跎落魄、同學の士の成功を羨み今にして老儒の言の迂ならざりしを思ひしと、老儒の言は少しく過激なれど容氣未だ定らず、志未だ堅からざるの徒が世に媚び俗に阿る新聞雜誌の記事に動かされ、或は煽動的なる時事の評論に慷慨して

讀書と修養

二二九

學識と  
常識

自己の學習をもどかしとして中途に業を廢し終に生涯の方針を誤るもの多きは其例に乏しからず。吾等は強ちに新聞雜誌に目を觸るゝ勿れと極言するものにあらず、却て其の爲めに自己の研鑽を資するこの少からざるを認むるも雖も、事には主あり伴あれば伴の爲めに主を忘るることなく學んで餘力あるにあらずんば之れを讀まず、主とする所を專らして學科以外に廣く参考の書を読み先づ自己の立脚地を定め徐ろに世に立つの準備を盡すべし、既に世に立ちたりとも、専門の學修は之を廢すべからず、時代の進歩は刻一刻も止ることなく、文運の發展は瞬時の休息なければ研究に研究を重ね思索を積み其の向上を計らざるべからざれど、唯だ専門の學識のみを涵養して常識の養成を遺却する時は、折角の學修も以て世に應用する能はず、徒らに玉を抱て江湖に放浪せざるべからざるに至る、吾等は學識の世に貴ぶべきを知ると共に又常識の養成の等閑に付すべからざるを認めずんばあらず。

常識は時代の人たるに必要なる智識なり。之れなくして立たんとするは地を離れて行かんとするが如く危きこと岌々乎たり。

想ふに學識は學識の先驅にして、今日の常識は蓋し過去學識の積習なるが如く、今日の學識は亦未來の常識となりて人智の進歩を計るべきなれば、世は一日も學識なかるべからずと雖も、其の學識は常に常識の上に建設せられて初めて初めて大功ありと知らざるべからず。更

妄識

に語を換へて云へば學識は研究に屬すべきものにして、常識は其の研究の結果萬人の認め正しとなすに至りしものなり、地球を以て圓形なりとするは今日何人も正しと認むる常識なれど、過去に於ては一個の學識として存在したりしに過ぎざりしなり。若し夫れ今日尙ほ此の圓形説を信ぜずして過去の萬人が認めたるが如く平板なりと云ふものあらんか、こは學識に背くと共に常識に背反するものにして、名けて妄識といふもの之れなり、妄識は萬人の認めて不正とするものにして學識は未だ萬人の認むるに至らざるものなり。

(拙著「人格の養成」)

特別智  
識と普  
通智識  
見識

常識は能く常識を講き、常識は能く學識の素地を成す。更らに他の方面より學識と常識とを分たんか、學識は一部の特別智識にして常識は一般に修めらるべき普通智識なり、普通智識の素地の上に立つて特別智識も初めて功あるものなれば、何の業を習ひ、何の學を修むるものも現代の人たる以上は修得するの要あるものなり。外に見識なるものあり、思索達觀の力によりて常識の上に超越し、未然に事を察し、凡俗未だ言はざることを言ひ、以て世を指導し人を啓發す。されどこも亦常識の素地の上に立つを要す、世には學識あつて見識なき人あり、見識あつて學識なき人あり。學識あつて見識なきものは徒らに書籍に囚はれ研究に縛られて終生營々世を指導する能はず、見識あつて學識なきものは放言大語の空見識となつて

常識修養  
新聞雑誌  
常識の  
語義

世を毒し人を害す。望む所は學識あり見識ある人ならざるべからざれど、此の如きは之を萬人に需むべからず。吾等は先づ其の素地たる常識の修養を忘るゝなきを詮要となさざるべからず。さて此の常識修養に關しては時代の耳目たる新聞雑誌の力最も偉大にして、一日之れを見ざれば一日時代の進運に遅るゝの感あり。唯だ時代の進運に遅れざらんとするのみを以て吾等は新聞雑誌の力を認むるにあらず、上來常識の語義を暫く學識見識并に妄識と比較して智的方面にのみ解したりしと雖も、其の語の含む所は智的のみにあらずして別に情的方面を兼ね、能く「人」を理解せしむるにあれば社會の縮寫たる新聞雑誌によりて人情の機微を察し人心の妙機を悟得するも亦其の修養に於て缺くべからざるものあればなり。されど吾等は唯だ新聞雑誌の力のみを以て常識修養に關する讀書を完備すべしとするにあらず、現代に於ける人類の生活状態を察すべき地理書、過去に於ける人智の發展を窺ふべき歴史も亦其の修養に於て缺くべからざる讀書の料なり。

若し夫れ書を讀んで品性の修養に資せんか、一句胸中に浸徹するものあり、一言肺腑を貫くものありて日常行中の雜念妄想を拂ひて心鏡明かに古聖先賢と相對するの感あるものあり夜雨蕭條、獨り孤燈に對して古人を友とす、書中の語は悉く我が心の註脚となりて、我に反省を促し、我に奮起を勸む。西哲いふ志士三日書を讀まずんば自由の思想胸中に鬱勃たらず

品性修養  
書と讀

史傳

と。史を讀んで當世を考へ、語を誦して人事を想ひ、時に金聲玉振の作に接して趣味を向上せしむ、之れを目に讀むは皮相の讀書法なり、心に讀むの時、書中の文字は皆な自家の得力となり、語簡にして意深く、左看右看、滋味の盡きざるものあり。朱子いふ、凡そ文字を見る熟讀精思之を久うすれば、正文の邊、自ら細字の註脚露出し來る、此れ方に自家得力の處、只外面註脚上の影子を尋ねるは終に事を爲さず。

と、机上聖賢の書あり、端坐して之れを味ふ、茶碯松風を送り、一炷の香烟、室に滿つ、これ人生の快事にあらずや、六經可なり、佛典可なり、老莊の書も亦心を養ふべく、マイアルも亦身を修むるに足る、更に偉人傑士の事蹟に目を曝す時、身は即ち書中の人となりて自ら一步之れに近くを想ふ。彼れも人なり我れも人、彼れ既に此の如き事を爲す。我れ豈に學んで及ばざらんや。蓋し偉人の事蹟は吾等の典型にして其の一舉一動は吾等を啓發し指導し、覺えず向上の思想を起さしむ。

人生不幸なるは讀書の趣味を解せざるより甚しきはなし、書齋に靜居して萬國を經歷し、一室に兀坐して古人と遊ぶ、まことやセームス、シナリーが「書籍を熟讀する時間ほど面白く且つ幸福なるはなし」といひ、ジョン、ハーシエルが「若し如何なる場合にありても予の周邊を離れず、一生の間、幸福と愉快との源泉となり、又如何なる人生の悲惨に遭遇すとも、

讀書の  
快樂

讀書と修養



猶ほ其の不幸を遠ざけ、以て我が愁眉を開かしむるに足るの妙あるものを希ふものは讀書を選ぶの外なし」といへる如く、吾等を慰藉し、吾等を薰陶して、其の憂苦を去り、悲痛を除くもの、讀書の如きはなし。多くの娛樂は對手を要す、されど讀書の快は獨り之を擅にすべく、多くの娛樂は所を選ぶ。されど讀書の樂は、車上たること、机上たること、枕上たること、室内たること、戶外たることを問はず、翠滴る樹林の中も、月洩る伏屋の軒にても、一巻の書は以て吾等に無限の快感を與ふべし。

讀書の利は之れのみにあらず、吾等が意志鍛練の習慣を養成するに於ても常に多大の利益を與ふ、心を潛めて難解の書を読み、一字より一句に及び、一句より一節一章に及び、字々徐ろに咀嚼し、句々靜かに會得し、發奮激勵して之れを讀破するの快は他面に於て意志鍛練の好習慣たり。唐彪の讀書作文譜にいふ、

人の書を見る先づ已むべきこと、已むべからざることを分つべし。其の已むべきの書は解し易しと雖も必らずしも披閱せざれ。其の已むべからざるの書は極めて難解なりと雖も、必らず反覆して通するを求むべし。初め看る時、竟に茫然として一も知る所なき如きも、畏難の心を生ずべからず、時を逾えて再び看ば或は十中其の一二を曉らん。怠倦の心を生ずべからざるなり、時を逾えて復び看ば或は十中其の五六を解し、更に已むべきの心を萌すべか

意志鍛練と讀書

書籍の選擇

らず、時を逾えて復び看ば工夫既に到りて解するを期せずして自ら明らかならん、大學に所謂力を用ふること久しうて一旦豁然として貫通するもの豈に虚語ならんや。と、難を棄て、易に就くは人の常情なり。されば自ら至難の書に當て反覆咀嚼一旦豁然として貫通するの快は到底唯だ易に就て自ら安んずるもの、知り得べからざるの所なり。何れの點よりいふも讀書は吾等が修養の一要件なり。此に注意すべきは書籍の選擇なり。悉く書を信ずれば書なきに如かず。客氣未だ定らざる青年が書籍の爲めに惑はさる、こと少からざれば其の選擇は又讀書家の忘るべからざることなり。

よく選び讀むべかりけり世の中は  
人まごはしのふみし多ければ

書は多くして時は少し、徒らに多くの書を読まんとして本を忘れて末に走り、讀むべからざるの書を讀んで讀むべきの書を逸したらんには追うて及ぶべからざるものあり。されば青年の時代に於ては成る可く先輩の指導によりて書籍を選擇して誤るなきを期するを要すれど、思慮漸く定り取捨之れを自らし得べき中年時代に於ては又一種の讀書法あり、手に觸るゝ所其の如何なるものたるを問はず、試に一萬巻を讀破することなり、胸中萬卷の書を藏す、世態人情に於て大に通ずる所ありて又他に瞞せられず。近世の奇傑雲井龍雄之れを實行して

萬破讀卷

得入する所ありしと。専門の學修に於ては素より用ふべからざれど、常識修養に於ては利益少からざるべし。一日一卷を讀みて尙ほ十年を要する萬卷の讀書は其の人の見地を養ふこと多きや疑ふを要せず。

#### 四、文藝と修養

巍然として雲表に秀で八面玲瓏人に與へて見せしむる芙蓉の清容も、智的考察にのみ傾ける人の目には唯だこれ火山の代表的形狀にして海面を抜くこと何千メートルと打算するに過ぎざれど、情的鑑賞の眼を以て見んか、

仙客來遊雲外巔。神龍栖老洞中淵。雲如<sub>ニ</sub>紈素<sub>ニ</sub>煙如<sub>レ</sub>柄。白扇倒懸東海天。

(石川丈山)

誰將<sub>ニ</sub>東海水<sub>一</sub>。

濯出玉芙蓉。

蟠<sub>レ</sub>地三州盡。

挾<sub>レ</sub>天八葉重。

雲霞蒸<sub>ニ</sub>大麓<sub>一</sub>。

(柴野栗山)

日月避<sub>ニ</sub>中峰<sub>一</sub>。

獨立原無<sub>レ</sub>競。

自爲<sub>ニ</sub>衆嶽宗<sub>一</sub>。

と云はざるを得じ。此の鑑賞的態度を以て事物を觀察する所に文藝の趣味あり。凡そ人の事物に對するや、おのづから三個の態度あり。一は考察的にして理を究め原を尋ね以て其の然る所以を究めんこと此に科學哲學の素を成し、二は利用的態度にして如何に之を人生に用あ

觀察の  
三方面

人心の  
三方面の  
態度

趣味の  
品格

らしめんかきす、前者を智的と名くべくんば後者は意的なり、此の二者の外に鑑賞的態度なるものあり、専ら情の赴くに任せて其の美を享受し、此に満足の境地を開く、等しくこれ月なり、其の何が故に輝けるかを研究するは第一の態度にして其の光線を利用して何事かを企畫せんことするは第二の態度なり、其の麗かに照り渡れるを見て「月や我れ我れや月かさわかぬまで心も空に澄める夜の月」と感じたるは第三の態度なり。素より人心の三方面の相分ち難きが如く、此の三種の態度も判然區劃せんはいと難くして、

池の面による月なみを數ふれば

今宵ぞ秋の最中なりける

といへる鑑賞的態度の中には幾分考察的態度の交り、直下數千丈、素絹を垂る、が如き瀑布を考察する中には利用の態度加はらざるを得ず。唯だ飢餓凍餒を凌げば足るべき飲食衣服にも鑑賞の態度の棄て難きは人の常情にして、乾燥無味なる人生も之れが爲めに一段春風の吹き渡るを覺ゆ。若し人をして、

心なく浮世を見るに東西に走り南北に行く人、多くは身を思ふ事にのみ足を空になして、吉野の花のあはれをも知らず、深草の鶉の聲を聞いても、焼てしてやりたいとばかり思ひ、後に何になることぞや。

(正念房壁書)

文藝と修養

二四七

肉感と趣味

と云はしむるものならしめば、品位といひ品格といふもの何の所にか求むべき。知慮の優れたる人貴ぶべく、意志の強固なる人も亦貴ぶべけれど、趣味下劣にして唯だ何事も實用の一面に向つて些の美的感想だも有せざらんか、吾等は未だ以て歎美すべき人格といふ能はざるなり。趣味の向上は確かに品格養成の要件なり。

此の趣味に高下の差あり、其の肉感と相伴ふものは下劣にして肉感以上に美を鑑賞する所に其の人格の高きを見る。觸覺の美を愛するものは未だ以て趣味の高きものと云ふべからず、觸覺の上に味覺あり、唯だ食ふを以て足れりせせずして、美的鑑賞を加ふ世にいふ食道樂なるもの之れなり。觸味二覺は低級官能に屬して肉感を離るゝ能はざるが故に、其の趣味を以て人格を左右するには尙ほ足らざるものあれど其の上に嗅覺あり、梅花の馥郁たるを愛し、一炷の香に心神を爽にす、我が國古來香道なるものあり、薰香を以て娛樂とし、戰陣に臨むの武士、名香を頭髮に薰じて死出の想ひ出となしたりと傳ふ。嗅覺美は稍々高尚なれど未だ以て視聽二覺の高級なるには如かず。聽覺に訴ふるものに音樂あり、視覺に訴ふるものに繪畫あり、或る時は蟲聲の唧々たる如く、或る時は流水の潺湲たるに似たる音樂を耳にするの時、神韻縹渺として我あるを忘れ、現實を理想化したる花鳥風月に會し、自然を淨化し萬象を美化したる名手の筆致に接するの時、塵寰を超脱するを覺ゆ。音樂は有聲の美術にして繪

音樂と繪畫

繪畫と文學

畫は無聲の美術なり。此の有聲無聲を兼ねて直に心に傳ふるものを文藝の趣味とす。繪畫の現はす所は空間の状態に限らるれど詩歌は能く時間を現はし、

袖ひぢてむすびし水の氷れるを

春たつけふの風やとくらん

といひ、繪畫の現はす所は一目の及ぶ限りにて、或は東、或は西に、疊るかと思へば晴るゝ如き時間と運動とは之れを詩歌文章に待たざるべからず、

淡路島はるかに見つる浮雲も

すまの關やにしぐれ來にけり

黒雲翻墨未遮山。白雨跳珠亂入船。卷地風來忽吹散。望湖樓下水如天。

(東坡)

の如きは繪畫に於て現し難しとす。文藝は一切美術に王たるべき資質を有するものにして人心秘奥の美的鑑賞より出でて、細に入りては、

落ちさまに水こぼしけり花椿

(芭蕉)

白露もこぼれぬ萩のうねりかな

(同)

と見、其の火をいうては、

文藝の趣味

文藝と修養

吹き飛ばす石は淺間の野分かな  
危礁亂立大濤間。決<sub>レ</sub>皆西南不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>山、

(芭蕉)  
(山陽)

と歌ひ、人生の悲哀を美化しては、

十年踪跡厭<sub>レ</sub>紅塵。功業無<sub>レ</sub>成白髮新。夢裏不<sub>レ</sub>知身是客。覺來惟有<sub>二</sub>影隨<sub>レ</sub>身。

(劉長卿)

わすれめや花たちばなを玉にぬき

袖にははせし人のむかしな

(村田春海)

(千代)

蜻蛉釣けふほどこまで行きしやら

と吟するの類、現實以外に吾等を慰むるものあり、蓋し文藝の美は人心秘奥の靈光より迸り出て趣味殊に深きものにして、香川景樹は、

古の歌の調も整へるは、他の義あるにあらず、ひとへに誠實より出づればなり。誠實より爲れる歌はやがて天地の調にして、空ふく風のものにつきて其の聲實爲すが如く、あたる物として其の調を得ざることなし。

さいひて、誠實の文藝に必要なを説き、「俳諧寂菜」には、

俳諧は物を憐むの事を要領とす、物を憐むとは草木の霜にあひ、鳥獸の寒暑に苦むなり、

同情と  
文藝と

誠實と  
文藝と

されば常に臥したる乞食に向ひても、きたなしと思ふ念起らば一句に結ぶ、こ難し、不便と思ふ心は則ち風雅の一句なり。

さて同情の要を示し、隨園詩話には「胸境超絶相對溫雅ならば一字を識らずとも眞詩人なり」といふ。文藝は或る意味に於ける人格の發露なり。

去年今夜侍<sub>三</sub>清京。 秋思詩篇獨斷腸。 恩賜御衣今猶在。 捧持日々拜<sub>三</sub>餘香。

の一絶は以て菅公の人格を髮髻せしめ、

幾踏<sub>三</sub>危機<sub>一</sub>志未<sub>レ</sub>窮。 欲<sub>レ</sub>征<sub>三</sub>蠻國<sub>一</sub>作<sub>レ</sub>奇功。 圖南鵬翼何時奮。

久待扶搖萬里風。

の二十八字は能く伊達政宗の性格を活躍せしめ、

夕涼みよくぞ男に生れける

の一句に豪宕なる其角の面目を窺ひ、

此の世をばざりやお暇に線香の

煙と共にハイ左様なら

の三十一文字に飄逸なる十返舎一九の氣風を見るべきにあらずや。文藝に興味を有するはやがて其の品性を高尚ならしむるの所以にして、其の趣味の深淺は偶々以て其の人格を品隲するの一標準たり。さればとて吾等は一切の人を詩人たらしめ、文學者たらしめんとするには

文藝と修養

人格と  
文藝と

忘我の  
文藝

あらず、自ら之れを作るは専門の披爾を要すべければ、他の作品を鑑賞するに於ては、猶ほ自ら奏でざるも他の音楽を聴いて我が心耳を樂しましめ、自ら描かざるも他の繪を畫見て、忘我の境に入り得べきが如く、何人も文藝の美を享受し得るべし。

古武士  
の風格

美術の徳は塵俗の境を超越して心神をして清淨無垢ならしむるにあり。此の趣味を解せざるものは胸境常に齷齪として些の餘裕なれど、此の趣味を解するものは紛々擾々の中尙ほ超脱の一境あり。兩陣相交るの中、徐ろに一矢を番へて「衣のたては綻びにけり」といへる源義家が優雅なるに對して「年を経し糸のみだれの苦しさに」と應ぜし安部貞任も亦武弁一片の人にあらず。一族蒼皇都門を逃れんとして其の先を争ふに、己れば靜かに俊成郷を叩きて一首の歌を遣せし平忠度の心胸、敵箭雨の如き間に一枝の梅花を簞に挿せし梶原源太が風流、出陣に際して「かへらじこかれて思へば梓弓」の一首を如意輪堂の扉に題せし小桶公の意氣「限りあれば吹かれど花は散るものを心短かき春の山風」と詠じて死を決せる蒲生氏郷の膽勇は我が武士道の精華として傳稱せらるゝ所に於て、古昔デメトリアス王のローデスを攻むるの時、畫家プロトジキネス獨り市外の畫室にありて軍隊の喧囂を耳にせざる如し、王の訝り問ふに對し平然として王の伐つ所はローデス人において美術にあらずべしといへる一話は藝術家の爲めに氣を吐く萬丈なるものなり。

### 五、自然と修養

自然の  
光景

人爲の文藝に於て吾等が多大の趣味を感ずるは其の能く自然を傳ふるにあり、今、此の人爲の媒介を離れて直に自然の美に對せんか、吾等は詩人の如く能く謳ふ能はざれど胸境又眞詩人と相距る遠からざるの域に入らん、吾等は眞きに實在の風光を示して單に理眼を以て之れを見ずして情の色彩を以て之れを鑑賞すべきをいへり。實にや人の世の穢れに染まざる自然の光景は虚偽なく虚飾なく其の直面目を吾等の前に露出して赤裸々たり露堂々たり、赤裸々たる所に眞趣あり、露堂々たる所に妙味存す。風は樹頭を過ぎりて自らなる音楽を奏し、雲は山巔を去來して自然の畫趣を示し、心なくして笑む野邊の草、思ひなくして鳴く小田の蛙、或は爛たる天上の星、或は燦たる地上の花、皆な吾等に不盡の趣味を養はしむ。世にも樂しきは風月を友とするこゝなり。

しかも風雅に於けるもの造化にしたがひて四時を友とす、見る處花にあらずといふことなし、思ふ所、月にあらずといふことなし、像ら花にあらずる時は夷狄にひとし、心、花にあらずる時は鳥獸に類す、夷狄を出で鳥獸を離れて造化にしたがひ造化にかへれとなり。

自然を  
友にす

自然と  
倫理と

造化に従ひて四時を友とす。これ實に芭蕉が正風の眼を開けるの根底なり。ラスキンは人若し孤寂にして語るべき友なきの時は、彼れば四圍の自然と不言に語らざるを得ず、戀を傍の花に語り、行く雲に我が不遇を訴へん。さ、人はかくして胸中鬱勃たる不平を慰め、天地と同化して嫉妬あり排擠あり憎悪あり争擾ある人生を忘るゝを得む。若し夫れ知足安分、一雜煮食はぬ身には聞かせまいと云はぬ鶯の聲も快く聞き、夜着持たぬ家には射すまいといはぬ依估蟲負のない窓もる月を眺めたらんには心胸常に平安なるものあらむ。

自然は至公至平にして然も規律あり、節制あり、音に吾等に不盡の趣味を與ふるのみならず。又實に眞理を顯現して吾等を教示す、釋尊は臘八の曉星に無上正等覺を成じ靈雲は桃花に佛祖の祕奥を悟得し、香巖は擊竹に大道を明し、ニュートンは林檎の落つるを見て引力を悟り、コロンブスは波に漂ふ浮草に大陸の近きを知る、自然觀察は亦實に知能啓發の必須要件なり。仔細に諦觀すれば道の邊に置く露だにも宇宙の靈光は宿り、一草一木たりとも眞理の示現にあらざるなし。

諸君は彼の溪流の石を見ずや、個々皆な圭角あり、而して其の轉輾、流れて海岸に達するものを見よ、皆な圓滑にして些の圭角なし。

自然と  
教訓と

不言の  
教師と

吾等は之れによりて山間にある青年の氣骨稜々たるを見、其の出でて都會の風波に漂はざるもの、終に圓轉滑脱の才子と成り了れると同一理なるを發見せざらんや又見よ、諸君、微小なる石は常に溪流に促されて下流に流るゝも、巨大なる巖石は巍然として其の位置を變ぜず、激流は却て其の石に沮まれ、打ちては返し打ちては返し終に水底の砂を穿ちて岩根に凹處を生じ、之れをして却て上流に轉ぜしむるものあるにあらずや。これ輕薄なる小才子流の浮世の潮流に追はれて流下するに反し、大人物の固く持して動かす、自ら者の地歩を向上するに似ずや。

吾等は自然の此の狀態に於て多くの教訓を得。

(講演の一節)

自然は吾等に趣味と教訓とを與ふ、俗務倦み來れば去て杖を郊外に曳け、其處には桃花流水杳然として去り別に天地の人間にあらざるものあらん。巍峨たる山嶽は氣宇を高邁にし、澎湃たる海洋は心地を宏濶にす、自然は實に不言の教師たるなり。

此の自然の教訓と人情の眞趣とを解すべきものを旅行とす。旅行は一面に自然の趣味あるを示すと共に他面に於て人情の迂餘曲折を教ふ。異りたる風光に接し同じからざる世態を見るは、これ我が見聞を廣くし我が經驗を豊にする所以なり。古來宗教信者の巡禮が文運開拓

交通と  
文明と

自然と修養

に偉大の力ありしは何人も知る所にして、養蠶の法の歐洲に傳はりしは天主教師の支那より携へ歸りしにありといひ、我が國諸種の産業が入唐入宋の僧によりて將來せられしは史の證する所、徳川時代において伊勢參宮善光寺詣等の宗教的旅行が地方人士の智識發達に貢獻する所多かりしは疑ふべからざるの事實なり。交通は文明の母、旅行は智識交換の媒。ラボツクの人生の快樂にはテニソンの「予は予が見聞したる所のもの、一部分なり」といへるを引用して、

旅行の利益

予は屢々考察しぬ、今日の世界の吾等に與へたる大利益、大幸福は其の旅行の容易となりし一事より大なるは莫かるべし。

といひぬ。貝原益軒が岐蘇路記の序に、

いにしへ人、一日の勝に遊べば一日の神仙となるといへれば、わが愚かなる心のけがれも、浮世の塵も日頃經て佳境を過ぎ行くほどに忘れぬ。生きて堯舜の仁にあひて嶺南の遊をなすことを得たりと、東坂がいへる如く、大君の御めぐみによりて、太平の世に生れ、此樂を得ることめでたし、遊は其の一時のながめのみかは、身を終るまで折々に其所のありさまを思ひやれば、又目のあたり見る心地して長き思ひ出さざる。と、自然の美を享受する能はざるものは禍なる哉。彼等は嫉妬排擠に充つる塵世に没頭して

人情の  
迂餘曲  
折と旅  
行

此の偉大の天地を知らず。旅行の快を解せざるものは幸少き哉、彼等は井中の蛙見に安んじて獨り自ら高しとし、人生亦他の趣味あるを知らず。試に許六が旅の賦一篇を誦じ見よ、人情の迂餘曲折の中に盡くされたるを想ふ。

旅は風雅の花。風雅は過客の魂。西行宗祇の見残しは。皆俳諧の情なり。我翁。白川の田植歌を聞初。奥羽の間をめぐり。高館の夏草に。兵共が夢を驚かし。あつみ山の夕涼には。吹浦を詠め。佐渡に横たふ天の川に。初秋の袂をしぼる。それより蛤の二見を渡りて。七百三十餘程を吟ず。曾良が落髮の力量を感じて。一鉢の飯を分けて。風流を盡さる。ひと日芭蕉庵をたゞき。繪の難談に及ぶ時。予に旅十體の繪をかゝせて、讀じて何某が求めに應ず。其風雅にたより。俗語をあつめ狂賦五段となす。あなかしこ奥の細道。草枕の類にはあらず。

旅店のさま。上段に書院床。劍菱のすかし。火のなき火燵にやぐらかけて。門口の入湯桶。かたぶけて居たり。底に小砂のさばるは夜への残りもいぶかし。出女のたて島は。春秋をしらす。根太板敷は落て。隅々まで疊とどかず。天井襖は。雨もりにきはづき。鐵行灯はくらく。紙はわらんべの心といふ事に燃たり。錢賣。草鞋賣にせがまれ。やうやうに枕をかたぶけ。心よき寐入ばなは。馬さしの聲に夢を破る。出立は七つさいひふくめたるに。

旅人も亭主もよく寐て。夜のあけてふためくつらもにくし。

大名の寐間にもれたる寒さ哉

道づれの上をいぼ。船頭の胸づくしをさり。駕籠廻したき。馬さしとつかみ合、一僕の跡にさがるをれめまはし。鶏のながぬに。つれの男を起し。挑灯さぼして。夜道を行な手柄さし。入湯の一番に入たるは何の爲ぞや。つはの枯葉に雨のはらくさいふ前に。

世話やきの友にあきたる旅の宿。

といふ句も。此情にかなへり。

海道の賣物に。餅酒のなき所もなし。磨針峠の餅をくはれば。未來焔王の前にてからきめを見るさいへり。寒天にも冷素麵をすゝむるは。逢坂の茶屋。飯頭のほらくさい見えたるは。見付の臺也。卵子の煮ぬきは。木曾の旅。はな紙は竹にはさみ、錢の看板は筒をかけた。蒟蒻の田樂は。何もの、喰けるぞ。

乗かけに春の蜜柑やうつの山

舟川の上。馬駕籠の情。しばらくかぞへがたし。五月の大水も。かり借の手形に出入。おのが草の戸は流るれど。首だけの借錢を納して、しばらく息をつぐものは。島田金谷の賊なり。水の浅深を何文づとこたへたるは、大きな洒落也。天龍の中の瀬は。馬人足を空

にまごふ。乗る人は股だけ入て荷を肩にかけて待。あがるものは。負れ支度して舟端に立。旦那が鑓をかたれたるは。渡し場の情也。馬士駕籠昇は。輕重に日月を送り。一盃の酒に。浩然の氣をやしなふ。一生を漂々瓢々とすまして。雲介の號を蒙り。炎暑の日も。甚冬のあしたも。榎の木の下に眠て。蟻の都に到。終に飲喰を座敷につかす。汁かけて出す馬士の食さ作られ。小便は走りながら。吸殻は手の裏にはたき。錢は耳の穴に納め。金は犢鼻禪に結ぶ。一させの名残も暮て。世にある人々のこさぶく月日を。出替の孝さ定めけるは、世を安う送る人にも似たり。

出女も出がはり顔や年の暮

流浪漂泊の上こそ。あはれなるためしはおほけれ。獨坊主には宿をかし兼。同じ所に三夜はとめず。五月雨の朝。寒の夕暮に。情深きあるじは。長持くさき布子かして。ぬれたる物を焼火にあぶる。あるは三寶荒神さいふ物にしがみ付て、しばらく足を休れど、極めの札場より追おるされて。却てのらぬ前より股をすくめ。兩方の手に杖を携て。あゆむべしとも見えす。人間病死の到來は。時も所もまたず。醫療のたすけうさく。懐中のふり薬はやうく急病を防ぐ。巡禮飛脚の族は。路頭に倒れ臥。片目なる肝煎に追たてられ。老僧の怒みにて門下に入。おさるへかさなり。終に黄泉の下に趣く。かねて何國の士さなら



ん。終を知らず。犬走の土中にこめて。年の齡。衣類の模様を小札にしるされて何國のいかなる人ぞ。いふ名もしらずなり行也。岡部の辻堂の笠に。經文をよみて。同行の別を惜み。隅田川の念佛を尋て。我子の古墳にのぼる。今來古往の人。旅懷の情を盡して。風雅の腸をさらす。能因は白川の歌をよみて二たびみちのくにおもむき。不二都鳥の二句を求めて。すみやかに故都に歸るものは眞室老人なり。東海道の一すじもしらぬ人の風雅におぼつかなしさいはれし翁の聲耳の底にこぼまる。

今の旅行は昔に同じかられど、乗り合ひの汽車の中の火を借る煙草の挨拶にも人情の面白きを感じ、隣り合せの退屈話にも人の心の奥は知らるゝにあらずや。殊に旅行が吾等の品性に及ぼす偉大なるものは獨立の精神と克己の氣象とを養ふにあり。家にありては父母兄弟を力として頼他の念去り難けれど、一たび家門を出づれば自己の事は自己之れを處理するの外、何人も之れを助けず、自己の行爲は自己其の責に任ずるの外、亦他に代るものなく、形影相伴うて獨立獨行せざるべからず。家にありては心のまゝに起居し行動せしものも、他人の家に宿りては思ふに任せず。雨降る夕、風吹く日も定めあれば行かざるを得ず、嶮しき山も、荒き海も旅なれば止めんやうなし。餓ゑたる腹には佳肴なくとも味あしからず、渴したる口には一掬の水にも甘露の美ありて、此に吾等は獨立と克己との教訓を受く、旅行の修養に資する所蓋し少なからず。

## 六、社交と修養

閑中の  
得力の

人の世に處するや孤立自存を許さず。必ずや他と交り相助け相補ふ所なかるべからず。此の相助け相補ふ中に人生の眞趣あり、人は此の社交場裡に在りて初めて、「人」を解し、自己靜處の得力をして應用無礙ならしむ。大慧普覺禪師いふ、

平昔、心を靜處に留るは正に閑中に用ひんことを要すればなり、若し閑中に力を得ずんば却て曾て靜中に往て工夫を做さざるに似る一般なり。

と、寐靜裏に於ける工夫は之れを社交場裏の閑中に用ひて初めて功あるなり。「坐禪せば四條五條の橋の上、往き來の人を深山木に見る」の修養あつて世に處して過誤なく人に交りて失態なかるべきか。人々性情を異にし、個々稟質を同うせず、之に接し之に對する頗る困難なるが如きも、我、之に接するに至誠を以てし之れに對するに同情を以てせんか、脈々相通する心裏の奥底、彼此相感じ、我他相通するものなからんや。これ其の異なるものを棄て、同じきものを取るの法なり。異なるものを棄つるが故に相争ふことなく、同じきものなるが故に相通せざることなし、これを外にして豈社交の秘義あり秘訣あらんや。我れ至誠を以てす、而

社交の  
秘義の

劍道と  
社交

して彼れ之れに感ぜざるは我が至誠の足らざるなり、我れ、同情を以てす、而して他の之れに動かざるは我が同情の足らざるなり、感じ易きの人あり、感じ難きの人あり、能く其の性情を看取し、短を補ひ、長を助けて以て其の社交を圓滑にす。予之れを劍客長谷川小四郎氏に聽く、鹿島神宮藏する所の一書能く劍道の秘奥を悉くす、其の書にいふ、

則來迎、去則送、對制和、五五十、二八十、一九十、以是可和、察虚實、識陰伏、大絶、方所、細入微塵、殺活在機、變化應時、臨事莫動心矣。

と人すに接するの道亦此に多大の教訓を得るにあらずや。來れば迎へ、去れば送り、對すれば和す、對者五なれば我れ五を以て之れに應じ、對者二なれば我れ八を以て對す、彼れに餘れるあれば以て我が短を補ひ、彼れに足らざるあれば我が長を以て之れを助く、かくて社交に於て遺憾なかるべきか。虚實を察し陰伏を識る、要は我が至誠を以て彼れを動かすに至て止むの覺悟あらば春風一陣堅氷も亦融く。西郷隆盛云ふ、

事、大小さなく正直を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ゆべからず。人多くは事の差支ゆる時に臨みてや、詐略を用ゐて一旦其の差支を通じば時宜次第工夫の出来る様に思惟すれども、策略の煩ひ必らず生じ、事、竟に敗るゝに至るべし。正道を以て之れを行へば目前には迂遠に似たるものあれども、先きに至れば却て早きものあり。

至誠

さ又いふ。

人を籠絡して陰に事を謀る者は、よし其の事を成し得るとも慧眼を以て之れを見れば醜狀まことに著し。人に推すに公平至誠を以てせよ、公平ならざれば英雄の心は決して之れを攪られざるなり。

人心收  
攬の秘訣

と、人心收攬の秘訣も亦此の至誠にあり。彼れ又人材採用の法を述べて、

人材を採用するに當り、君子小人の辨、若し酷に過ぐれば却て争を引起す、開闢以來世上一般十に七八は皆な是れ小人なり。故に能く小人の情を察し、其の長所を取り、之を小職に用ゐ、其の材藝を盡さしむるを可とす。東湖先生曾て曰へらく小人程才藝ありて用便なれば之を用ゐざる能はず、さりさて長官に置いて重職を授くれば必ず那家を覆する至るべし。萬物自ら功あり、當に用と處を異にすべし。人々自ら長あり、之れを用ふるに處を以てすれば愚者も亦一得の存するあり。我れ他に對しては赤心を人の腹中に推す、自らは其の至誠の到らざるや否やを思ふ。之れ自ら肅む所以にして又人に接するの道なり。

唯だ人物鑿識に於て人の短は能く之れを見得べきも、其の長は多く逸し易し。見易きの短を以て人を品階し、見難きの長を逸するが故に、自尊毀他の念、此に生じ、社交の圓滑を傷く。三浦梅園、曾て之を戒めていふ、

短を見  
ずして  
長を見  
よ

西施愛江、嫫母棄鏡といへり。西施は昔の美人なり。江に臨み自の影のうつるを愛す、嫫母は悪女なり、我が影を憎みて終に鏡を棄つ。我身と人を見らるに、われより勝れるもの、我よりおとれる者あり、我より劣れるものは見やすかるべし、われよりまされるものは見がたし。螭螂の臂をばりて車に向ふは。自からのちからをはからざればなり。高雄の文覺、西行がふるまひをき、て、かたはらいたく思ひ、その法師來らばした、かに打つべしなど、つれづれ罵りけるに、或さき西行高雄に至りけるに、文覺これをむかへてける。文覺が弟子など定めて、例の荒氣、よも唯事にてはあらじと思ひけるに、さはなくて、むかしよりしれる人に逢ひたる如く、ことごとしき色代して、遠く送りて別れける。弟子等不審におもひ、其事を文覺にさへば、いやさよ西行は我にうたるべき者にあらず。動もすれば我にこそ打つべき氣色あれと云ひしとかや。されば、人此所に暗くして、みづからまされる人の上にたゝんさす。或は其及ばざる事を知るさいへども、及ばずとする、こゝを思ひ憚りて、人の過をたづねてそしり、我能をかぞへてかざりほこり、尙甚しきは怨みそれみ、はては害心を起すなり。人各聖にあらずれば、其非を見付けていはんには、誰かあやまちなかるべき。譬へば刀は紙をきり、楊枝をけづり、梨柿の皮を剥くが如き、一切日用の事にもちひんには、小刀には遙におさりぬべし。さらばさて、敵にのぞみ、戦をいごむにあたりて、

刀と小

小刀何の用にか立つべき。小刀のよき所あり、刀のよき所あり。刀のなす所、小刀の用にたゝず。小刀のなす所、刀、用にたたず。雖ども、其一體を論ずるに、小刀は刀と同じく論すべき物にあらず。ひとり是のみならず、不學にして學者ぶり、人に問ふ事を恥ぢ、不才にして能をてらふ、貧しくして富めるをまなび、賤くして貴ぶる、孔子常なき人を、なけれども有りとし、虚しけれども盈てりさすのたまへり、是等の類なるべし。

其の長を云うて短を言はず、我が度量を谿大にし、他の短所弊所を容れて、綽綽餘裕あらしむる底の修養あつて以て其の人物の大を見るべし。斯く妄りに自ら高しとして他を輕んずるの徒は、獨り社交の圓滑缺くのみならず、偶々以て其の人物の偏狹固陋なるを示す所以なり。

## 大度量

吾等は他に對する覺悟の此の如くなるのみならず、他より受くる毀譽紛々に對しても亦須らく此の大度量を養うて、佐久間象山が、

人已れを譽むるも己に於て何をか加へん。若し譽れによりて自ら怠らば則ち反りて損す。人已れを毀るも己に於て何をか損せん、若し毀によりて自ら強くせば則ち反りて益せん。さ、いへる如く、人の爲に動かされずして自を以て他を動かす、取捨我れにあり、褒貶は彼れにあり、彼れにあるものは彼れの自由に任せ、我に取つて資すべきは取り、資すべからざ

心隨萬境轉

るは捨つ。即ち境に應じ心を轉じ、然かも其の本性を失はざるこそ、月落ちて天を離れざるが如くせば、活殺自在、與奪縱横なるを得ん、古徳曰く、

心隨萬境轉。轉處實能幽。隨情認得性。無喜復無憂。

と、喜なく憂なく心境常に快裕、能く萬境に應ずべし。これを社交場裡に於ける修養の根本義とす。枝末の注意は多く此の根本より出づ。彼の禮儀作法の如きも社交場裡必須の要件なりと雖も、此の根本精神を缺んか、虚禮虚儀となりて却て他の悪感を招くの因たらん。

もこより禮儀作法は社會の習慣にして、今は全く形式に止りたるもの少かられど、其の奥底に至誠同情の伏在するありて此の皮相の形式もこゝに生命あるものなれば、唯だ皮相に囚はれて眞實を缺き、形式に縛せられて、本意を失する如きことなきを要す。其の儀容に關する注意も亦此の根本を逸せず。儀容の端正は何人も快きものなれば吾等の人に接する亦此の心得なかるべからざるは勿論なれど、虚飾に流れ街美に陥るは、其の本義にあらず、要は他をして不快の念を抱かしめざる程度に於て足る。人々各々分あり、悉く一ならしめ難し。唯純潔の二字、能く儀容の注意を道破し得んか。徒らに亂髮垢面、自ら豪傑の風ありとするものは、未だ眞英雄の眞面目を解せざるものなり。談話に於ても亦然り。喋々喃喃辯じ去り辯じ來りて些の誠實なく同情なきは、以て人を動かす所以にあらず。多辯なるは沈黙なるに如

儀容

談話

かず、古人も雄辯は銀にして、沈黙は金なりといへど、唯だ沈黙のみにては社交の成立すべきにあられば、吾等は句々誠實の心を離れず、言々同情の念を失はず、相對し相語り、彼れの言を容れ、我が意を徹し、習ふべきは習ひ、教ふべきは教へ、兩々相和し、彼我一致の境に入らんか、談話の快樂終に盡きざるものあらん。社交場裡に於ける修養の所詮は誠實と同情との外に求むべからざるなり。

### 七、修養の道程

上來縷述する所によりて、修養に關する理論と方法とは、略ぼ之れを知り得たれど、修養の能事は之れを以て了れるにはあらず。其の知る所を行ひ、其の得たる所を實にするに於て初めて其の目的を貫徹すべきものなれば、吾等は直ちに其實行に着手せざるべからず。されど不幸にして吾等が現實の心は、偶々心裏の奥底に潜める第一性の靈光を認めて眞我の指導に従はんとすれど、煩惱の繫縛は長へに斷えず、情欲の執着はなかくに脱し難くして、一たび輝き出せし心靈の光も何時かは其の影を隠し、漸く導き出されし良智の力も、不識の間に埋没せられて、復た黒闇々の中に葬らるゝこそ少からず。此の時に當りて奮勵一番其の隠れんとする光を止め、没せんとするの力を捉へて當面に保留し、念々去らず、刻々消えざら

實行の困難

修養の道程

修養の  
三道程  
發心、  
決心、  
相續心

修養法

二六八

しむるの習慣を造れば、曾ては容易に改め難かりし悪習も、今は自由に改められ、先きには行ひ難しと思惟したりし事も、後には易々たる茶飯の行事たるに至らん。之れを修養の三道程とし、其の初めに飄然として善に向ふを發心といひ、其の發心をして定着せしむるを決心と名づけ、此の決心を持続するものを相續心といふ。發心ありて決心なきもの、修養は、雲烟過眼の如く、唯だ善に向ひたりといふのみにて、流れに結ぶ水末の泡にも似て消え易く、決心ありて相續心なきものは、如何に其の覺悟殊勝なりとも、一日二日と經ぬ中に次第に薄らぎて、終には思はざる昔と異らざるに至りて、折角の發心も其の功なきに終らむ。

修養の要は此の發心を定着せしめ、此の決心を持続せしめ、終に習慣は第二の天性となりて任運滔々手に隨て思ふ所を行ひ、其の思ふ所をして道と相違背せしめず、

水鳥の行くもかへるもあとたえて

されども道は忘れざりけり

の境に入らざるべからず、蓋し習慣は之れを作るの初めに於ては非常に困難なるが如しと雖も一たび行はんか、一回は一回毎に容易となりて、終には殆んど無意識に行ひ得るに至る。ペイン曾て習慣力養成の法を説て、

一 新らしき習慣を作り若くは舊き習慣を破らんせば、吾等は鞏固なる意志を以て其の

習慣を  
成に關  
するべ  
イソの  
注意

事に従はざるべからず。

二 習慣が汝の生活法に固着するまでは之に反對なる事情を生ぜしめざることに注意せざるべからず。

初めて事を爲すの難きは大石を動かすが如し、されど一たび行へば石の急坂を轉するが如し。博物學者ピュホンは自ら朝起の習慣を作らんと欲し、僕に命じて毎朝己れを呼び起さしむることをし、其の報酬として金拾錢を與ふるを約せり、僕は大に喜び翌朝ピュホンを呼び起さんとして大聲に呼びしにピュホン華背の郷にあり、僕已むことを得ずして止む。ピュホン眼覺めて僕を叱し翌朝は手を以て搖り起すべきを命ず。僕、命の如く手を以て動かせばピュホン夢現の中にありて之を叱し手を舉げて僕を打つ。僕又已むなくして止む。ピュホン更に翌朝よりは如何に抵抗するも引き起せし命ず、僕此に於て屈せず、手を以て強ひて之れを起す、かくすること十餘日、終に僕を待たずして目覺むるに至りぬ。習慣は第二の天性にして其の力天性に十倍す。孔子の七十にして心の欲する所に從て矩を踰へざるに至れるのも亦此の道德的修練の結果なり。修養の語義を一面より云へば確かに此の善美なる習慣を造るに在り。

吾等は先づ其の發心して善と思惟したるの事業は直に之れを決心して實行するの習慣を造

ピュホ  
ンの力  
行の  
善美の  
習慣

修養の道程

二六九

山陽の  
逸行

らざるべからず。

昔三陽の日本外史を著すや、親友雲華院大舎に伴はれて其の稿を易行院法海に示す。時に法海、机に向て書を讀む、大舎の山陽を介するに及び徐ろに山陽に向ていふ、「聞く藝徳久太郎なる者、京に在て酒を飲んで、三年其の親を省みず、而して忠臣楠氏の傳を作る、足下豈是れ乎。忠臣は必ず孝子の門に求む、今不幸人にして忠臣を傳す楠氏知るあらば必らず之れを屠せざらん、老衲も亦此の不幸人を見ることを好まず」と、還た書を讀むこと始の如し。山陽背に汗して出でて曰く、「眞に一宗の學頭なり」と、大舎直に山陽にいふ「君素と陽明の學を講ず、知行合一、是れ今の時にあらざるなからんや」と山陽即ち行李を整へて郷に歸り母を省す。

これ直に其の善とする所を實行せるものなり。吾等も亦此の覺悟を以て善と見れば之れを行ふに躊躇する所なきを要す。既に之れを行ふ、其の行ふ所をして我が生活に定着せしむるに至らざるべからず。

禁酒の  
習慣

大酒呑が二日酔で頭が痛むものであるからもう酒を廢めやうといふのは發心だが、廢めるかと思ふと二日酔には迎ひ酒が好いなぞというて初める、これは決心がないからだ、こゝを一つ奮發して一旦悪いと知つた以上は何うしても飲まぬと決めた。決めたことは決めたが

誠實の  
習慣

南海舟、  
評す

一日か二日で三日目位になると「我が禁酒破れ衣となりけり、さあついでくれさあさしてくれ」となつては何にもならぬ。これは相續心がないので、此の相續心さへ確かで一年も二年も五年も十年も續けるも今度は飲みたくなくなる。

(講談の一節)

これ修養其の功を奏したるものにあらずや。吾等が養ふべき習慣は頗る多々にして、修養の各方面は皆な之れによりて功を奏すべきなれば此に列舉し難しと雖も、其の主要なるもの二三を擧げて修養の箴とせんか。

一 事を爲すに誠實なるの習慣を作れ。誠實とは自ら欺かず、他を欺かざるの謂なり。常に自ら欺きて一時を糊塗する習慣を作れば良心爲めに癡痺して終には唯だ糊塗を事として誠實を缺くの人たるに至り、他を欺きて目前を瞞過するの習慣を作れば永遠の洞察を缺き信用すべからざる人となり了らん、事毎に誠實なれ、然らば汝も亦他に滿せられざるに至らんか、勝海舟、曾て西郷南洲を評していふ「西郷に及ぶこの出來ないのは其の大膽識と大誠意にあるのだ。おれの一言を信じて、たつた一人で江戸城に乗り込む、おれだつて事に處して多少の權謀も用ひないこともないが、唯だ此の西郷の至誠は、おれをして相欺くに忍びざらしめた。この時に際して小籌淺略を事とするのは却て此の人の爲めに腹を見すかされるばかりかと思つて、おれも至誠を以て之

に應じたから江戸城受渡しも、あの進り立談の間に済んだのさ」云、これ誠實の玉成したるものにあらずや。

一 小事を忽にせざるの習慣を作れ。獅子の兎を捉ふるや猶ほ象を捉ふるが如き力を以てす、之れ其の象を捉ふる亦兎を捉ふる如くなる所以か。小事はやがて大事なり、千丈の堤防も蟻の一穴に崩る、小事を悔つて怠慢ならば缺陷其中に生じて補綴し難きに至らん。小事を忽にせざるの習慣之れ吾等が念々忘るべからざるの事なり。大事は多く到らずして小事は日々に來る、此の日々に來るものによりて多く到らざるの大事に當るの修練を積む。これ能く其の大事に處する猶ほ小事に處するが如きの餘裕を得る所以にあらずや。英國の或る商人、曾て事務員採用に關する經驗を語りていふ予が事務員を檢せんとするや先づ之れを一室に呼び其の入るを見るや、直に汝は不適任なり去れ」云大喝す、皆憤然として扉を開放し去る、唯一人の靜かに扉を閉ぢて出でたるものあり、予は其の男を採用せしに果して事務整理に能ある秀才なりしと、扉の開閉は以て其の人平生の心掛を見るに足る。

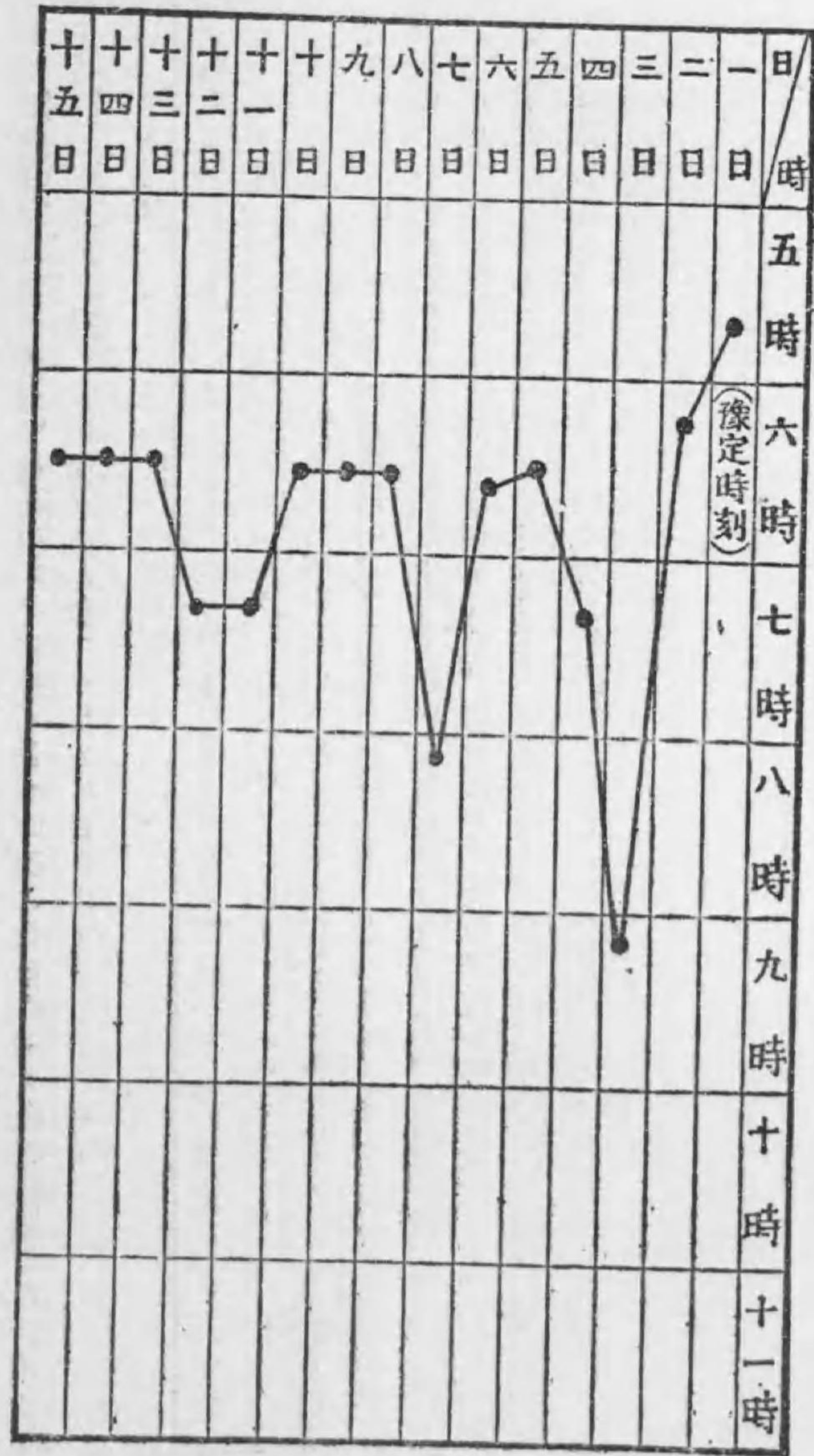
一 規律を守るの習慣を作れ。規律は守るの初めに於て困難なれど、守つて慣ひとなるに至りては守らざるを以て却て苦痛を爲すに至り、事毎に一糸紊れず秩序整然として誤

小事を忽にせざるの習慣

規律を守るの習慣

りなきに庶幾からん。ヘートの「路傍の富」には好個の例を擧げていふ「曾て貧兒より立身して大富豪となりし人あり、一青年、如何にして其の富を致したるかを問ふ。其の人答へていふ予の父は仕事を終るまで決して遊ばざることと金錢を貯ふるまで決して消費せざることとを教へたり、予は幼より此の訓誡を守り一日の中僅に三十分にして爲し終るの仕事なりとも、之れを爲さずんば遊ぶことを敢てせざりき、かくて予は今日の富を致せり」云、其の守るべきを守りて違はず、これ其の大を成す所以なり。人生の幸不幸を定むるの道唯だ一、そは善き習慣を作り來れるか、悪き習慣を作り來れるかにあり、一切の道理は此の習慣によりて其の實行を容易ならしむ、習慣は力なり。吾等は如何にもして善き習慣を養はざるべからず、如何にして此の習慣を養ひ得べきか。曾て一學生の自ら朝起の習慣を作らんとて表を作りて反省の資とせるものあり、そは自ら目覺めんとするの時刻を定め、日々之れを檢して、變動なきを求め、終に豫定の一線長へに高低なきに至らしめたるなり。

朝起きの  
圖表



時間の  
習慣

時間の習慣を作るに尙ほ一法あり、それは先づ勉強時間と休養時間と睡眠時間を定め、そを誤らざらんが爲めに日々左の如き表を製して反省の資に供することなり。

時間表	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一
三										
二										
日										
一										
	勉強	睡眠	休養	勉強	睡眠	休養	勉強	睡眠	休養	勉強





修養法

二七八

- 八 己れに心よからざることは他人に求むべからず候
- 九 腹を立つるは道にあらず候
- 十 何事も不幸を喜ぶべからず候
- 十一 力の及ぶ限りはよき方につくすべく候
- 十二 他を顧みずして自分のよき事ばかりすべからず候
- 十三 食するたびにかしよくのかんなんを思ふべし、すべて草木土石にても粗末にすべからず候
- 十四 殊更に着物を飾り或はうはべをつくらふものは、心にごりあるものと心得べく候
- 十五 禮儀を亂るべからず候
- 十六 何時他人に接するも客人に接するやうに心得申すべく候
- 十七 己れの知らざる事は何人にもならふべく候
- 十八 名利のために學問すべからず候
- 十九 人にはすべて能、不能あり、いちがいに人をすて、あるひは笑ふべからず候
- 二十 己れの善行をほこりがほに人に知らしむべからず、すべて我心に恥ぢざるに務むべく候

嘉永庚戌正月行年十五歳の春謹記

山岡鐵太郎

無碍自在の境

僅に十五歳の青年にして此の則を立て、以て自律の箴とす。吾等も亦斯る規矩を定めて之れに依據して違はざることを努め、以て無碍自在の境地に入らざるべからず、彼の紙を截つ者の其の初めは準木に據りて枉らざるを期したるも、腕熟し技進むに至れば終に準木なきも亦枉るなきを得るに至るが如く、吾等も亦古聖先賢の芳躅を準木とし一意之れに違はざる事を計らば習慣は終に性を爲して準木なきも亦誤るなきの境に至らん。修養の道程、よし函嶺の嶮ありとも、これ一時のみ、忍んで之れを踏破せば坦々たる大道、自ら長安に達するを得ん。

修養の道程

二七九

## 第三篇 修養の模範

### 第一章 聖賢の言行

#### 一、釋迦の言行

人物の大小を鑑賞するに二箇の標準あり、一は其の感化の廣狹長短にして、他は其境遇と行實との關係なり。境遇に動かされて何等自由の行動なく之れを大ならしむるも境遇の力にして小ならしむるも亦境遇なるものは、よし其の人の事業光彩陸離たるものあるも、そは境遇の力にして其の人の力にあらず。たとひ其の行蹟の傳ふるに足るものなしと雖も、能く境遇を制して自家立脚の境地を拓きたらんは又以て大とするに足るものあり。釋尊は中印度迦毘羅幡卒都の城主ストダナの子なり。幼にして穎悟、父其の出家を憂へて三時の宮殿を造り春は花咲く庭の面、夏は涼しき瑠璃の宮、冬はなれば金殿玉樓の樂み、人生亦何の不安なく缺陥なきの家庭に長じ、五天竺に隠れなき美人耶輸陀羅を妃とし三千の宮女之に従ひ翠帳紅圍の中、誰か出でて山林孤獨の生を望まんや。しかも釋尊は此の歡樂の中に在りて出離の志禁じ

釋尊の  
境遇

難く、求道の心止み難くして終に四海に等しき富を棄て、萬民の主たる國王の位を棄て美しき妻を棄て、愛らしき子を棄て、三衣一鉢の乞食生活に入りしもの其志の堅くして毫も境遇の左右する所となりたまはざりしを證するにあらずや、其の父王並に王妃離別の苦を訴へて歸城を勸むるものあるや、嚴然として、

我は一時の離別の苦を濟はんより永世の離別の苦を斷たんと欲するなり。

とて歸りたまはず、王舎城を過ぎたまふの時、國王頻婆沙羅が、若し王たらんと欲したまはゞ國を擧げて之れに臣事せんといへるに對しても、

我が志は生老病死の四苦を斷じて無上解脱を得るにあり、豈に世間の五欲の爲めに家を出でんや。王よ、希くは正法を以て汝が國を治め、民庶を虐ぐるなかれ。

といひ袂を拂つて自ら苦行の人となりたまひし如きこれ豈に薄志弱行の徒の企及し得べきことならんや。古來の英雄多く身を貧賤の境に起す、貧賤より起る事頗る難きが如き雖も、現下の不如意は能く人をして奮勵の念を起さしめ、又他に我を誘惑するものあるなし。今、釋尊、身は誘惑多き高貴の家に生れ障碍多き家庭の中に成長し、能く此の境遇に制せらるゝなくして志す所を行ふ、其の意志の強固なる以て人格の大なるを見るべきにあらずや。昨は綾羅錦繡を纏ひし紅顔の美少年、今は顔色憔悴形容枯槁の乞食僧となりて苦行怠ることなく

意志の  
強固

釋迦の言行

其の去て佛陀迦耶に赴き菩提樹下に靜坐したまふ時の如き心理の奮闘實に言語に絶したるものあるなり。

相降魔の

此の端坐默念の間には、諸種の煩惱妄想は勢ひを逞して釋尊の心中に跳梁し、其の靜思を妨げ、學道を傷けんとした、其の狀は恰も百千億萬無量の惡魔、或は猛獅の如く、或は猛虎の如く、或は鼓を鳴らし、或は劍を執りて退轉せしめんとしたが、釋尊は寂然として動きたまはず、魔王はますます怒りて大疾風を起して大石を飛ばし、大雨を降し、雷霆を轟かして之を脅やかしたれど少しも動じたまはず、心内跋扈する凡百の魔障を相手として幾多の健闘を續けたまひ、却て魔軍をして大に怯ましめられた、しかし思ふ所を達せでは止まぬ魔王は更に欲染、悅人、可愛の三魔女をして各、美裝を凝らして惑はしめんとし耶輸陀羅の姿に似せて秋波一盼、艶言喃喃として力を盡したが、釋尊は一顧だも與へたまはず獨り靜觀を續けたまひしに衆魔も今はかなはじと、其の影を隠し、臘月八日の曉星天に閃くの時、蓮華の花の開くが如く豁然として、こゝに無上正等覺を成じたまひ、三界はこれ我が有なり其の中の衆生は皆な我が子なりと覺知して終に求道の目的を達せられました。

(講演の一節)

これを釋尊の降魔とす。魔とは心内の煩惱なり、塵勞拂ひ盡くして性天日月朗かに、妄想其の影を隠くして心海波自ら靜。

爾來、横説豎説五十年、席煖かなるに暇あらず、東西に遊行し、南北に巡化し、機に隨て法を説き、病に應じて藥を與へ、或は高遠の哲理を示して時の學者を服し、或は卑近の譬喩を設けて無智の徒を化し、慈心懇切、湯仰せざるもなし。左に四五の金言を擧げて其の一斑を髣髴せしめん。

釋尊の金言

○ 惡は心より生して反りて自ら其の身を賊ふ、鐵の垢を生じて自ら其の形を消毀するが如し

○ 水滴微なりと雖も、漸く大器に盈つべし。大惡素より大ならず、小積より成る。小を輕んずるなくんば殃なきに至らん。水滴微なりと雖も、漸く大器に盈つべし。大福素より大ならず。纖々より積む、小善を輕んずるなくんば無量の福を得ん。

○ 惡を行すれば惡を得る事、苦種を種うるが如く、善を習へば善を得る事、又甜種を種うるが如し。惡は自ら罪を受け、善は自ら福を受く。各自ら熟して他に之れに代るものならず。

○ 屋を蔽ふに密ならざれば雨ふれば則ち漏る、攝意を行ぜざれば淫佚忽ち穿ち至る。

○ 欲の網を以て自ら蔽ひ、愛の蓋を以て自ら覆ひ、自ら我が身を獄に縛するは魚の網に入るが如し。

○ 愚者と雖も自ら其の愚を知らば遂に善慧を得るに至るべし。愚人にして自ら智と稱せば、之れを愚中の甚しきものとす。

○ 十千の敵に對し一夫にして之れに勝つともまた自らに勝ち忍ぶの上なるに若かず。

○ 怨は怨を以て終に息む事を得べからず唯忍のみ能く怨を息む、之を如來の法と名く。以上は主として法句經によりて抄出せるものにして眞に九牛の一毛に過ぎずと雖も一句能く人の肺腑に浸徹するものあり。其の訓話に至ては叮嚀懇切能く無智の儕輩を訓化す。要を摘んで其の二三を語らん。

人 癡 中 の

昔、長者あり新に婦を迎へ互に愛敬しぬ。夫、一日婦に命じて厨の中に入り酒を取り來らしむ。婦往て甕を開き、自ら我が影の甕中にあるを見て更に女人ありと思ひ、大に悲りて

夫に語りて卿先きに婦を娶りて此の甕中に藏し、復た我れを迎ふ、何ぞ無情なるぞ、夫、爲めに厨に入りて甕を開き、又己が影を見て却りて妻を悲り、其の男子を藏せるを疑ひ、互に其の見る所を實として相争うて止まず、一梵士あり、其の争ひを聞き往て之れを視て又我が影を見、長者が他の梵士を藏し、偽り争うて我を試みるものとし恨み去りぬ。又一比丘尼あり、又往て其の所由を實し、甕を開きて他の比丘尼あるを見て悲り去る、須臾にして道人あり、又往て之れを見て其の影に過ぎざるを知り、喟然として嘆ずらく、世人愚惑の甚しき何ぞ此に至ると、夫婦を喚びて曰く、我が汝等の爲めに甕の中の人を出さんと、一大石を執りて甕を壊り其の實にあるなきを示しぬ。佛はこれを以て喩としたまへり。三界の人、皆な假身を知らずして實に我ありさして食欲嗔恚を起し邪見を抱き、日夜惡業を造り流轉の生死絶えざるは恰も是の如しと。

(雜譬喻經)

好喩能く人をして得入する所あらしむ。其の人生の苦惱を形容して、

佛、波斯王匿大王に告げたまはく、此に人あり、曠野に於て惡象の逐ふ所となり、怖れ去れども依るべきものなし。偶く一の空井あり。傍に樹根あるを見、根を尋ねて下り身を井中に潛む、時に黑白の二鼠あり、互に樹根を噛み、又井の四邊より四の毒蛇ありて其の人を齧さんとし、下には毒龍あり口を開きて吞まんす、心に龍蛇を恐れ、又樹の根の斷え

人 生 の 苦 惱

んとするを恐るれども、奈何ともすべきやうなし。更に樹根に蜂窠あり、樹搖きて蜂散じ下りて此の人を螫し、野火は來りて此の樹を焼く。唯だ蜂に蜜あり日に五滴を人の口中に落す、此の人蜜を得て憂怖苦惱を忘れ、其の心中五滴の蜜あるのみ、大王よ、此の人の少味を貪りて此の苦惱を忘るゝは憐れむべきにあらずや。大王よ、此の人はこれ餘人にあらず、衆生の世樂に貪著して大なる患を思はざるに喩へたるなり、曠野は無明長夜の曠遠なるに喩ふ、象は無常なり、井は生死なり。嶮岸の樹の根は命なり。この鼠は晝夜なり、樹の根を嚙むは念と生滅なり、四毒蛇は地水火風の四大なり、蜂は邪念なり、火は老病なり、五滴の蜜は色、聲、香、味、觸の五欲なり。毒龍は死に喩ふ。

(譬喻經)

といへるは、高遠の哲理を詩人も及ばざる想像を以て示せるものにあらずや。其の

譬喻二則

昔、人あり、友の家に至り其の米を擣けるを見て窺かに偷んでこれを含み友の出で來りて共に語らんとするに當り、米の口中に滿つるが故に之れに答ふる能はず、されど友に羞ぢ嘔みて吐かず。友、怪んで手を以て之れを模し其の口腫れたりさし醫を招きて之を治せしむ、醫曰くこの病最も重し、刀を以て決するに非ずんば治すべからずと、刀を執て其の口を決破す、米口中より出で、其の事露はれぬ、世の人も亦此の如し。諸の惡作を爲し、之れを覆うて敢て懺悔せず、之れを覆はんとして却て他の惡を作る三塗に沈む。(百喻經)

釋尊の  
入滅

昔、獼猴あり、一把の豆を持て誤りて其の一粒を落す、乃ち手中の豆を捨て、其の一を求めんとし、未だ之れを得ざるに先きに捨てし所のもの悉く雞鴨の食ふ所となれりと、凡夫も亦此の如し、一戒を毀りて悔ゆる能はず、悔いざるを以ての故に放逸滋蔓し却て一切の戒を捨つ。(同上)

の如きの數枚舉に違あらず。釋尊は實に此の如くにし、法を説きたまひ、終生倦むなく、八十の高齡を以て尼連禪河の畔、娑羅双樹の陰に寂然として逝きたまひぬ。其の最後に當りても諄々教へて止まず、遺弟を戒めて、

汝等比丘、常に一心に出道を勤求すべし、一切世間動不動の法は皆なこれ敗壞不安の相なり。汝等、且く語ることを止めよ、時將に過ぎんます、我滅度せんとなす、是れ我が最後の教誨とする所なり。

佛教

と、眞にこれ大河の緩流して海に入るの概あり、時に西曆紀元前四百七十九年二月十五日夜半。釋尊、涅槃の雲に隠れたまひて三千年、遺法遠く今日に傳はりて信徒五億萬彪然たる宇内の大宗教たり。其感化の長くして其の教域の廣き、以て其の人格の大なるを知るに足らずや。一代の言行は悉く吾等が修養の活模範にして八萬四千の法門、五千七百の經卷は、皆なこれ吾等が修養の好資料たり。蓋し佛教は普く人心の三方面に互りて哲學的には轉迷開悟の

道を説く、宇宙と人生とを達観して其理を求めしめ、宗教的には離苦得樂を示して現實の苦を脱して理想の樂境に安置せしめんとし、倫理的には止惡修善の法を教へて躬行實踐せしめ信仰と理解と實行とによりて釋迦の證入したると同一状態に入らしめんとするものにして、釋迦一代の教化は之れを開示悟入せしむるにありたれば、何れの點も皆な以て吾等を啓發し督勵するにあらざるなけれど、到底之れを此の一小冊子に示すこと難ければ此には略することゝなしぬ。

## 二、基督の言行

身をパレスチナの邊鄙に起し、教を布くこと僅かに三星霜、不幸反抗者の手に罹りて十字架上の露と消え壯年にして世を去りしイエス、キリストの靈化は、今に至りて二千年常に、新らしき教訓を世界の人民に與へ、深く人心の祕奥に浸徹す。彼れ抑も何の靈力ありて然るぞイエスは名、キリストはあぶらそいもの沃膏者と云へる尊稱なり、幼年の言行は後代文献の徴すべきものなく、使徒の手になれりと傳ふる共觀四福音も（馬可、馬太、路加、約翰）共に之に關しては教ふる所なし。唯路加書（三ノ四一）にイエス十二歳にして逾越祭の時父母に拉れられてエルサレムに上り父母に離れて聖殿にあること三日、法教師の間にありて問答をなし其の奇才に

キリス  
トの幼  
時

駭かれつゝありきと傳ふる説話あるのみ。

イエスが愛なる神の自覺に至る迄の半生は其故郷ナザレに在りて父の業を繼ぎ靜平なる生涯を送りたるものにして、其の教育と云へるものも時代の風習により普通の讀書を教會の法教師より授けられしに過ぎずして、且つ彼の希臘の文化、若くは猶太の煩瑣なる哲學の如きは曾て之れを知らず、舊約の聖經も波伯來の語を以て之を讀みしにあらで、同代の俗語たるアラミアン語譯に由りたしものに似たり。

さらばナザレの一木工が子、イエスをしてキリストたる自覺に到達せしめしものは何ぞ、曰く舊約の聖經と、ナザレの風光と是なり。

舊約の  
聖經の  
ナザレ  
の風光

舊約の聖經たるモーゼの五書及び預言者の書若くは數多の經外の古典は彼れが胸裡に入り來りて天來の妙音を傳へ、イザヤ其の他の預言者が勇猛なる叱咤、律法の森嚴なる教訓は曾て幾多の預言者を鼓舞せしにも倍して此天才に敬神的精神を振作感化せしめ、殊にイエスの生れたるナザレの地は、ガリラヤの南、エナドレロン平原の南部一帯の山嶺の平らなる所、葡萄、無花果の實りよく、民貧しからぬ山間の小會にして四方を繞れる山邱より眼を放ては西カーメルメギドの山々聳え、追憶多きシエケムの峰々ホルの邱と相逢ふ所、ヨルダンの谷ベライアの平原目も遙に、北サツエツトの群山相追うて海に陥り、カイファの入江を見つべ

し。此に生れしイエスの國人は輕快舒暢の氣風に富み、髮長き乙女は麗容今に至る迄依然として處女マリヤの遺賜を有つイエスが精神の裡に生れ出でし天國の搖籃は實にかゝる天然の惠多かる地なりしなり、斯る自然の懷にありて、波伯來古代の熱烈なる舊約に育てられしイエスが、三十にして初めて其の聲を擧げて神の子たるを世に告げしは偶然の奇蹟にはあらざるなり。

愛の神

此の天然の風光と、宗教的思想とに養はれし彼れば、古來イスラエル國民の神たりしエホバは渾て是れ愛なる神たりとの信仰を生みぬ、蓋しモーセ、ダビテの胸に浸み入りし神はシナイの山に電はためき、雷どもす恐ろしき神にして、天の威靈は選民に福し、異教に禍し約束の國にイスラエル王國を立てしめ、聖都に犠牲を捧げて之を和むる神なりしも、一度天才イエスの胸裡に入りては神は一種慈愛の測るべからざる泉となれり。神はやがて慈悲の存在なり、この心やがて神我と偕に在りとの信仰に達し、神は父にして我は神の子、神は我と一なりと云へる歡喜を生じぬ。

彼れの神はかのモーセ等が信ぜし如く昊天の上高く寶座にある有形のものにもあらず、神殿の裡に祭祀するそれにもあらず、神は無形の心靈にして、唯我曹が心中にのみ之を求むべしとせり。神を拜するには敢て神殿を要せず、儀式を須たす、衷心至誠の念を以てすれば一

視同仁に福祉を下す愛の神なりき。

ヨハネ

イエスが新らしき神の愛を衷心に認めし頃、ユダヤの野より出でし浸禮バプテスマのヨハネ、天國は避けり悔改めよと叫び、毛裘を着け蝗を食ひ、野蜂の蜜を吮ひつゝ、ヨルダンの谷に來りぬ。この時民衆はこの預言者が今や斧は樹の根におかる、凡て實を結ばざる樹は斫られて火中に投ぜらるべしと云へる警告に駭き、争うてヨルダンの谿水に身を淨めて、來るべき審判に火の坑を免れんとしたり、ガリラヤに在りしイエスも又人々のなす所に從ひ其弟子と共にヨハネの許に至りて浸禮を受け、即ち野に行きて惡魔の誘惑と戦ふ。請ふ其の狀を語らしめよ。

誘惑

寂寞たる曠野に坐し食はざること四十晝夜、飢乏勞れしイエスの坐するを見、惡魔現はれて之を試みぬ。傳説の教ふる所に由れば惡魔初めに汝若し神の子ならば何ぞ此の石を變じて麵麩となし以て飢を癒さざるを、イエス聖經の文を引いて、人は麵麩のみにて生きるものに非らずと答へて之を斥く、惡魔イエスをエルサレム聖殿の絶頂に拉し、告げて曰く試に汝此處より飛び降れ、神其使に命じて、汝を手にて支へ其足を石に觸れざらしむべきなりと、イエス聖經の語を引いて神を試む可からずと叱す。惡魔三たびイエスを山の巔に拉して世界の榮華を示し、汝若し俯して余を拜せば、この榮華は悉て汝の有たらんと、イエス此の語を聽き怒つて答へけらく、サタンよ退け、聖經は我曹に教へて主たる神を拜し唯だ之にのみ事ふ



べしと云へるに非ずやと、天下萬人の惑ふ處のものは、令名なり、榮譽なり、黄金なり、世界の富貴なり、古來英傑の退くる能はざる所のもの實に是れ而已、この傳説の謂ふ所はイエスが心内の奮闘、正義の勝利、やがては彼が偉大なる人格の完成に非ずして何ぞや。  
 ナザレにありて其の萌芽を生かせしイエスの信仰はヨハネの浸禮と悪魔の試練とによりて終に大なる高調に達しぬ。愛なる神の我曹と偕にある歡喜は絶大なる力を孕み、溢れて彼が行爲に現はるゝに至りき、

傳道  
 イエス三年の傳道は其境甚だ廣からず、蘆荻水を搖がし款乃ゆるやかに滿帆の風を孕み、夕さりくれば漁夫の夢穩やかなるガリラヤの湖の邊、南はエルサレム、東はデカポリス、北はツロ、シドン、カイザリヤセリプの間にとまりぬ。山上の垂訓又この湖畔に起りし天來の妙音なり。暗黒なる死の陰に住める民はこゝに初めて天來の光明に接しぬ。

の基督教の根本  
 イエスが一代の教訓は隨處に行はれしものにして一定せる教條を以て教化せしものに非ず多くの古聖の其れと同じく機に應じ類に隨がひ、其所化の境遇性質に適合せる訓誡を與へたるなり。されど其の根本の思想は一なり、曰く神の愛に由りて祝福せられたるものは神の御旨を顯はさんが爲めに又他人を愛し、己を咒咀ふ者の爲めに祈り神の己を愛し給ふ如く他を愛すべしと云ふにあり。イエス一代の傳道はこの一個の源泉より流れ出でし水のみ。時とし

ては薄となり淵となり瀬となりなることあるも畢竟は這の源泉に歸するを得るなり。替てイエス、パリサイの一教師がモーセの律法の中何れが最も大なるかを問へるに答へて、全心全力を盡して神を敬愛す可し、是れ第一にして最も大なるは誠律なり、第二も又之れに同じ、即ち己を愛する如くに他を愛すべし、一切の律法と預言者の教へし所とは皆この二大律に基けりと言ひき。愛の源泉より流れ出でしイエスの説教は發して山上の垂訓となりき。これ實に後代基督教傳道の發足點にして其の倫理と修養は全く此に盡きたり。

福なる哉心の貧き者や、それ天國は彼等の有たればなり。福なる哉悲む者や、それ彼等は慰めらるべければなり、柔和なる者や、それ彼等地を嗣ぐべければなり。福なる哉義に飢ふ渴く者や、それ彼等は飢ふ足らざるべければなり。福なる哉、恤深き者や、それ彼等恤まるべければなり。福なる哉心の清き者や、それ彼等は神を見るべければなり。福なる哉、和平を事とする者や、それ彼等は神の子と稱へらるべければなり。福なる哉、義の爲に苛く責めらる者や、それ天國は彼等の有たればなり。福なる哉我、爲に罵られ詐はらる者や、それ天の報大なればなり。汝等は地の鹽、世の光なり。兄弟を怒る勿れ、之れと和げ、もし汝の右の目と右の手汝を踏さば、切りて之れを棄てよ、惡人に敵する勿れ、人汝の右頬を打たば、他の頬をも彼に向けよ、下衣を取らん欲して訴ふる者には其の上衣をも與へよ。乞ふ者に與

て借らんとする者を卻けざれ。己の敵を愛し汝を攻むる者の爲に祈れ、是れ汝が天父の子たらんが爲の故なり。人の前に義を爲すこと勿れ、右の手の爲す施與を左の手に知らしめず、戸を閉ぢて隠れたる汝の父に向ひて、天に在す我等の父よ、願くは御名を崇めさせ給へ、御國を臨らせ給へ、爾旨の天に於ける如く地にも成らせ給へ。我等の日用の糧を今日も與へ給へ、我等が負債ある者を赦せし如く我等の負債をも赦し玉へ、我等を試練に試み玉ふ勿れ、惡より我等を拯出し給へ。國と權と榮は窮なく爾の有たればなり。アメンと祈れ汝地上の寶を蓄ふることをなく、蠹くはず、錆びず、腐らず、竊まれざる天の寶を蓄へよ。天の寶ある所汝の心又あるべければなり。身の燈は眼なり、眼あしからば身は暗かるべし、若し汝の中にある光暗からば、その闇は如何ばかりぞや。

汝何を食ひ、飲み着んご念ひ煩ふ勿れ、命は食物より優り、身は着物より優れるには非ずや、空の鳥、野の百合をも神はかく装はせ給ふ、況て汝を装ひ給はざるべきぞ。

汝先づ神の國と其義を求めよ。さらば此等のものは皆汝に加へられん。

汝人をさばく勿れ、兄弟の目にある塵を見て、反て己の目にある梁を思はざるか。求めよさらば與へられん。尋れよ、さらば會はん、戸を叩けよ、さらば開かれなん。

それ廣き大なる門は滅亡に導くものなり、小き門窄き道は生命に導くものなり、生命に至る人それ何ぞ歎き。善の樹は惡き果を結せず。唯天に在す神の御旨を行ふ者のみぞ天國に入るべき。

凡そ我言を聽きて之を行はざる者は沙上に家を建つる愚者に同じ、雨來り川漲り、風吹かば其沿は倒るべし。而して其覆ること大ならん。

(馬太傳取意)

と、全人類の父なる神は人類の福祉繁榮を其旨となし、人類の善惡邪正は皆此神意に順ふか適はざるかによりて定まる。神意は無上の權威にして其旨は人類の相愛にあり、神の在る所即ち天國にして神は我曹と共にあるなり。天國はこゝにありかしこにありと云ふが如きものに非ず、相愛する兄弟の中にあるなり。イエスが教ふる所は實にこの神の天國を世に臨ましめ、神と偕に在らんと欲する努力に外ならず。

されどこの天國の門に入らんとするには、其心嬰兒の如くならざるを得ず。嬰兒の如く自ら謙遜なるものは天國に入りて大なるものなり。イエスが曾て嬰兒の來れるを祝福して云へらく、天國にある者は悉て斯の如し。我誠に汝等に告げん、嬰兒の如き心を以て我教を受けざるものは天國に入ることを得ざるなり。又天國の窄き門は富を擔ふ者は入ることを得じ。富者の天國に入るは駱駝の針の、穴をさほるより難しと、謙遜、無欲、恬淡にして盜賊の求めに任せて其持てるものを與ふる者に非ざれば天國の門は開かれざるなり。

一視同仁の愛を以て地上に天國を來さんとするイエスの理想は三年の教化となり、福音の宣傳となりけるが、彼は汚れたる者を嫌はず、癩れたる者を愛し、呪はれし者を祝福しぬ、イエス、ユダヤよりガリラヤに歸らんとするの路、會サマリヤを経、スカルの邑にあるヤコブの井戸に於て一婦人の水を汲めるを見、之に水を乞ひたり。抑もユダヤは古よりサマリヤを敵視し、之と交はる事なかりけれど、イエスが精神は斯る地上の争を以て謂なき事とし、女の訝れるを論して活ける水を與へんさせりき。イエス曰く凡そこの水を飲む者は復た渴する事あれども予の與ふる水は、一たび之を飲めば、泉となりて永久に湧き出で其人を永生に至らしむべしと、五人の夫を有ち一人の情夫を有せしサマリヤの女は救世主の活ける泉によりて淨められ永生に入りぬ。イエスの眼中終に一個の敵なし。假令サマリヤの人なりとも其行にして仁慈ならば貪慾なるパリサイ、サドカイの徒よりは神の旨に適ふべしとはイエスが教へたる所なりき。

イエス、一タパリサイの徒と會食せる時、醜行かくれなき一婦人の來りて香膏を以てイエスの髪に抹り、涙にイエスの足を濕し、己の頭髮を以て之を拭へるを退けざりければパリサイの徒の訝かれるを察し、席にあるシモンに二人の債務者を赦せし喩を談り、罪の大なりし者は神之を愛すること又大なりと教へし説話は、エルサレムの殿堂に於て姦淫の婦の石もて撃たれんとするを救ひたる説話と好一對の寛容の徳を現はす。イエスの眼中唯神の愛子あるのみ、姦婦と淫婦とはあらざりき。至誠は彼等を救ひたれば唯二たび犯す勿れと戒しめたるのみ。

イエスは又人の齒せざりし収税吏ザアカイの家に宿りて之を教化し、或時は當時の社會より罪人と目されたる人々の饗宴に臨みて毫も恥づる色なきのみならず、健なる者は醫を須たず、彼等こそ悔改むべきものなれと答へて罪惡に沈淪せる不徳の者共をば教化したりき、加之イエスが十二の使徒の中、福音經を書きしと傳ふるマタイは實にかゝる収税吏たりしなり。イエスが務は彼が自ら云へる如く罪に沈める者を尋れて之を救ふにありき。彼が努力は蓋し九十九の羊を措いて一頭の迷羊を夜もすがら山に求むるにありしなり。

イエスは果して救世主なる自覺を有し、エルサレムの宮殿に坐し其の王國を建設せんを欲して聖都に入りしものなるや否やは今問ふを要せざれども、然れども彼が所謂天國は地上眼に見ゆる榮華の象徴にはあらで、神我等と偕にある平和の天國なりしにちかし。年三十にして初めて神の愛を認め道を傳ふる事僅かに三年、教敵の爲に乗せられて、エルサレムの郊外ゴルゴタの邱上に刑せられけれども、其愛の福音は地上の劍の爲に妨げらるゝことなく、使徒ペテロ、ホーロ等を始めとし幾多の殉教者は異教徒迫害の手に身を殺して毫も悔ゆる所な

く、其の血を以て教會を装ひ、終に幾百年の基礎を羅馬に安んじたりし所以の者は、殉教者の熱誠に由りしものさば云へ、イエスが偉大なる人格と、試練に堪へし精神の發露と云はざるを得ず。

三、孔子の言行

孔子の人格

「之れを仰げば彌々高く之れを鑽れば彌々堅く、之れを瞻て前にありとすれば忽焉として後に在り、夫子循々然として善く誘ひ、我を博むるに文を以てし、我を約するに禮を以てす、罷めんとして能はず、既に吾が才を竭くし立つ所ありて卓爾たるが如し、之れに従はんと欲すも雖も、由なきのみ」と、これ我が孔夫子の人格を髣髴せしむるものにあらずや。一言一行天下の則となり、一舉一動萬民の法となる。

名は丘、字に仲尼、周の靈王の二十年冬十月を以て魯の昌平郷の隙邑に生る。父は叔梁紇母は顔氏、夙く父を失ひ、賢母の手に鞠養せられ幼にして嬉戯するに常に俎豆を陳れて禮容を設けしと、嚴肅なる家庭に在りて起居禮に適はんことを修養せしを想見すべし。十五にして學に志し、二十にして魯に仕へて委吏となり、事務を處理すること頗る公正敏活、後、周に遊びては禮を老子に問ひ、齊に遊びては景公に治國の要を説き、學徳愈高く隨て業を受く

幼時

大司寇

るもの頗る多し。魯の大司寇となるや、獄訟を斷ち事理明白、弊政を革新して、國威大に振ふ。淮南子にいふ「孔子魯の司寇となりて道、遺を拾はず、市賈漁買せず、田漁皆な長に讓り斑白負載せず」と所謂君子行く所として可ならざるなきものか。

攻に武

夾谷の會

隣國齊の景公禮を修めて魯の定公と國境夾谷に會盟せんとす。齊の大夫季釗、景公に言つて曰く孔子禮を好んで勇なし、兵を以て不意に劫かさば必ず志を得んと、定公の出でんとするや、孔子進んで曰く、臣聞く文事あるものは武備あり、武事あるものは必ず文備あり。古者諸侯疆を出づるには必ず武官を具ふ、今の會盟も亦司馬を具へ武臣を従へんと。かくて夾谷に壇を設け兩國の國主互に揖讓して登る。獻酬の禮終り、齊の有司、進んで曰く、請ふ四方の樂を奏せん。景公諾す。此に於て旌旗、旄を執り矛戟撥を以て鼓噪して定公を劫す。蓋しこれ齊の威嚇的手段なり。孔子忽然として趨り進み、階に登り一等を盡さず、袂を舉げて曰く、今我が兩君好會を爲すの時に當り、此の如きはこれ夷狄の樂なり卻けざるべからずと。景公心に恥ぢて之れを去らしむ。齊の有司又進んで曰く、請ふ宮中の樂を奏せん。景公諾す。因りて優倡侏儒の徒、出で、前に戯る。孔子又趨り進みていふ、斯の如きは匹夫にして諸侯を熒惑するものなり、常に誅すべしと、手づから斬りて手足を異にす。景公大に懼れ、歸來群臣を責めて曰く、今、魯、君子の道を以て其の君を補佐す。汝等、予に夷狄の道

を教へて罪を魯君に得せしむ。終に曾て侵略せし地を還付して其の過を諭せりと。温良恭儉讓なる孔子の行動として奇態の觀なきにあらずと雖も、身一國の休戚を負ふ、此の如くにして初めて其の責を全うすべきにあらざるなきか。後儒之れを附會として抹殺せんとするものあるは却て孔子傷くるものにあらざるなきか。

外交既に成り専ら心を内治に用ひ、或は大夫少正卯を誅し或は三都を毀して、陪臣の跳梁を制し以て公家の隆盛を期せしも、事、志と違ひ、慨然として故國を辭し、四方に周遊して廣く大義を天下に暢べんとし、孔席煖かなるに違なく、漂浪十四年、足跡十國に印す、其の最も困厄を究めしものを陳蔡の間とす。荀子にいふ、

陳蔡の厄

孔子、南楚に遣せんとして陳蔡の間に厄す、七日火食せず、藜藿、糗せず、弟子皆な飢色あり、子路進んで問うて曰く、由、之れを聞く、善を爲すものは天之れに報するに福を以てし、不善を爲すものは天之れに報するに禍を以てす。今、夫子、徳を累れ、義を積み、美行を懷くの日久しくて、奚ぞ、居の隠するや。孔子曰く、由、讖らざるか。吾れ女に語らん。女、知者を以て必ず用ひらるゝと爲すか、王子比干は心を剖かれざらんや。女、諫者を以て必ず用ひらるゝと爲すか、吳子胥は姑蘇東門外に磔せられざらんや。夫れ遇不遇は時なり、賢不肖は材なり、吾子

逆境の福音

晩年

博學深謀にして時に遇はざるもの多し、是に由く之を觀れば世に遇はざるもの衆し。何ぞ獨り丘のみたらんや。且つ夫れ芷蘭は深林に生じなきを以て芳ならざるにあらず。君子の學は通するが爲めにあらず、窮して困まず、憂へて意衰へず、禍福終始を知て心惑はざるが爲めなり。夫れ賢不肖は材なり、爲不爲は人なり、遇不遇は時なり、死生は命なり、今其の人あり。其の時に遇はざるは賢なりと雖も、其れ能く行はれんや。苟も其の時に遇はば何の難きことか之あらんや。故に君子博學深謀、身を修め行を端して以て其の時を俟つ。

と、これ逆境の好福音に非ずや。匡に住きては匡人陽虎を殺さんとし、孔子の容貌相似たるを以て帶甲して其舍を圍むも、平然として、詩書の習はざる禮樂の講ぜざるこれ丘の罪なり吾れ陽虎に非ず我を以て陽虎と爲すは丘の罪に非ず命なりと子路と共に相和し相歌ひ宋に往きては桓魋の殺さんとするに遇ふも、自若として天徳を予に生ぜり、桓魋其れ予を如何せんといふ如く一難を経る毎に志氣愈々高く以て其人格の偉大を證す。

晩年、魯に歸りて志を當世に斷ち、道を千載に傳へんと欲し、詩、書、禮、樂を刪潤し、易傳並に春秋を述作す。詩は諷詠にして詩三百、一言之れを蔽へば思ひ邪無きに歸し、書は堯舜を祖述し文武を憲章す、所以、禮は政治の要、人倫の序、樂は即ち藝に遊ぶものにして易はこれ形而上學にして宇宙の玄機を探り、春秋は魯の史記にして法を萬世に垂れ、周の敬

修養の  
徑路

王の四十一年（西曆紀元前四百七十九年）を以て卒す。一代の行實は皆なこれ修養の典型にして、其の教ふる所は悉く修養の規箴なり。晩年、修養の徑路を回想して云ふ。

吾れ十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り六十にして耳順ひ、七十にして心の欲する所に従ひて矩を踰えず。

と、一生學に志し徳を修め、人に教ふるにも亦進學修徳を以てし、

進學

我れ生れながらにして之れを知るにあらず、古を好むが故に敏くして以て之を求めしなり

と、其の  
仁を好んで學を好まざれば其の蔽や愚。知を好んで學を好まざれば其の蔽や蕩。信を好んで學を好まざれば其の蔽や賊。直を好んで學を好まざれば其の蔽や絞。勇を好んで學を好まざれば其の蔽や亂。剛を好んで學を好まざれば其の蔽や狂。

と説いて講學の必要を示し、思うて益なし學ぶに如かずと教へていふ。

君子、食、徳を求むることなく、居、安を求むることなく、事に敏にして言を慎み右道に就いて焉を正す、學を好むと謂ふべきのみ。

道に志す

朝に道を聞かば夕に死すとも可なり。

三徳

賢を見ては齊しからんことを思ひ、不賢を見ては内、自ら省みる。

と、いひ、  
さいふ類、吾等を啓發す、其の修徳に就ては智、仁、勇の三者を以て達徳とし、道に志し、徳に據り、仁に據り、藝に學ぶを以て人格修養の法とし、

君子の道は三、我れ是れを能くすることなし、仁者は憂へず、智者は惑はず、勇者は懼れず。

と、其の仁を説くや「君子終食の間も仁に違ふことなく、造次にも必らず是に於てし、顛沛にも必らず是に於てす」といひ、

仁遠からんや、我れ仁を欲せば斯に仁至る。

と示し、更に此の仁の主要なる觀念を曾子に示して、

參か、吾が道は一以て之を貫く、曾子曰く唯と、子出づ、門人問うて曰く何の謂ぞや、曾子曰く夫子の道は忠怨のみ、と。

子貢、問うて曰く一言にして以て終身之れを行ふべきものありやと、孔子曰く、

其れ恕か、己の欲せざる所、人に施すこと勿れ。

と、其の勇を説くや、司馬牛、君子を問ふ、孔子曰く、

忠恕

内省不  
疚

詩と樂

天命

憂へず懼れず。

と、牛いふ、憂へず懼れざるもの君子といふべきや。孔子いふ、

内省みて疚しからず、夫れ何をか憂へ、何をか懼れん。

と、内省不疚は眞勇の源泉、之れあつて初めて、「志士仁人生を求めて害するこゝなく、身を殺して仁を成すことあるを」得んか。孔子は實に此の三徳を兼ね更に藝に遊ぶの餘裕ありたるなり。其の詩といひ樂といひて文藝的修養を鼓吹せられ樂に就ては論語に「子、齊に在り韶を聞き、三月肉の味を知らずして曰く、圖らざりき樂を爲すの斯に至らんとは」とあり。淮南子に「榮啓期一たび彈いて孔子三日樂しむ」とあり、詩に就ては論語に「小子何ぞ詩を學ぶこゝなきか。詩は以て興すべく、以て觀すべく、以て群すべく、以て怨すべく、以て怨すべし。之れを邇くしては父に事へ、之れを遠くしては君に事へ、多く鳥獸草木の名を識る」とあり。皆な之れ趣味啓發の資にあらずや。

孔子の言行は常識的現實的なり。常識的現實的なる中に犯すべからざる信念と柱ぐべからざる操守とを見る。其の

罪を天に獲る禱る所なきなり。

天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す、我を知るものは其れ天か。君子三畏あり、天

命を畏、大人を畏れ、聖人の言を畏る。

天何をか言はん、四時行はれ百物生ず、何をか言はんや。

さいへる中には敬虔の情溢れ、其の

蔬菜を飯ひ、水を飲み、肱を曲げて之を枕とす、樂亦其の中に在り。不義にして富み且つ

貴きは我に於て浮雲の如し。

と、いひ、

富にして求むべくんば執鞭の士と雖も、吾れ亦之れを爲さん。求むべからずんば吾が好む所に從はん。

といふ、超然として然も操守する所の堅きを見る。之れを仰げば彌々高く、之れを鑽れば彌々堅し。吾等は此の模範により此の教示に従ひ以て此の人格に近づかざるべからず。

#### 四、ソークラテースの言行

基督降世前四百六十八年（或は七十年）、希臘阿典府に大聖ソークラテース生る。父はソフロニコスと呼べる彫像師、母は産婆を業とせるフェナレテ、其の家甚だ富まず、幼にして僅かに市民の普通の教育を授けられしに止まり、多くは父の業に従ひ日に彫刀を手にしたりし

ソークラテースの言行

脱俗

父母

も、自ら好まずして早く之を廢したりしが如し。

彼が哲學的教育を受けしや否やは今詳ならず、萬物轉變の理を唱導せしめバルメニテースの教を聽き、又は其の時代のソフイストの教を受けし事ありと説く者あれども恐らくは唯かゝる書を読みしに止まり、面受せられたるにはあらざりしならん。少壯にして自然哲學を學びし事、壯年三度軍に従ひし事と四十に至らざるに父の業を抛ち、専ら道途に精神の修養を説きたる外は多く知るに由なし。

ソークラテース未だ教を傳へざる前、阿典府の征軍に従ふ事三度、多くの逸話ありて以て彼が堅忍剛毅の性情と其の武名を談る。曾つて軍に在りし時天寒うして雪大に降り、人々苦寒に惱める時、彼は薄衣徒跣にして四方を奔馳し、毫も苦痛の色を示さず、酒を飲まず、飢餓を意とせざりき。ポチダー戰役の時夏日陣營の前に佇立して靜かに哲理を冥想し、朝より晝に至り、夕に及び、夜半も過ぎ、翌日の朝暾靜かに東天に現はる、頃、初めて朝祝してをりし事ありき。プラトーンとアルキピアデスの負傷を救ひしは實にこの戰役なりき。

ポチダー戰爭の後七年、阿典の軍デリリウムに敗れし時もソークラテース又軍に従ひしが其の態度の沈着にして死を恐れざりし風采は、プラトーンをして轉た敬慕の念を起さしめ後年彼の言行を録したるクセノハニースが此の役に負傷して馬より落ちしを見て、己が肩に擔

軍中の  
ソーク  
ラテース

ひて救ひしは實にソークラテースなりき。

戰役より還れるソークラテースは選ばれて評定官、司法官の職に就き、終に元老院議長となりしが、此職にありし間も彼は正義と剛毅を以て徳義を行ひ、暴政を峻拒し、或は全議會に反對して自己の理を信する所を敢行し、毫も躊躇する事なかりしのみならず、漠然たる習慣と傳説に倚らず、明確なる知識を以て社會百般の事を處理し、口に説く徳義の實行を示したり。

ソークラテースの一生の事業は彼が野に下り、庶民の裡に逍遙して以て青年の愛人たるに至りて始めて其の真相を發揮しぬ。彼の風貌は眼大にして突出し、唇厚く、腹肥満し、星低く一見して甚だ肉慾に渴ける人の如かりしと、其の思想の堅實高尚なること談論の方法頗る世人の耳に新らしく加ふるに事に當りて從容として迫らず、彼の詭辯者の如く美衣を着けず贈を受けず、弊衣徒跣、恬淡寡慾なりしものから、阿典の市民が注目焦點となりしは、元よりさるることにて、彼が打鳴らす道途の木鐸は期せずして一世の師表となり、特に青年の耳目にはたまへ方なき崇高の念を與へたりき。

ソークラテースを敬慕して常に其の教を聞きし者はその教甚だ多く、何人にも彼が説に耳を傾くる者は必らず此を教化せずんば止まず、而して其の教化には常に對話を用ひたりき

對話法



彼れ思へらく、人は個人に各々異なる所見を有し終に一致合同すること難きに似たれども、さりとして詭辯者の考ふるが如く吾人知識の成立は決して妨げらるべきものに非ず、其相異なる意見の裡に自ら生じ来る合同一致あり。即ち真正の知識に非ずして何ぞ、換言すれば此の合同一致こそ蓋し眞實の自體、實在界なれ。此眞實界よりして世界に現はれ來りしもの即ち一切の現象なり。吾人は此の現れ來りし一切の感覺や欲念の爲に妨げられて眞正の知識たる理想界に到達する能はず。若し吾人にして世界萬象の虚妄を離れ眞正の知識に至らんとせば必然として吾人の精神を清淨ならしめざるべからず。即ち道德的躬行を以て虚偽に満ちたる欲念を拂拭し、以て眞正の知識に達すべし。而して其の眞正の知識即ち各人の合同一致する知識に達するには常に相集りて談論し對話せざるべからずと。

さは云へど彼は自ら知識あり、道德ありと號し、又は天地自然の神祕を探る所謂純正哲學の宗匠なりと謂ひしにあらず。彼れ常に學徒を警しめて天地自然の神祕は之を究むるも要なし。吾等は天地自然の眞を知るに先ちて、汝自身を知らざるべからずと謂へり。彼の哲學が煩鎖なる談理を避け、朝に道を聞けば直に之を身に行ふを得る倫理なりしこそは此の一事を以て知るを得べし。且つ自らも何等の知識なき無學者なりと號し、曾てデルフワイの神託を以て阿典第一の知者なりと宣せられし時、彼は阿典府中我よりも大なる知者無きは頗る悲しむべきなりと慨きたりき。

汝自身  
を知れ

産婆術

彼れが對話談論を他と交ふるに當りてや、先づ己の無識なることを告げ、以て他に學ぶ所あらんと云ひ、他が此に乗じて喋々として自説を吐くを聞きつゝ、漸やく之を缺陷の地に誘ひ以て自家撞着の坑に陥れ、他が自己の無識を覺るに及んで、徐ろに其説を破し我執を去り、かくて其胸裡に潜める眞知を誘致す。ソークラテースが産婆術と號するもの即ち是れにして蓋し思想を出産せしむるの謂なりとす。

ソークラ  
テースの  
妻

彼れは此の如く市民の無識を破し、眞知を啓發せんことを努力したれども決して其の反對者を攻撃するが如き態度なく、常に春風習々たる胸襟を有し、謙遜の美德を以て商估、工人をも卑しむることなく友人に對しては常に深切と愛情とを捧げ、曾て親言と慰藉とを廢せず、之を激勵し、感動せしむるに努めたりき。彼が如何に他に對して寛大なりしかば、彼の妻が一日怒つて水桶を覆へし、ソークラテースの頭上より全身に注ぎし時、彼は平然として、鳴雷の後には驟雨ありといひ、或る人が彼に對して何故にかゝる精悍なる婦人を娶りしやを問へるに答へて、「人若し馬を御せんさせば宜しく悍馬を馭御せざるべからず、我人を御せんとす、我にしてかゝる悍婦を馭御し忍耐するを得ば、世豈に御し難く忍び難きことあらんや」と。

クセノ  
ハニース

ソク  
ラテース

彼が教訓は時として奇想天外より来る底の妙辭を以て人を誘ひ其好奇の心を喚起せしむ。「メモラピリア」を傳したるクセノハニース未だ彼が門に入らざりし頃、一日市にソクラテースに遇ふ、彼れ卒爾として問うて曰く、「食物は何處にて購ふを得べきぞ」クセノハニース答ふらく「かしこの市場にて求められよ」彼再び問ふ「人若し善良ならんせば何處に行かば得べきぞ」。クセノハニース答ふること能はずして躊躇す。ソクラテース曰く、「然らば余に従ひ來りて學ぶべし」と、紅顔の美少年クセノハニースはこの時よりして彼の門に入りき。彼れに學を授かりし者甚だ多く、希臘後世の才華たるものを擧ぐるも尙十指に餘れり。メガラの禁令を犯して夜々身を婦人に扮して彼の教を享けしオイクリデスはメガラ學派の祖となり、克己禁欲を以て身を持せるオイクリデスはその當時既に帷を下して門下に業を授けつゝありたれど尙來りて自己の門生と共に彼が警咳に接して中庸節制の美德を守り、後代ソクラテースを理想の巨人とせしプラトーン、キレネ學派の祖アリスチボス、史家クセノハニース等の外、ペリクレスクリチアスあり、クリトーン、フアイドンの如き對話篇に名を止めたる者あり。青年 カエレフォーン、老若オイリビデースあり、艶女テオドーメの如き者も又ソクラテースが教を受けたりと傳ふ。

孔門從遊の子弟三千にもおさく劣らざる彼が門下は、上は一代を指導すべき青年より下

は兵士、估人、職工に及び、感化全市に浴れく、恰かも磯鐵が自己の周圍にある鐵片をして悉く磁石たらしめずんば己まざるの狀ありき。ソクラテース當時の阿典府は内政轉た非に奸人上に在りて政道を恣にし、古代の光彩も日に殺れて國外の辱を受くること多かりければ彼は常に之を嘆き、民衆の肉體を強健にし、敵國の狀勢に鑑み、國境の守備を論じ、以て舊時阿典府の盛時に回さんとし、政弊を痛論し、民心を鼓舞し、自ら朝毎に家を出で、或る時は運動場に出でて體操法を行ひ、或時は人を集めて處世の要道、徳義の躬行を説き、身を以て之が模範たらしめんとせりき。是の如くすること二十年一日の如く、墨突終に黔まざる觀あり。亞典政廳豈に之を憚らざらんや。終にソクラテースはダイモンと云へる新神を拜し希臘の神を瀆し、阿典青年を腐敗せしむと云へる三の理由を以て訴へられ、老軀獄に下りて楚囚の苦楚を嘗めしめらるゝに至りぬ。

獄中の  
ソクラ  
テース

彼が獄中に在りて阿典市民に告げし辭は靜平にして威嚴に満ち、眞理の尊貴を仰ぎ浮世の榮華を退け、凜として千古に獨歩するの光彩を有す。曰く、

余にして若し人心を腐敗せしめたりとせば汝等の欲する儘に余を遇せよ、幾回の死に處せらるゝも余は其道を更へざるべし、死は何の恐るゝ所ぞや、我は未來世に行きて古の英雄と物語らん、現在も未來も善人に惡の來ることなく、神は終に善人を棄てじ、余は今や生

の死に勝れるを知る、諸神之を止めざるなり。

と、死刑の宣告を受けてより三十日デロスの祭日を守りてソークラテース獄中に在り脱獄の機会ありけれども敢て之を爲さず、談論生平と同じく、門弟子を獄中に延きて以て教誡を垂れ、「靜肅大膽に我が爲すべき義務を盡さん」ことをのみ思ふ。刑の前一日ソークラテースはクリートンに對して哲學は死の用意たること、死は何ぞや、來世有無の問題を語り、クリートンが未亡の寡婦及び家族を保育せんことを云へるに答へて「我欲する所は汝が徳義の道を履み行ふにあり、汝之を完せば余が喜悅は家族を守護しくるゝに優れり、不徳にして我家族を護る終に何の要ぞや」と。

## 其の死

刑の時至りてソークラテースは門弟子の裡に坐し靜かに獄卒の齋らす毒杯を仰ぐ、弟子等はかゝる悲慘の光景を見るに忍びず、落涙禁じ得ざるものあり、ソークラテース弟子の歎歎慟哭するを見て云へらく「友よ何を泣くぞ、嗚呼徳義何處にある、先に婦女をして去らしめしは是の如くならんと思へばなり、予曾て之を聞く、人は神意に任せ靜平に死すべきものなりと、我が友悲む勿れ、乞ふ男らしき氣象を示せ」。言終りて牀上に臥し而も尙口言を絶たずクリートンに告げて牡鶏の負を果さんことを乞ひ言終りて頽然として死しぬ、紀元前三百九十九年某の日、暮靄紅に阿典を罩めて絶代の偉人が最期を装ひぬ。時に年七十二。

## メモリア

ソークラテースが門下にして師の行實を後代に傳へたるものはプラトーンとクセノハニースとなり。前者は「辨證論」及び「フアイドーン」篇等に於て師が阿典人民に對する豫言者風の忠告と死に對する感想とを記して委曲を極むる外に、其著述は多く其師ソークラテースを以て主人公となす。蓋しプラトンは前に掲げし二篇に於てソークラテース晩年の行實に由りて記述したるものなれども、其他の諸篇は多くは自己の理想化せし先師をして物語らしめたるに似たり。されどクセノハニースの「メモリア」は第一篇に於て先師が蒙れる冤を雪ぎて、稍論議せし痕を示す外は全篇殆んどソークラテースの行實を離れざるやの觀あり。若しプラトーンの傳へし先師を以て幾分理想の色彩を有するものとすれば、クセノハニースが傳へし先師は現實の其を傳へしに庶幾からんか。ソークラテースが啓蒙の談論は「メモリア」一篇に於て、之を窺ふを得ると共に、彼が如何に巧みに之を用ひて他をして修業せしめしかを知るに足るべし。今此に其二三を傳へて一斑を髣髴せしめん。

第一篇はクセノハニース自らの筆にして先師が阿典政府より蒙りし冤罪、彼は瀆神者にも非ず、又新しきデイモンを稱へしに非ざること(第一章)、青年を腐敗せしことも非ざること(第二章)を論じ證するに其言行を以てし一轉して、彼一代の行實(第三章)を傳へ、神の尊むべく、克己制慾の利、戀愛情慾の害を説きしことを論じ、(第四章)に神の存在を説き、神は何

處として在らざる所なければ苟しくも不正を爲すべからざるを説く。第六章には節制の美德たることを告げ、天下何人が放蕩不頼の者をして後見人となし、飲酒度無き者をして金銀財寶の管理者とすべけんや。無節制の徒は獨り他を損するのみに非ずして併せて自己を損す。肉身の欲を恣にし金錢に平伏する者は是れ金錢の奴僕なり。かの奴隸の卑しきを以て甘んずる所ぞと。(第六章)は、詭辯者アンチフォンがソークラテースの風采の卑しきを以て甘んずるを難じ、かゝる生活は終に幸福に非ずと云へるに答へ、我の人に報酬を求めず美食を口にせず肉慾を恣にせざるは唯永久に不朽なる報を得んが爲のみ、自ら求むるなきは神なり、されば求むる所寡きは蓋し神に近きものたらざらんやと。(第七章)に於て彼は虚飾の人を戒しめ、樂師と水先人の例を引き、自ら得たる所なくして唯一時を糊塗する者は終に失敗に至り、友人を失ひ、他の財を蕩盡し終らんことを説きて之を誠む。

第二篇に入ればソークラテースが對話の妙を知るに足る妙篇多し、(第一章)にはアリスチツポスと共に節制と快樂とを論じ、食欲、情欲の節すべきこと困苦艱難に堪へ忍耐勤勉に身を持するは以て大業を成就す。所以を説き、プロチゴス書中の徳義と逸樂の二女の譬喩を引き浮華淫蕩の逸樂の手を免れ、溫良貞淑なる徳義と共に歩めと教ふ。第三篇(第五章)も又オイナデムスに放縱の害と謹慎の効を教へ、肉慾に溺る、者は何等の自由を有せざる奴隸に同

## 友愛論

じく、天賦の知識を之が爲めに銷磨し精神を靦はれ品格を墮落せしめ、義務を忘れ怠惰に誘ふ、世には放縱を以て快樂なりとする者あれども、這は甚だ誤まれり、眞正の快樂は放逸に非ずして反つて節制にあり。見よ放縱の徒は飢餓寒暑に堪へず、情慾を抑ふるの力を失ひ、之を行ふこと數々にして終に快樂を減す。何ぞ之をもし眞の快樂なりと云ふを得べき。身心共に健全にして家を齊へ友侶に信あり、邦國を愛し、敵を挫く、是れ即ち眞正の快樂には非ずやと。

ソークラテースは朋友及び友愛を論ずること頗る丁寧にして幾度か之を口にせり。曰く、世人皆な朋友を以て無價の珍寶なりとするは是れ宜なり。然れども朋友を得るに至りては家屋土他を購ふ程の熱心を以てせず。喜憂を我と共に分つものは朋友なり、然るに之を遇する事奴婢にだも劣れり。蓋し誤れるの甚しきものなり。善友は金を出しても尙ほ求め難く、人は善良なる奴僕と良友とは之を捨つるものに非ず。されど朋友の選擇は必らず心して之を爲さざるべからず。奢侈を好み金を他人に借りて悉く之を消費し、借さざれば、敵意を挾む者は友とすべからず、されど徒らに吝嗇にして受くるを知つて與ふるを知らざる徒、利己に急にして他を省みざる徒、争論を好み、人に報ひざる輩は友とすべからず。唯節制、信義、眞率にして己を益すると共に又他を益する者を選んで其友とすべし。友は之

を得んと欲するも獵すべからず漁すべからず、宜しく其の好意を得ざるべからず、好意を得んと欲せば、宜しく其の人を歎美すべし。されど過褒愚弄するの態ある事勿れ、然りも雖も眞正の友愛は此のみを以て永久に持續するものに非ず、永久の友情を保たんに先づ身自ら有徳の人たらざるべからず、朋友の善を喜び、幸福を悦し、友に盡して倦まず、友に對しては善を以て勝ち、敵に對しては勇を以て克ちてこそ初めて眞正の友情を保つことを得べけれ。

と、其の他アリスタルリスに貧困を遁るゝ術を教へて綿羊と犬との譬喩を語り、一家の女子に裁縫を爲さしめて金を儲けしめ、或は美女テオドータをして不正の快樂の盡き易きを教へ以て高尚なる哲學徳義の快樂を知らしめ、或時はハリクレースと阿典の現狀を語り、愛國の精神義憤の調に燃え、又或時は王侯、大將の資格品位を論じ、若しくは繪畫彫刻の鑑識を語り、善と美との調和を論ずるなど、高きは神人の一致より卑きは家庭處世の法に至る迄、ソークラテースの口に乘すれば一個靈犀なる生氣に満ち不眞を去り、善美の域に到達せず云ふ事なし。

之を聞く阿典デルファイ神殿には二個の標語あり、曰く「汝自身を知れ」曰く「何事も中庸を善しとす」と。蓋し希臘第一の偉人ソークラテースが標語は汝自身を知れと云へるにあり

デルファイ神殿の標語

胸裡に秘めたる善美は彼が巧妙なる産婆術を以て其の光輝を放つと共に其倫理は節制禁欲の中庸以て之を律し、一步一步、デルファイの神殿に昇らしめんとす。一代の實行、誠にこの二個の格言を體現したりしものか。況んや、其の最後の沈着にして騒がざる態度、ウインケルマンが所謂高潔なる簡素、深沈なる雄大、恰も蒼海の沈澗の下千古常に靜かなる風格を存するをや。

## 第二章 英雄と修養

### 一、諸葛孔明の人格

英雄回首即ち神仙。劍戟を手にし徒らに民衆を殺戮して自ら快とす、これ眞英雄の資にあらず。古來撥亂反正の功を樹つるもの皆な其の心裏の奥底に深く自ら信ずる所あり。起て以て天下の蒼生を救はんとす。之れを以て能く人心を收攬すべく、之を以て能く統一の業を畫すべし。統一の業を畫するに深謀遠略なかるべからず。人心を收攬するに誠實慈仁なかるべからず。殊に其の死生の巷に奔走するに至ては膽勇あり、難に當て屈せず、厄に遇うて撓まざるものなかるべからず。茫々五千載、宇内國を建つるもの幾許、而して興廢の蹟歴々とし

英雄の修養

### 諸葛孔明の人格

て幾多の教訓を吾等に遺す。まことに歴史は一種の英雄經にして世界は英雄の祭壇なり。而して其の英雄には修養の教條を載せ、其の英雄の祭壇には賢哲の面影を止む。威權赫々歐亞の天地に振ひたるマセドンの大王アレキサンドルは破衣弊袴のゲオゲネスが寡欲を羨みて、吾、歴山大王たらずんばゲオゲネスたらんといひ、武勇絶倫一世に冠たりし英傑成吉思汗は自己の行動を以て天意に外ならずと信じ、寛仁大度以て人財を登庸したりといひ、セント、ヘレナの孤島に餘生を送りしナポレオンは世界に偉大なるものは基督あるのみといひて敬虔の念溢れたりといふ。更に之れを我が武士道に見る。誰か佛神の信仰を等閑したるものある誰か仁慈の心を失ひたるものある、伊達政宗、幼時、侍臣に伴はれて不動明王の像を拜し、其の他の佛神に似ずして憤怒の相あるを疑ふ、侍臣告ぐるに此の佛、内に大慈の心を藏して外に憤怒の相を現し以て難化の衆生を攝すといふを聞き、釋然として武將の心得を知れりといふの一事はこれ英雄經の中心思想にして、又我が武士道の殺伐以外に美所長所を有する所以にあらずや。這般の説話は東西に乏しからず、古今に其の例多し。今は暫く支那三國時代の英雄劉備をして功を奏せしめたる諸葛孔明を擧げて其の人格を學ばしめん。

漢の高祖、沛より三尺の劍を提げ正義を標榜して秦の亂を平げてより二百餘年、四民太平を謳ひしが王莽位を僭して世大に亂れ、幸に光武英邁の資を以て之れを討ち天下復び漢に歸

## 不動明王

## 劉備

## 南陽の臥龍

して又二百年、紀綱弛みて之れを恢復するに由なく、群賊蜂起して四海亂麻の如く、所在の豪傑之れが蕩平を名として雲の如くに起ち、各一地方に割據して其の雄を争ふ。漢の景帝の子中山清王勝の後なる劉備名は玄德、家貧にして母と共に履を糶ぐを業とす、しかも大志あり好んで交を天下の豪傑に結び、河東の關羽、涿郡の張飛と兄弟の交を訂し、共に漢室の頽廢を助けんと欲し潜かに獻帝の詔を奉じ、威望隆々一世を蓋ひ天子を挾んで天下に號令し、機に乗じて漢の天下を奪はんとする梟雄魏の曹操を討たんとす。此の時に吳に孫權あり。江東の嶮に據り才を愛し攬に禮し武を練り兵を整へ、屹然として曹操に對す。劉備先づ義兵を擧げて曹操に向ふ。曹操之を逆撃し、劉備大敗して荊州の劉表に投じ、僅に新野の城を得て之れを守る。時利あらず、志を齎らして行ふ能はず、劉備頗る脾肉の嘆あり。

此の時に當りて南陽に稀世の英才あり、諸葛亮字を孔明といふ。瑯琊陽都の人、父は珪字は子貢、早世の後叔父玄に従ひ幼にして經書を學び、廣く諸子百家の説に通じ古今の治亂を究めて施政の道を悟り、眼を兵書に曝らして其の術に精しく、人の出でて仕へんことを勸むるものあるも、深く思慮する所ありて出でず。胸中に經綸の策を懷き、臥龍山下に廬し甘んじて自ら隴畝に耕し、梁父吟を爲す。人呼んで臥龍先生といふ。其の歌に曰く、

歩出齊城門。遙望蕩險黑。里中有三墳。曩々正相似。

諸葛孔明の人格

問是誰家墓。田疆古治氏。力能排南山。文能絕地紀。

一朝被讒言。二挑殺三士。誰能爲此謀。相國齊晏士。

劉備其名を聞き之を屈請せんとし、之を南陽に訪ふ、遂に田を耕して諱ふ者あり。

蒼天如圓蓋。陸地如碁局。世人黑白分。往來爭榮辱。

榮者自安々。辱者定碌々。南陽有隱君。高眠臥不足。

と、劉備其の何人の作なるやを問ふ。これ臥龍先生の作なりと。其の廬を叩けば在らず。二  
び之れを顧る亦在らず。即ち書を遺していふ。

(上略)伏して觀るに朝廷陵替し綱紀崩摧し群雄國を亂すの時、惡黨君を欺くの日に當り、備  
心肺俱に酔ひ、肝膽幾たびか裂け、匡濟の忠誠ありと雖も、經綸の妙策なきを奈何せん。  
仰ぎ啓す、先生仁慈惻隱、忠義慨然、呂望の良才を展べ、子房の利器を施せ。備、之れを  
敬する神明の如く、之れを望む山斗の如し。一見を求めんと欲して得べからず、再び十日  
を容せ、齋戒薰沐して特に尊顔を拜せん。乞ふ覽覽を垂れ、鑑察せば幸甚し。

と、三び之を訪ふ、時に孔明、臥床にあ、り劉備階下において之れを待つ。孔明睡覺め吟じ  
て曰く、

大夢誰先覺。平生我自知。草堂春睡足。窗外日遲々。

魚と水

と、童を呼んで其の來人あるを知り、終に劉備と高堂に會す。正にこれ龍の雲を得たるが如  
く、孔明此に經綸の策を立て終に劉備に従つて廬を出づ、時に孔明年二十有七。

爾來劉備事毎に孔明に謀り、師の禮を以て之を敬ふ。關羽張飛心に喜ばず、備謂つて曰  
く此の青年、何の才ありてか深く之れを敬すると。備曰く、吾が孔明を得るは猶ほ魚の水を  
得るが如しと。張飛等怒りて孔明を呼ぶに水を以てす。されど孔明已に知遇に感ず、他の毀  
譽何かあらん、唯だ實力を以て之れを服すべきのみと、後曹操の軍と戦ふの時、畫策悉く圖  
に中り、劉備の軍意外の大將を得。此に於て張飛等も亦其の智に服す。かくて赤壁の一戦に  
さしも猛威を逞せし曹操の軍を破りしより交戦幾回か辛酸具に嘗め劉備の威望いよ／＼高く  
終に漢中に王たるに至る。孔明欣然として曰く、吾、王が三顧の恩に感激し南陽の草廬を出  
でしは王を助けて四方を討平し、漢家を既倒に挽回し、天下をして泰山の安きに置かんが爲  
めなり。今、荆益の二州を跨有し兩川を蕩平し、漢中王の位に即く。稍々吾が意を強うする  
に足る。然れども疎にすべからざるものは此の後でありと。大に内政を修め國事を整ふ。後  
曹操卒し其の子曹丕、獻帝に逼りて位を譲らしめ、自ら皇帝の位に即き、國を魏と稱し、漢  
帝を弑すと傳ふるに至るや、孔明爲めに劉備を勧めていふ一今、曹丕、漢帝を弑して帝位を  
詐稱し、漢の嗣を絶す、王はこれ帝室の胄、今にして帝位に即き漢祚を萬世に繼ぐにあらず

大蜀

んば何を以て天下の衆を撃かん」と、此に於て劉備、帝位に即き章武と改元し國を大蜀と號す、孔明を以て丞相とす。

遺孤を託す

章武二年、帝、吳を討たんとして大に敗れ、慙憤病を得、翌年三月に至りて甚しく、乃ち孔明に命じて太子を輔けしめ、謂うて曰く、嗣子輔くべくんば之れを輔けよ、不才ならば君自ら取れと。孔明感泣して曰く、臣敢て股肱の力を竭くし忠貞の節を效し之に繼ぐに死を以てせざらんやと。帝、更に太子に告げて曰く、

悪小なるを以て而も爲すこと勿れ、善小なるを以て爲さざること勿れ。惟だ賢、惟だ徳、以て人を服すべし。汝の父、徳薄く、效するに足らざるなり。汝、丞相と事に従ひ之れに事ふる父の如くせよ。

と、君臣の相知る此の如く、以て忠貞の節を效すべし、劉備は孔明を得て此の大業を畫し、孔明は劉備を得て大功を樹つ。人生の意氣感する此の如くにして初めて其の眞情を見るべし。帝崩じて孔明其の遺孤を助け、事、巨細さなく之れを決し、日夜心身を勞して休むことなく、吳と和して邊境を安くし、南方戎越を撫和して後顧の憂なからしめ、此の宿昔の志たる魏と中原に争はんとし、出師表を上りて其の志を告げ、

「……三び臣を草廬の中に顧み、臣に諮るに當世の事を以てす。是に由て感激、遂に先帝に

出師表

許すに驅馳を以てす、後、傾覆に値ひ、任を敗軍の際に受け、命を危難の間に奉じ、爾來二十有一年、先帝、臣が謹慎を知る、故に崩するに臨みて臣に寄するに大事を以てす、命を受けて以來、夙夜憂歎、託付效さず、以て先帝の明を傷げんことを恐る。故に五月瀘を渡りて深く不毛に入り、今ま南方已に定り、兵甲已に定る。當に三軍を獎率して、北、中原を定むべし。庶くは驚鈍を竭くして姦凶を攘除し、漢室を興復し、舊都を還さん。此れ臣が先帝に報じ、陛下に忠なる所以の職分なり……臣、恩を受けて感激に勝へず、今遠く離るゝに當り、表に臨んで涕零ち、言ふ所を知らず、謹んで表す。

と、其の至誠盡忠の言を見るべし。かくて大軍を率ゐて魏を討ち、關中響應す、偶く參軍馬謖、孔明の節度に違ひ敗績す。孔明還りて更に兵を出し、後の出師の表を上りて志をいふ。句々忠誠、言々人を動かす、其の末段に曰く、

後の出師表

臣、鞠躬盡力、死して後已む、成敗利鈍に至りては臣の明の能く逆め視る所にあらざるなり。

と、兵を用ふる神の如く、敵を卻くること數回、魏將司馬懿、其の威名を憚り、山に登り營を掘り、肯て戦はず。孔明乃ち民を息め士を休すること三年、朝に出で奏して曰く、「臣既に兵士を養ふこと三年、糧草兵器充足して人強く馬壯なり、此の時に乘じて魏を討ち以て先帝



遺表

の値遇に報ずべし。若し奸賊を平げて漢室を恢復せずんば再び陛下に見えず」と復た大衆を悉くし進んで五丈原に據り、懿と渭水の南に對し、兵を分ちて屯田し、久駐の基を爲し、數く戦を挑むも、敵畏れて出でず。偶く孔明、病を得て心神疲勞又軍務を見る能はず。乃ち揚儀をして代つて之を司らしめ、病を扶けて自から遺表を出し、死して後、天子に上らしむ。其の表に曰く、

丞相、武卿侯諸葛亮、伏して聞す。生死常あり、定數を逃れ難し、死の將に至らんとす、願くは愚衷を盡くさん、臣、賦性愚拙、時に艱難に遭ひ、符を分ち節を擁し専ら鈞衡を掌り、師を興して北伐、未だ成功を獲ず、何ぞ期せん、病、膏盲にあり、命、旦夕に垂る。伏して願くは陛下、心を清くして怒を寡くし、己を約し民を愛し孝道を先君に達し、仁恩を寰宇に布き、幽隱を提拔して以て賢良を進め、奸隱を屏斥して以て風俗を厚うせよ……

と、萬世の下、人君の規箴たり。死に臨んで君を忘れず、慈父の子を訓誡するが如く懇切を究む。孔明一たび先帝の知己に感じ草廬を出でてより家國の經綸を以て己が任とし、遺孤を託せられては鞠躬盡瘁、死に至るまで止まず、英雄、英雄を知る、清の乾隆天帝、御製五賢祠の詩並に序あり

近州古瑯琊郡。

漢諸葛亮故里。

晉王祥王覽。

唐顏杲卿真卿。

皆産其地。

舊有

英雄、  
英雄を  
知る

謹慎の  
人

景賢祠合祀之。嘉其純忠至孝。節烈彪炳。足表範人倫。紀之以詩。王祥王覽能全孝。真卿杲卿均致身。所遇由來殊出處。要推諸葛是全人。諸葛是れ全人。眞にこれ誠忠の權化、君子と英雄とを兼ねるものたり、鹽谷贊山、曾て孔明の傳を讀んでいふ、

古に稱す、非常の功を爲す者、必らず非常の行あり。予乃ち曰く、至常の行あつて而して後、非常の功成ると。光武の初め起るや、絳衣大冠す。人皆な驚て曰く、謹厚なるもの亦之れを爲すかと、殊に知らず、謹厚なるものにあらずんば則ち能く大事を爲す能はざるを霍光小心謹慎、昌邑を廢し、宣帝を立つ、文王小心翼翼、周家の基業を啓く。孔明亦自ら謂ふ、先帝臣の謹慎を知ると。夫れ謹慎の孔明たる所以を知らば、則ち孔明の英雄たる所以を知る。

孔明の一代は謹慎にあり、而して此の謹慎なるものをして大業を賛せしめし劉備の眼識も亦凡にあらざるなり。

一、ワシントンの人格

北米合衆國が現時三十有餘州を併せて宇内に雄飛するに至りし因は主として植民地に不毛

ワシントンの人格

を開きし人民が、自由を慕ふ止み難き精神に出づるも、之れを統率して草創の效を遂げし偉業に至りては、マウンド、ヴェルノンの一農者ジョーシ、ワシントンに倣せざるを得ず。ワシントンの祖父は英國の人にしてジョーシが四代の先初めて北米ヴァージニアの荒蕪に來りホートマツクの河畔に廣大なる地を得て之を耕し、靜平なる生活を爲ししがジョーシが此處に生れしは紀元一千七百三十二年二月二十三日、父はオーガスチンと云ひ、母はマリーポールと呼びぬ。兄弟十人ありジョーシは其の二男にして一兄三姉を有す。父は温厚篤實の紳士にして神を敬ひ人を愛するの人格を有したりしなり。逸話の傳ふる所によれば、嘗て父は邸後の園畝に杖を以てジョーシ、ワシントンの名を地上に劃し其痕に甘藍の種を播きしに、程經て甘藍はワシントンとある字の如く生ひ出でぬ。之を見たる幼童は怪訝の念に堪へず其故を父に問ひたりしに、父はこの機會を以て甘藍の種は己が播きしものなれど斯く生え出でしは世の創造主なる神の仕業にしてこの世に生を享けしものは悉く神の命に服従すべきものなることを訓へしと傳ふ。この一話を以てするも彼の父が敬虔なる人なるを知るべし。又ワシントンが幼時父より與へられし斧の利を試みんが爲に庭園に在りし櫻樹を切り仆ししを僞らず父に告げて罪を謝しぬと云へる物語あり。或る傳者は之を以て據なき虚構の事と見做せど、彼が幼時よりして虚偽の言動を爲すを敢てせざりし證左とも見るべきか。彼が父オーガスチ

ンはジョーシが十三歳の時に死し、十人の子は各々其の遺産を領たれて孤兒となりぬ。されど彼等の母は謹直にして兒女の教養を怠らず、頗ちし財産を監督して些の遺漏なからしめたりと傳ふ。

其の時代の植民地の教育は未だ進歩せず且教育者も植民地に至ること尠く、高等の教育を受けんとせば、海を越えて母國に行かざるを得ざりき。故にワシントンの幼時に於ける教育も極めて幼稚なるものに過ぎず、唯が僅かにヴァージニア州に於て、句讀、算術、簿記、習字を學びしのみ、文法修辭の如きは授けられざりしと覺しく、彼が作りし幼時の文章は其だ謬劣たるを免かれざりき。されど彼が幼時には眞率にして何事にも謹嚴なりしことは其の當時筆記せし帳簿を見ても明なり。其體裁甚だ精細にして一として亂雜なるものなく、彼が膽寫せし『證書文例』は商賈風の書體にて認められ、其の書後に集めし拔萃の類にはは道德上の格言多く、幼時よりしてかゝる修養に心を致ししを證して餘ありき。ワシントン生涯の言行には、些の罪惡なく、卑劣なる點なかりしは皆人の知る所にして、其の因由する所は幼時より克己制欲の習慣を作りしに由らずんばあらず。彼れは幼時より活潑なる遊戯を好み、競走角力、飛躍等常に儕輩に抽んで、軍隊の遊戯戰鬥の狀を爲すを喜び、自ら仲間の首領となるの習なりければ、思ふに其の性質は激烈にして情緒燃ゆるが如きものなりしならんも、彼は

言行の規律

是が爲に禮讓を失ひ、言行を恣にするこゝなからんが爲に、自ら道德上の格言規則を選び、之を言行の規律と名け、以て自己に克つの料とせり。今其一二を擧げんに、

- 一 自己の名譽を重んずべし、上品なる人と交るべし、悪友と交るよりは友なきにしかず。
  - 一 人を責めんと欲せば、自ら非難さるゝ如き態度あるべからず、先例は規則に優る。
  - 一 博識なる人の前にて些細の事を喋々すべからず、無學なる人の前にて重大なる事を饒舌し、信じ難き奥妙なる話は爲さざるを善しとす。
  - 一 己に要なき他人の事を知らむと勉むる事勿れ、其席上に在らぬ人を非難する勿れ、かゝる事は甚だ不正なればなり。
  - 一 話しを始むる前、このことを話しても善きか悪しきかを考へよ、而して明瞭にして順序よく話さば巧妙なる話手なり。
  - 一 言行は常に良心に恥ぢざらんことを要す
  - 一 努めて汝の心中に良心と呼ぶ天の光明を保て。
- 些事をも忽にせざるワシントンが精神は既に十四五歳の少年時より其の言行に現はれ、かゝる格言を服膺して克己の工夫を爲し來りしなり。彼れ既に小學校を卒業せし後二ヶ年が程は測量、三角術、幾何學等を修めしが、其時彼は實地練習の爲にとて校舎の近傍なる原野を

細事の注意

測量すること恰かも自己の所有の如く、朋友が餘りに彼の丁寧に過ぐるを冷笑するをも顧みず、一々精細に之を己が手帳に書込みたりき。かゝる微細なる事に於て丁寧親切なりしワシントンは將來大國の經綸に當りても丁寧親切に規律ある大道を行ひ、毫も疎放の風なかりしなり。

アレガニ  
山中

少年のワシントンの忍耐力と判断力とは長兄ローレンスの縁戚なるフェアアックス卿に知られ、卿の領地なるアレガニ山中の地の測量を囑託せられたり。而して其領地は廣袤數十哩に亘り大澤、深林、谿谷に滿ち、猛惡なる蠻民は時として白人を襲ひて之を殺すの憂あり。非常の忍耐と勇氣を有するに非ざれば之に赴く事能はざりし地なりけれども、敢爲にして艱難を事とせざる彼は、一人の友と共に深くこの蠻地に入り、藁の床に毛の切れし一枚の毛布に身を纏ひ、虱に攻められつゝ、蔑不を明し、恰も工夫の如き生活を送りて斯る難事業を成し遂げたり。彼れが將來軍隊を督して佛國の軍隊と戦を交ふるに當り困難に克ち、蠻地に入りて萎まざる經驗は蓋しアレガニ山中測量の賜なりと云ふ。

幼児を  
救ふ

嘗てバーシニヤのボトマツク河畔の測量に従事しつゝ、ありし時、其の近傍に住める農民の幼童が誤つて河に陥り、其の母が堤上を走りつゝ、救を乞ふ聲を聞きたるワシントンは猛然として奮ひ起ち、巖に激し、石に逆ふ激流中に身を躍らして飛び入り、矢の如く流るゝ幼童を

救はんとせり。急流直下する所は數丈の大瀑布、若し幼童を捉ふるを得ざれば彼は瀑布に打たれて再び生くるの望なかりき。幸にして少年の勇者は瀑布を距る數間の所に幼童を救ふを得たり。危難と困厄とは彼をして光明ある前途を期待せしめたるなり。されど、之を要するに彼が幼時は他の天才を見るが如く、尋常人の企及し得ざる底のものに非ずして反つて、平凡なる一幼童が嚴肅にして規律ある生活を爲し、秩序と克己とを以て自己を教育せしに過ぎざるを知らざるべからず。

ワシントン  
の  
勇氣

ワシントンが公生涯の第一歩は彼が二十歳より二十八歳に至る迄、粉骨碎身して以て故國に盡しし攻城野戦に在り。ウイリアム戦争には民兵の州監大佐として之に臨み、アン女王戦にも又之に従ひ、ジョージ王戦争には佛軍と戦つて非常なる名譽を得たりき。この間彼が性格は幾多の困難に由りて益々陶冶せられ、高潔なる情藻、常に民兵の間に認められき。嘗て政府が民軍に俸給を與へざりし時、全軍の將士擧げて隊を去らんと決せし時、彼は

其原因の如何に拘らず、我はこの軍隊を退くこと能はず、全軍悉く去るも我一人は留らん。と云ひ、戦敗れて困難の起る毎に彼は常に其の責任を己に歸し、戦の開かる、毎に我自ら先づ進まん

と叫び、全軍の先頭に立ちて指揮を下すを常とせり。而して彼は戦の終りには必らず古郷

エルノン丘に歸臥し、ジョージ戦争の後には純然たる一農者として耜を秉りて隴畝の間に立ち、毫も功名の欲なく、恬淡なる生涯を送らんとしたり。

然れどもワシントン丘上の夢は長へに穩かなること能はず、パトリック、ヘンリーが、自由を與へよ、然らずんば死、と云へる叫聲が、植民地の人民を熱狂せしむるに當りてや、人民は強ひて彼を隴畝の間より起たしめ、與ふるに將軍の印綬を以てし、烏合の衆に將として精銳なる英國の軍隊と前後七ヶ年に亙る戦争に當らしめたり。彼が自由の爲に一身を犠牲に供し、己を用ひて人民の知に辜負せざらんが爲に如何に苦心焦慮し、困難と飢餓とに身を委れて毫も悔ゆる所なかりしは、世人の熟知する所にして若しワシントンにしてワシントン丘に起たざりしならば、世界唯一の自由の章なる星旗は今日ワシントンの白聖館上には樹てられざりしや必せり。

獨立の  
戦

精良の武器なく、身を支ふる程の給養もなく、加ふるに議會は數く俸給を部下に與へざる間にありて何等の支給をも受けざるワシントンは自己の名譽と功績をば、

是は我が兵士より受くる賜なり。と感じ、

米國は一に諸君に負ふ。

ワシントンの人格

を激勵したればこそ、彼等統一なき民兵は敵の戎器を奪ひて以て敵を伐ち、自由の偉なる光榮をば神に捧げんと欲するの精神に住したるなり。

ワシントンが攻城野戦の功、フラクリン等が樽俎折衝の績は結晶して終に北米の自由を生みぬ。これ等の偉功は一として誠實の賜ならざるは無し。

一千七百八十三年十一月二十五日北米合衆國の獨立と平和は地上に確立せられ、越えて十二月四日軍の總督ワシントンはニューヨークホテルに將士を集め、嚴肅なる告別の式を擧げ其印綬を解き、萬人の涕泣を後にして彼は郷里のヴェルノン丘に去り、人民の職業中、最も健全、幸福、尊貴なる農業に身を委れ、毫も功名を心に懸けず、唯其の義務を果したるを喜んで再び耒耜を手にしたりき。彼の敬すべき美點は實にこの恬淡にして寡慾なる點にあり。

若しワシントンにして一點の野心を藏したらんには、彼が帝王たらんとする機會甚だ多く且つ一擧手一投足の勞にして彼は帝冕をも其額上に加へ得べかりしなり。されどワシントンが自由と米國との父たる所以は實に之に斥けし高潔なる精神より出でたるなり。ワシントンが帝王たらしめんとする請合を受けて之に答へたる書牘は百代に傳へて彼が高潔なる情藻を語るに足る。曰く、

「卿よ、汝の手紙は我をして殆ど驚愕と恐怖とを齎したり。戦争の困難は終に卿の感情を聞きしに比すればものの數ならず。我は斷言す、我はかゝる手紙を見ることを憎惡す、……  
……卿にして若し國家を思ひ、我身と兒孫の行末を鑑み、尙我を思ひ玉はゞ、速にかゝる考を心中より抹殺せよ。而して再びかゝる事をば我に告ぐることを勿れ、又人にも告ぐることを勿れ。」

## 人格

かゝる高潔なる精神を有する一農民をヴェルノン丘より起たしめて米國第一の大統領たらしめしは蓋し米國の大なる光榮にして、彼が三度其職を襲はざりしは彼の光榮なり。蓋しケロムウェルたちざりし彼は世界の光榮たらずとせずや。

佛軍と戦ひては堅忍なる大佐たり、自由の爲めに戦ひては總督たり、政治家としては第一の大統領たるワシントンはヴェルノン丘上の一農夫、ポトマック河畔、葡萄と無花果の樹陰に一市民たりしジョージにして、疇昔アレガニーの山間に風と共に困難せし一小童に過ぎざりしなり。市民の間に生れし自由の兒は、他の所有地を測量せし勤勉なる一青年なりき、彼が成功は彼が日常服膺せし格言の如く、

總べて斷案は廣き經驗と熱心なる熱慮との後に來りしものありき。

## 三、徳川家康の人格

今川氏

江戸幕府三百年の基を闢き海内三百の諸侯をして柳營に懾伏せしめたる稀代の英雄徳川家康の先は、清和源氏の嫡流を汲み新田氏を襲ひしと雖も中道に至り困頓失意して身を藤澤遊行寺に投じて僧となり徳阿彌長阿彌と稱へ、遊行上人と共に海内を教化し途三河を過ぎ松平酒井兩村長に養はれて子となり、松平氏に育はれし徳阿彌は歸俗して松平太郎左衛門と號し、自ら近隣の荒蕪を墾き道路を修め貧窮を救うて其名稍々近傍に聞ゆるに至りしが、後壯丁罪人を募つて武を業とし、四方を略するの志を有すること一百年、族會稍々多きを加ふるに及んで遂に岡崎の城に據り、廣忠に至りて漸く海道に重きを爲す、廣忠の子竹千代は即ち徳川家康なり。

當時海道に覇を稱する者三河を中心として北に武田氏あり、西に織田氏あり、東に今川氏あり、岡崎は常に此等豪族の威武に威嚇せられ、廣忠に至り織田信秀と戦うて勝たず、救を今川義元に乞はんが爲に其子竹千代を質せんす。信秀隙を見て竹千代を途に奪ふ。義元廣忠を援くるに及び、信秀の家人竹千代を殺さんとするを信秀の嗣信長之を助け、換ふるに織田氏の家人を以てす。これより竹千代は今川氏に質となり、義元は竹千代を後見して僅かに

岡崎の城を保つを得たり。竹千代長じて家康を名告るに至り義元は家康をして西三河に當り以て織田氏に備へしめ自ら上洛して京師を定めんと欲する志あり。斯の如くにして家康は織田今川兩家の間に存し、驥足を延ぶる事さへ能はず、日夜攻戰討争に身を委れ、備さに辛酸を嘗めざるを得ざりき。

家康が老來天下を掌握するに至れる修養は實に彼が岡崎一小城に據り四方の豪族と相砥礪する間に成れり。其意志の堅實にして一點浮華の氣なきは之を甲斐の信玄に學び、膽斗の如く事に臨んで直截の斷を下すは之を信長に學び、加ふるに父祖の衣鉢を傳へし天賦の才能は戰鬪に臨んで常に其銳鋒を現はしたりしをや。彼は小國を以て敵を四方に受け、攻城野戰の謀略を胸中に蓄ふると共に常に民政に意を留め、寸土尺地を拓きて民富を増すの政治的方面に心を盡さざるべからず。「武力雜記」の傳ふる所に由れば、

三河にて御家老人に仰せ渡されしは、家人等の妻を迎ふるには、よく木綿を織り得べき女を求めよ、御出陣の後には俵米十分を玉はることなられば、かゝるものを織出で家業にあてよ。

秀吉が聚樂一宵の歡會に千金を散じて豪華を事させしに比して殆んど天淵の差あるを見る。彼れ曾て部下に節儉の道を教へて曰く、

節儉

我に五字七字の祕傳あり、  
上を見るな。身の程を知れ。

彼れが秀吉の豪放なく、信長の爽快なく、成功と勝利とは常に際約の間に存して一點人を魅するの光彩をも有せざるに係はらず、終に天下を一統したりし所以の者は、實に、彼れが堅忍にして不拔なる意志の力によれり。而して其の意志は實に三河の一小人質なりし竹千代の時代に蘊蓄したりしなり世に傳ふる。家康の遺訓は其眞偽未だ急に信じ易からずと雖も彼が老成堅實なる精神、周到緻密なる用意を道破し得たるに庶幾し。

人の一生は重荷を負て遠き道を行くが如しいそぐべからず。不自由を常と思へば不足なし心に望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基、いかりは敵と思て、勝事ばかり知て負くる事を知らずんば害其身に至る。おのれを責て人を責むるな、及ばざるは過ぎたるよりまされり。

言々悉く是れ彼が一生の事蹟より歸納せし一面の眞を含み、満足、忍耐、謹慎の徳を以て無事長久の基を闢きし教訓とも見るを得べけんか。彼れは實に堅實なる意志を以て本尊とする三河武士の結晶なり。海道に彈丸黒子の地を占め得たる岡崎城裡には質素堅實を以て身を持つる幾多の小竹千代と小家康とありて、以て彼をして三百年太平の基たらしめき。家康が功

## 家康の遺訓

## 足袋箱

## 家康の寶

## 石川又四郎の話

成り名遂げて已に駿河にありし頃、常に足袋箱二管を作り置かしめ、一は新らしきを納れ、一は砂土などに汚れしを入れ、其の箱滿つるに及んで、我前に之を開き、汚れたる足袋兩三足は元の箱に残し置き其の餘はそれごとく女房ごもに分らたり（古老物語）儉素の風は一族中に影響し所謂三河式士之美點となりぬ。秀吉は將士を遇するに賞功の大を以て其功名心を鼓舞し、國土を與ふること家康の汚れたる足袋に於けるが如くなりしも、家康は財地を得る容易ならざりしを以て恩威を以て家人を勵まし部下を鼓舞するに氣節を以てし、遇するに自己の一族を以てせり。嘗て秀吉宿將を會して有する所の珍寶の何物なるかを問ひし時、諸將各々金銀財寶を以てす。家康黙して言なし。秀吉強ひて之を問ふに及びて曰く、

吾は三河の片田舎に生れ立ぬれば一の珍寶をも有せず、唯予の爲には水火をも辭せざる五百の士を有す。

と、争臣十人を有せし候伯の言にもまして秀吉の心膽を寒からしめたりけん、不敵の太閤唯苦笑して止みしと傳ふ。彼は如何にして水火をも辭せざる五百の家人を贏け得しぞ。「如蘭社話」に傳ふる逸事は家康と其の家人との交情を知るべし。曰く、家康の臣石川又四郎なる者あり、初め浄土宗なりしが後轉じて一向宗徒となり一向一揆に與みして三河を亡命し而も至る所志を得ず、漂泊して再び三河に至りしが、會々路上に家康と會しぬ。家康又四郎を見て、

あれに居候は石川又四郎めと見ゆる、譜代の主を檀那坊主に思ひかへて我等方を出、爰か  
しこを經めぐりても埒明ぬゆゑ、又舞戻りたりと見えたり、不届なる奴かな。

と云ひ、近習に吩咐して彼れを城に伴ひ來らしめ薄暮に及びて城に歸りて再び又四郎を召し  
胸ぐらを御取被遊、汝元の淨土宗になるまじきか、いやならばいやといへ、首を切つてさ  
仰せられければ、又四郎承り、たとへ首を切りなされ候とも宗旨をかへ申儀は罷成不申と  
御請を申すを御聽被成、扱々情のこわきにくき奴かな、ゆるすと御意にて御つきはなし  
被成候へば、又四郎は後さまに二三間ほごよろ／＼とし、あふのけに倒れしがやがて起直  
り、兩手をつき、元の淨土宗に罷成可申と申を、御聞被成、己めは身共がいふ時は不罷成  
と云、只今になりて可替旨いふは、いかなる所存ぞやと被仰ければ、又四郎承り、いかに  
私體の者にては宗旨をかへぬに於ては首を切ぞとの御意の下にて御請仕候ては男立ち不申  
ゆるすとの御意の上にて御主様の御嫌被遊候一向宗にて罷在べきやうは無御座に付、以前  
の淨土宗に可罷成申上候と也、兎角の御意も之無、御わらひ被遊被成御座候が、其後段々  
と御念頃に被召仕候なり。

以て家康が如何に家人を遇したりしか、家人が如何に稜々たる眞骨頂を有せしかを想見する  
に足らん。

忍の  
一  
字

彼れば堅忍不拔なる意志と氣骨稜々たる家人とを有し、加ふるに時機の來るを待つ忍耐の  
精神を有しき。天下を統一して江戸幕府を開くを得たる所以の者は實にこの三者あるを以て  
なり。彼子孫を戒しめて曰く、

世に大丈夫と稱せらるゝもの忍の一字を能くす。我未だ大丈夫ならずといへども、忍字を  
持する久し。我が子孫我が人爲を慕ふあらば五典九經の外忍の一字を守るべし。

彼は隠忍して靜かに時機の臻るを待てり。時機一たび至れば彼は靜かに畫策して一點一畫を  
打算し、利害成敗を胸裡に畫きて而して後之に當る。彼は破壊の英雄に非ず、破壊すると共  
に建設するを忘れざりき。永祿七年十一月武田信玄家康の英名を慕ひ、家人下條彈正をして  
書を酒井忠次に送らしめ、兩家懇勲を通すべきを以てす。其の書の表に啐啄の二字を記せり  
城中其の字面を知る者なし。會伊勢の僧江南和尚東國に赴かんとするの次、岡崎を過ぐ。乃  
ち石川日向守家成この字義を問ひしに、鳥の卵殻を破るに其時節あり、早ければ水となり、  
遅ければ腐ると云へる意なりと答へき。家康之を聞き、

凡て萬事に時を失はざるを以て肝要とす、主將たらんものは殊更此意を失ふまじ。と云へ  
り。彼が用意の那邊に存するかを知るべし。

家康はかくの如くして時期の來るを待ち、終に海内を統一して戦亂を剿絶し、民に鼓腹擊



壤の樂を與へ、自又征夷大將軍淳和獎學兩院別當源氏の長者たる榮譽を荷ふに至りぬ。されど家康は一面に干戈を以て海内を靖定するに共に他面に於ては文物を起し宗教を尊び、干戈に更ふべき恁麼東西を民に與ふるを忘れざりき。曰く文教即ち是れなり。戰國の英雄は唯攻伐を以て民人を定め四方を鎮壓し得べしと信じたりき。是彼等が皆中道にして其業を棄てざるを得ざる素因なり。家康の遠見豈是を知らざらんや。彼れは民心を統一すべき唯一の方法として宗教を取れり。若し宗教にして其所を得せしめざらむか、彼等信仰に熱せし徒は一揆となりて四方の族人と結び、其の極終に收回すべからざる一大勢力を現出すべし。曾て家康が一向宗徒の亂を鎮めんが爲に大樹寺に於て淨土宗の門徒を集め、「厭離穢土、欣求淨土」の旗幟を立て、之に對立したる如き、明らかに彼の腦中に浸徹したる事象ならずんばあらず。彼は宗教を善用すべきを知れり。本願寺光佐の子光壽をして東本願寺を立てしめ彌陀如來の弘慈も是には過ぎじと思はる、(岩淵夜話)恩義を施すと共に、關ヶ原の役に彼に従はんとせし一向宗徒をば嚴に斥くるの處置を誤まらざりき。彼は宗教をして天下統一の具たらしめたり。家康幕府を江戸に開くに當り、武州仙波喜多院の天海をして常に其の帷幄に參ぜしめ、天海をして黒衣宰相の名あらしむるに至れり。天海は實に稀有英傑の資、江戸幕府の爲に畫策する所頗る多く、叡山の僧徒を鎮め、上野に寛永寺を創め、京の延曆寺と對し法親王をこ、

## 武家法度

に据ゑて京師の異心を壓へ、家康薨するに及んで一實神道の奥義により東照大權現の神號を契請する等、公武の間を斡旋すること甚だ勉めたり。天海に次で徳川幕府の爲に斡旋したりし者に金地院崇傳あり。幼にして禪法を學びて南禪寺の長老となりしが、頗る文事に精なるを以て招かれて陣中の文學を掌り、幕府開くるに及んで天下の佛寺を統一し、法制を定め、外交に當り、後江戸に金地院を設けて僧録職を握る、又一世の奇僧たるを知るに足る。家康はこの二人者を以て民人の宗教心を利用するの具とし、以て幕府をして益々九鼎太呂の重を爲さしめき。幕府が民人統一は宗門改めを以て其大成を期し、武人には朱子の穩健なる學風を以て文學の素養を成さしむるに共に、世道人心をして殺伐なる氣風より蟬脱せしめんとせり。彼は藤原惺窩を擧げて文教を起さしむるに共に、弟子林羅山を重用して文學の柄を授けぬ、「武家諸法度」は腥血未だ腕を去らざる武人を教へて曰く、

文武弓馬之道專可相嗜事、

左文武古之法也、不可不兼備矣、弓馬是武家之要樞也、號兵爲凶器、不可得已而用之、治不忘亂、何不勵修鍊乎。

と云ひ、或は又百ヶ條に、

文武皆仁より出づ、千徑萬機と雖其理同じ、治國平天下の法茲に在りと知るべし。と。聖

賢の道此に於てか再び地に在り。家康は如是にして國の上下を文教を以て統一せんと努めたり。

儒と神道と釋とは其品は區別すれど善に導き惡を罪するに過ぎず、其所見に従ひ、之を宗とし之を旨とす、妨げざる所なり、されど議論に於ては堅く停止べし。末段家康が議論を避けて實行に心を注げるの態度を見るべし。

さらば家康自己の信仰は抑も何所に確立せられ、何人によりて鼓吹せられしか、天海僧正か、あらず、崇傳和尚か、否、曰く三河大樹寺の登譽上人なりき。彼曾て岡崎にあり、一向一揆と戦ひて利ならず、従ふ者十八人と共に逃れて大樹寺に至るや、住寺登譽は懇切なる訓誡を以て彼を覺醒せしめき。「淨宗護國篇」に曰く、

上人公に向ひて問ひ申されけるは、御若年の昔より數度の軍に向はせ玉ひけるに、敵に勝ちなんとのみ勇み玉へるか、又は何の分ちなく一筋に向ふを洩さず切り拂はんとの御心なりや、此二つの境いづれをか先に爲し玉へるぞと云へり。公聞し召して之れ即ち武士たらん者常の志にて更に珍しからず、何ぞ事新らしき尋れかなとのたまへり。上人又申されしは、然らば申上ぐべし、敵を討ち亡して何の爲にかしたまふ。公答へて曰く其の心は武威を盛んにして敵を討ち終ふは城を乗り取る時其領地即ち歸服す、これは少分の勝なり、大

度の武將は其計略大にして爲すところも然り、然して勝つときは大國の主となりて富四海にわたり威を世上に振ふようとのたまへり。上人又申さく、富四海に渡り威を振ひて何の爲にかしたまふ。公曰く然る時は其家を興し、父母あればもとより、亡きと雖其名を輝かし、まして其身は名を後代に止め榮華を子孫に傳ふ人古今珍しからず、然ればこれ武功の大なるに非ずや。上人重ねて曰く、それ人身に貯ふる徳を以て其威を増して萬人を司る人は其榮累代にいたりて久し、又勇力強盛を振ひて人に勝つ時は其勝利を保つこと久しからずして又人に亡ぼさる。然れば幸は天より受くるを以て第一とす。されば天より受けざるにおのが計力にて討ち従へしは幾程ならずして衰ふ。これ即ち非常の武力にして劫賊なりそれ非道にして富貴なるは浮雲の如く、一旦従ひなびくも雖、一通りせし山嵐に草葉の靡くに異らず。かゝる愚なる心は貪より起れり。國郡を従へて一旦富を成し榮華を爲すと雖忽ち死に赴く時はやがて惡趣に至りて恥しめをとりにて其迷魂計りなき苦を受くなり。これ必然の道理にして免るゝことなしと云へり。公つくづくと聞し召され、御得心淺からざりしかば仰せける様、敵を亡しては其所領を得、又はだんくの功を以ては登庸せんことを願ふは諸士の道なれば、其計略軍理を常に心がけて勝れんことを旨とす。然らば此一事に心を傾けて佛法後世の用意に於ては尤も疎きなり、然らば當來の浮沈これまた餘氣なき專要

なり、如何ぞ謹むべからざらんや。當來に於ては因果應報等のこと皆以て佛教なり。此に至りては上人の教化に従ふべし。爲に示されよと、實にうらなき仰せ言なりければ。渾身唯是れ功名と富貴を以て畢生の志望させし將軍は、萬人が心中の機微なる宗教の源泉を衝いて以て這の劫城を覺醒せしめたり。榮花、富貴、死の前に來りて畢竟何するものぞ。唯兒孫の計と祖先の名をを知つて、遺魂計りなき苦惱を受くるを知らず。況んや貪慾の家に勝利を保つ事久しからざるをや。

家康は常に後世の必要を聞くの機を捉へ得たり。登譽上人はこゝに於て一段の訓誡を與ふ。

世上の武士をさして總て劫賊と申すには非ず、元來其所作に善惡は侍らす、唯其人の心を申すなり。若し其心法に適ふ時は日夜に刀刃を振ふて殺斷するとも聊か惡業にあらず。又長へに佛經を讀誦し晝夜に念佛するとも之を善行とも云はず。唯方寸の一法にあり。此の義を觀じぬれば武士の作業は全く菩薩の行に違ふことなく、慈悲の行法大權聖者の善巧方便なり。されば古人の語に、天下は一人の天下に非ずして天下の天下なりと云へり。然れども天下に於ては其主君其司なき時は民ほしいままにして争亂止む時なし。然るを主司となりて天下を我物とし榮華を極めん爲めに庶民を貪り苦しましむる時は國人疎み惡むなり

## 治國の要

然るを傍より其疎んぜられて萬機まち／＼なる弱味を見て敵士已に出來て戦ひに及べり、元來國人に疎まれしかば、實の加勢なきを以て終に敗り亡さる。又其君主聖道を行ひ民を憐み神佛を尊崇し、道行はるゝ時は其仁徳四方に至るを以て更に怨敵なし。然れば則ち一郡一國にても又は天下の廣漠なるも、其君主司職とならんには其器寛大慈愛にして物の爲に驚動せず、柔和正直にして人を愛し恤むを以て本とす。然る時は何を以てか背き怨むるものあらんや。若し又かくあらん上に於て其聖道に背きて、士は逆心を爲し民は怨を擅にして、其惡蔓りて世を騒がし亂を爲んにも、彼の慈悲の道破るゝに當れりとて、其まみにして差し置く時は其亂いよ／＼盛なり。然る時は彼の慈悲の心は更に捨てざれども之を見忍ぶに止むことを得ずして、或は辭を以て戒めむとすれども、彼の惡徒其下知に従はざる時は、速に之を退治し、或は流刑に處し又は誅伐すること、定れる法にして、之れ即ち殺生を以て殺生を咎むるの義にして、即ち菩薩の修行にて慈悲の一行なり。公は後先君より代々佛教を信じさせ玉ひ、別けて淨土の法門に歸依します。これ第一の御幸なり。然らば則ち衲今當宗の法意によりて逆亂の苦難を拂ひ、向ふ所の諸勢をして正道に歸せしめ給ひ、國家安泰にして甲冑の緒を解き弓を袋にし玉はんこと只御心の中にあり、恐れながら示し上るべし。抑も件に述べ候ひし聖賢の道を行はせ玉ひなば御運を開かせ玉はんこと更

に怪しみなし。而して兵具収り國郡穩かにて安住ましまさんには、平生に淨土往生の御心を起させ玉はんこと第一なり。第二には諸士をめぐみ民を憐れませ玉ふべし云々。陣中常に六萬遍の念佛を稱へ、六字名號の旗幟を以て敵に向ひし家康は、果然として其壯年の時代に於て登譽上人の提撕に由り、かゝる安心を立命せしを思へば彼が三百年の霸業を成就せしもの又實に其所因なきに非ざるなり。

### 第三章 文豪の修養

#### 一、蘇東坡の修養

四百餘州の山水其の秀靈の氣を蜀の地に鐘め、峨眉の山、蜀江の水、凝て錦心繡腸の詞章となり、先に李太白あり、峨眉山上半輪の月、影は一代を風化して支那詞人の宗たり。後に蘇東坡あり。眉州眉山の縣に生る。字は子瞻、名は軾、其の家は岷峨の麓蜀江の上にあり。父は洵、字は明允、老泉と號し、少にして學を好まず、年二十有七にして發憤して學に志し、月を閉ぢて書を讀むこと六年、六經百家を究め、京に入りて歐陽修に知られ祕書省校書郎となる。其の文蒼勁峭刻、優に一代の文宗たり。祖父序、伯父澹、渙も亦文學を以て著はれ、

山水と家庭

破釜の聲

一文名一  
す代を歴

東坡の弟、轍、字は子由、其文秀傑平暢、父兄と共に文星一門に集る。母は程氏、賢夫人の名あり、坡の幼時、父洵官遊して在らず、教養一に自ら任じ、之れに書を授け、之れに治亂の蹟を談ず、東坡は實に出でては秀靈の山水に接し、入ては此の母に鞠養せられ、不言の感化と有意の教訓とは此の少年を養成し、幼時作る所の文中、既に

人能く千金の壁を砕くも破釜に聲なき能はず、能く猛虎を搏つも蜂蟻に色なき能はずの語ありと、人情の至微を穿ちて心衷の琴線に觸る。長じて莊子を讀み、嘆じし曰く「吾、昔、中に見るありと雖も口言ふ能はず、今此の書を見て我が心を得たり」、默識神通、好んで南華の書を讀み、心神の修養に資し、後、父弟と共に京師に入るや、三蘇の文名一時に藉甚し、殊に東坡の文に至ては當時の文豪として天下に冠絶したる歐陽修も、軾の書を讀んで汗の出るを覺えず、快哉快哉、老夫當に此の人を避くべしといひ、又客と談じて「三十年後、世人更に我を道着せじ」といふ。東坡眞に知己を得たりといふべし。終に試に應じて官に擧げられ大理評事簽書鳳翔府判官となりて任に到るも刀筆の吏となりて斗米の爲めに没頭するは彼れの堪ふる所にあらず、終南山に隠れ竹林の中に在りて避世堂と名け、

隱レ几類如レ病。忘レ言兀似レ瘖。 荏苒追ニ上古。冠蓋謝ニ當今。 曉夢援呼覺。 秋懷鳥伊吟。

蘇東坡の修養

不軼軻遇

の閑寂中に詩思を養ふ、然かも治蹟大に見るべきものあり。任滿ちて京に歸る。英宗皇帝、軾が才を愛し召して翰林に入れんとす。時に韓魏公、相たり。諫めていふ。軾才遠にして大器なり。他日自ら天下の用を爲すべし。要は朝廷に於て之れを培養するに在り。今一旦驟かに進めば、天下の士未だ必らず皆之れを信ぜず、適ま以て累を爲すに足らんと。召して秘閣に試み、眞史館たり。英宗崩じて神宗立つに及び、年壯にして名を好み、治を求むるに急にして王安石を擧げて其の新兵を行はしむ。軾、之れと争うて合はず。侃々其の非を擧げ諍々其の弊を論ず。安石喜ばず、遂に請うて杭州の通判となる、留ること三歳、密に徙り、更に徐州に至り湖州に轉じ、想ひを江山に寄せて滿腔の不平を吐き、終に禍を買うて獄に下さる蓋し安石の徒の讒誣に出づ。軾、詩を轍に寄せていふ、

聖主如天萬物春。小臣愚暗自亡身。百年未滿先償債。十口無歸更累人。是處青山可埋骨。他年夜雨獨傷神。與君世々爲兄弟。又結來生未了因。

と、彼れ既に死を決したりしなり。幸に神宗其の才を惜み、僅に赦して之を黃州に貶す。朝に在ては傲岸一世を壓する安石と争うて屈せざりし軾も、今は謫地に在りて田夫野人を友とし、

先生食飽無一事。散步逍遙自捫腹。不問人家與僧舍。拄杖敲門看修竹。

東坡

悠々自適、身の窮厄の中にあるを忘る。谷究つて山愈々高く、困難益々迫つて出の人の高きを見る。中年に於ける東坡が流離困頓は彼れの人格を陶冶し其の詩思を啓發す自ら故營の地を墾して東坡と名け、又自ら東坡居士といひ、坡に沿うて雪堂を築く。前後春艸齊しく、左右斜徑微なり。

吾不知五十九年之非而今日之是。亦不知五十九年之是而今日之非。吾不知天地之大也寒暑之變。悟昔日之癯而今日之肥。

と、其の白露、江に横たはり、水光、天に接する明月の庭に槩を横へて詩を賦せし曹孟徳の昔を偲び、眇たる蒼海の一粟、吾が生の須臾なるを哀みし赤壁の賦は、實に此の時代の清遊を叙せしものにして、千古の絶唱にして、其の病の爲めに門を杜ぢて客を謝せるを誤り傳へて物故せりといふものあるや。「平生得る所の毀譽殆んど皆此の類」と達觀せるは、其の修養の堂に入れるを見るべきにあらずや。

是より先き東坡、年少氣を負うて京師に在るや、遍く天下の名僧智識を検せんとし偶く玉泉の皓禪師を問ひ、自ら稱して天下の名僧を量るの秤と姓す。禪師大喝して曰く、一喝重きこと多少ぞと。坡、答ふること能はず。爾來心を禪要に傾け、其の杭州に趣くや、金山寺佛印了元禪師に參じ頗る造詣する所あり。東坡が靜中の修養は世路の艱難に遇うて幾試鍊を経

皓禪師  
東坡

悟境

其の黃州を發して廬山を過ぐるの頃に當りては、其の詩と其の想と幾段の進境を見る。彼の廬山烟雨浙江潮。未到千般恨不消。到得還來無別事。廬山烟雨浙江潮。

といひて退歩却來の妙趣を咏ぜる。其の西林寺壁に題して、

横看成嶺側成峰。遠近高低各不同。不識廬山真面目。只緣自在此山中。

といひて風光明媚の中に罩れるをいへる。皆これ禪の悟境なり。

一夜、東林の總禪師を訪ひて無情說法の話を聴き、翌朝、馬に乗りて山水絶佳の所を過ぎ豁然大悟していふ、

溪聲便是廣長舌。山色豈非清淨身。夜來八萬四千偈。今日如何舉似人。

彼れは實在の妙音を聽得し、天地の好景を看取したりしなり。其の詞章に於て凡俗を超越せるもの豈に所由なからんや。

後、神宗崩じて哲宗立つに及んで、朝政一變、軾も亦召されて朝に入る。然かも黨争未だやまず。長く此の詩人を容るゝ能はず。「上書得自便。歸老湖山曲。躬耕二頃田。自種十年木」と、外補を請うて杭州に知たり、これ十六年前、曾て通判たりし地。江山故國の如く、父老皆相識、後召されて闕に趣き、在ること四日、復た出でて穎州に知たり。轉じて揚州の知となり、召されて闕に入りて禮部尙書に遷りしも、一榮一枯終に遠竄の身さなる。類殆盡

殘の身を以て瘴癘の地に入り辛酸具さに嘗む。しかも身心晏如たるものあり。以て其の修養を見るべきにあらずや。轍軻不遇は彼れの一生なり。而して能く堪へ能く忍び、窮境にありて綽々たりしものは彼れの素養なり。臨終の時、門人錢世雄、進んでいふ、先生平時の履踐此に至て須らく着力すべしと。東坡いふ、着力すれば即ち差ふと、語絶えて逝く。時に五十有二。

一代の行實、仔細に之れを叙述したらんには吾等を指導するもの少からざるべしと雖も、今は唯だ其の概要を擧げて彼れが政に參しては剛直の臣となり、詞章に隠れて萬代の師たるの素深きを知らしめたるのみ。殊に其の双親に孝に、弟妹に友なりしの一事は、此の曠世の詩人が性行として忘るべからざるものなり。曾て畫工に命じて阿彌陀佛の像を描かしめ、父母の爲めに福を薦め、頌を作つて、

讀佛偈

佛以大圓覺。充滿河沙界。我以顛倒想。出沒生死中。云何以一念。得往生淨土。我造無始業。本從一念生。既從一念生。還從一念滅。生滅々盡處。則我與佛同。如投水海中。如風中鼓。雖有大聖智。亦不能分別。願我先父母。與一切衆生。在所爲四方。所遇皆極樂。人々無量壽。無往亦無來。

といへるは一面修養の箴たらしむるに共に他面に於て彼れが孝心を見るべく、其の雨中、轍

に別る、詩に、

庭下梧桐樹。三年三見汝。前年適汝陰。見汝鳴秋雨。去年秋雨時。我自廣陵歸。今年中山去。白首歸無期。客去莫歎息。主人亦是客。對床定悠悠。夜雨空蕭瑟。起折梧桐枝。贈汝千里行。歸來知健否。莫忘此時情。

さいへるに於て友情を見るべきにあらずや。其の

入、峽喜、巖巖。出、峽愛、平曠。吾心淡無累。過境即安暢。

さいへるは境に隨て境に變ぜられざる安立の胸地を示す。

江月照我心。江水洗我肝。端如徑寸珠。墮此白玉盤。我心本如此。月滿江不湍。起舞者誰歟。草作三人看。嶠南瘴毒地。有此江月寒。乃知天壤間。何人不清安。豨頭有白酒。盜若白露傳。獨醉還獨醒。夜氣清漫々。

さいへるは修養の極致を謳へたるものにして、此の心境あつて彼の詞章を發す。吾等は唯だ文豪としてのみ東坡を傳へんとするにあらず。彼の全人格は皆これ吾等の活模範たるものにあらずや。川北温山の東坡外傳の序、能く東坡の爲人を悉くす。掲げて以て東坡の人物を髣髴せしめん。

雲は天半に停て漠々として唯だ風焉に依る。東坡其れ雲の如きか。水は地中に行て滔々然

として唯だ勢ひ是れ従ふ。東坡其れ水の如きか。稚子雲を指して其の遠近廣袤を語る。至人水を鑑みて其の利害變化を説く、以て遠き爲せば則ち遠く、次で近き爲せば近し。次で利と爲せば則ち利。次で害と爲せば則ち害。其の廣袤變化、亦皆な稚子至人の心目に在り其の行て巖岫を抱き、流れて巖崖を繞るに當ては則ち愛翫すべきの極にして、其の何の故たるを審にせず。東坡の學の文、浩然として博く、雜然として駁、荒々然として其の端倪を見ず。君子期するに宰卿の器を以てし、儒者許すに經緯の才を以てし、術士擬するに權謀の離を以てし、佛氏待つに解脱の祖を以てす。道士醫人、書畫者流、咸な吾曹の師と謂はざるはなきなり。豈に其れ淡然無心測度すべからざる、雲と水の如きを以てせざらんや東坡、之を作て自ら云ふ、猶ほ行雲流水の如しと。余謂ふ其の一世を擧げて亦行雲流水の如きか。然して雲能く雨を致し、水能く物を育む。均くこれ無窮洽澤す。東坡の澤、何くに在る、曰く行雲のみ、流水のみ。

## 二、ゲーテの修養

十七世紀の末葉より十八世紀に跨れる獨逸の思想界は從來勢力を得來れる舊思想が汎く一

般に布及すると共に、之れに嫌焉たらざる新思想は漸く頭を擡げ來り、其の形式を爲さんと欲して未だ滲げず、混沌として捕捉すべからざる傾向を有したりき。舊來學苑の裡にのみ其勢力を張り來りし舊學說舊信仰はライマールス、ニコライ、レッツシグ等の碩學に由りて一般の思想界に弘布傳播し以て一切を這裡に包容せんを企てつつあり。此傾向に従ひて此の時代を名づくれば即ちアウフクラーレンゲスベリオデ啓蒙時代と名づくべし、されど一般の學者は舊信仰舊知識を以ては終に自己の要求を満足するに足らずとし、思想に過去を輕視し、宗教に正統派を斥け、神祕迷信を振り捨て、偏に自己の知力を以て一切を解決せんとするの傾向あり。之に従ひての時代を名づくればエルロイヒツングスベリオデ光耀時代と稱すべきなり。

何れの時代にてても新舊兩思想が各々思想界の一角を領して相下らざるは常に見る所なれども、この時代に於ける獨逸は別に尙一個の思想の漲れるありき、所謂觀察考證を蔑視し歴史的發展を重んぜず唯自己の情熱の發露するが儘に行爲し、偏見に熱狂したる混亂の思想なりこの時代をば又名けてシユルムウツンド、ドラック、ベリオデ暴風突進時代と云ふは蓋しこの謂なり。

佛蘭西に於て政治的に現はれし革新の思想は既に業に獨逸の思想界を支配し、何等かの一新革命をば齎さざるを得ざる時代なり、ゲーテの生れしは實にかゝる思想混雜の世紀にしてゲーテ自ら又この時代の兒なりしなり。

ナポレオンは昨年のゲーテを見て謂へらく「如是の人世界にありや」と歎ぜしが如くゲーテは眞に近世に於ける最も偉大なる人物にして、其燃ゆるが如き情熱、飽くを知らざる知識欲、史上稀に見るの大才なり、然れども彼には堅實なる意思を缺きたりき。彼自らも又自己の意志の堅がらざるを認識し世を終る迄其意を鍛錬せんことを企てたり。彼の偉大なる所以の一半は實に此に存す。彼が常に其燃ゆるが如き情欲の爲に失敗したるにも係らず、後代に幾多の崇拜者を有する所以のものも又實に此に存す。

ヨハン、ヴォルフガング、ゲーテは一千七百四十九年八月二十四日フランクフルトの富有なる商賣の家に生れ、幼よりして詩才の凡ならざるを示したりしが、其父たる人は嚴烈、冷淡の性情を有し眞理を愛し、廉直を重んずるの風あり、常に飢うるが如く知識を求むるの精神を有しぬ。ゲーテが死する迄眞理を探究せんとするの精神はこの父より恵まれし遺産なるなからんや。彼れの母は單純なる愛情を有し、快活誠實の氣風、情に感ずること多く、寧ろ放縱の傾向ありて演劇誑語を好みき。ゲーテが燃ゆるが如き情熱は蓋しこの母より享けし性情と云はざるを得ず。而して彼の堅實なる意志は終に何人よりも之を享けざりき。加ふるに其の家豊かにして、未だ曾て涙に濕ひし麩麩を喰ひし事なく、窮乏と艱難とは終生營めしことなく、反抗の氣風克己の美德は之を學ぶに由なかりしなり。唯一個自然の寵兒として氣宇



曠朗風采瀟洒たる貴公子として生ひ育らぬ。ゲーテが強き意志を有せざりし原因は實に艱難の試練を受けざりしにあり。然れども若しゲーテにして自己が堅實なる意志を有せざること自覺せず、唯徒らに情緒と知識とのみ其身を任せたりしならんには、思ふに彼は唯一個の情熱ある詩人として僅かにバイロン一輩の徒と馳驅するに止まりしならんか。

人誰れか生れながらにして圓滿なる性情を有する者ぞ、唯自己の缺けたるを認識して之を修養せんとし有するを助成して之を圓滿ならしめんと欲する人こそ大なる人格の域に到達するを得るなれ。而して其の缺けたるを補はんが爲に終生焦慮し、足らへるを充實せしめんが爲めに一生を努力に費ししことゲーテの如きは蓋し稀なりと云はざるを得ず。

彼れが他くこゝなき知識の要求は已に垂髫の頃よりして現はれ、未だ八歳に至らざる頃、日耳曼、佛蘭西、伊太利の國語を知り希臘羅甸の古文辭をも教へられ、千七百五十五年にはリスボンの大震災を聽き、全智全能にてまします天地の創造主にして保護者たる神は何故に義者と不義者とを共に殺し玉ふぞと疑ひ、フリードリッヒの奇捷を耳にしては世界の正義とは何ぞと疑ひ初めたりき。十二歳の頃よりして彼は數學、繪畫、音樂を學ぶと共に、英語、猶太日耳曼語、希伯來語をも讀み譯し得る程に達したりき。感激し易く擺動し易き彼が天性は、絶えず外界の刺激に由りて心理的發展を遂げつゝありしなれど、未だ彼は當時の所謂混

知識的  
要求

亂の思想には多く觸るゝ所なく、フランクフルトの窓の帳深く、移り行く思潮を觀しに止ま

放縱の  
生活

ゲーテ十六の秋フランクフルトを去りライプチヒ大學に入りホフラー、ペーノに就きて哲學法理を學ぶに至り、終に混亂せる思想の渦中に入ると共に天真の情感は火の如くに彼を焦し、暫くにして「予は神と世界とを教授の知れる如くに知るに至れり而して論理は終に立往生せり」と放言して講座に出でず、校長ホフラー、ルドウキツヒに管せられたる醫學生の會合に出席しつゝありき。然れども移り易き彼は之にも甘んぜず、或はペーメ夫人に近づき、酒肆シエンカツプの家<sup>シエンカツプ</sup>に會して文學の徒と談じ、メナ、カタリナを戀し、<sup>メナ</sup>エーセルに從ひて繪畫を學び、「ラオコーン論」を喜びてはドレスデンに古名匠の作を見んが爲に赴き、ストツクに就きて彫刻を學びぬ。されど彼は終に之に甘んずるを厭せざりき。彼は時代の暴風<sup>ブルム、ウインド、ドラク</sup>突進の渦中に入り來り、憂鬱偏固にして變り易き性情をして一層其度を強めしめ、麥酒を痛飲し珈琲を好み、放肆不品行を敢てし僅かに其鬱を癒さんとせり。

果然其の放肆は罰せられたり、千七百六十八年の夏一夜略血して隣室の朋友を呼びて救を乞ひ、漸く落命の苦を免れたれど、此時に發したる頸上の腫物は久しく癒えず、褥中に在りて煩悶する所頗る多くゲーテが所謂怪想的鬱憂症に陥ちたり。彼の友ランゲルはこの時ゲー

聖書の  
耽讀

テに日耳曼古文辭書を贈ると共に聖書を讀むべきを諭したりき。彼は朋友の忠言により熱誠を以て聖書を耽讀すること數回、これによりて偉大なる印象をば與へられき。彼れ曰く、予は聖書を愛好し尊敬す、そは予が道德の修養は實に此書に歸すべければなり。彼が神祕論者に反對の意を表しつゝ尙ほ自然論者にも同情を有せず、信仰乏しければ一面懷疑を恐れたるは是が爲なり。

彼をして道德的修養に入らしめし第一の因縁は實に疾病と聖書となりき。

彼が知識欲は年々共に發達し、健康僅に恢復するに共に鍊金の術を學び、再び法學を修めんが爲にシュトラスブルヒに赴き、此處にてヘルデルに遇うて啓發せらるゝ事頗る多く、國民的の境地より世界的市民に移り行く新時期の興起を助成せんが爲に其力を盡すべきを教へられ難解苦澁の書をも尙自ら之を明らしめられたり。されど一度ゲーテの胸中に胎せし怪想的鬱憂症は其の根頗る深く、はては自殺して其の苦を免れんと欲し、潤刃の短劍を夜中褥中に抱き、燈を滅せんと欲する前、必ず之を室より脱して視、靜かに尖端を胸にあて、寸又寸之を胸中に突き込まば如何ならんと思ひし事一再に止まらざりき。されどゲーテはかゝる苦悶の裡に在りながら尙歎み難き知識欲に驅られ古今東西の自殺論及び其方法を尋ねて之を批判するの餘裕と矛盾とを有しぬ。而して彼が斯く自殺を夢想し思索せしは寧ろ詩的努力なり

煩悶

自殺觀

と思ひしが爲にしてかゝる見地より自殺の感想を蒐集すること約二年『自殺は畢竟精神の偉大と自由を求むべき道に非ず、自殺は之を求めて終に失ひし者』と云へる解決に到達せり一面より云はゞ彼は自殺する程の意志の力を有せざりしに非ざるか。

ゲーテが情感的時代の作物にはかの有名なる『若きヴェルテルのわづらひ』あり、此書の主人公ヴェルテルは暴風突進の時代に生れし情感の兒にして毫も意志の力を有せざるゲーテ自身なり、シュトラスブルヒに於て博士の學位を受けし後も尙彼は何によりて身を立てんかに惑ひライン河畔に於て小刀を河中に投じて其の運命を占はんさせしが如き、一として彼が意志に弱きを證せざるなし。而して彼はかゝる鬱憂の時代にありても尙ほ情事を捨てず、至る所情人を求むること恰も飢うるが如かりき。

ゲーテが第二の修養はヴァイマルの新都と伊太利亞旅行にあり。サアルの河、イルムの谿、物舊りし古城のたゞすまひ、清麗繪の如きヴァイマルの自然は情感の詩人をして最後の床を發見せしめ、光榮ある後半世をこゝに送らしめたりき。されどゲーテは此處に來りても尙情火の進るを禁する能はず、ゲーテ一生の瑕瑾たる行爲をさへ行ひて憚らざりしのみならず、ヴァイマル王廷の豪華風流に身を没し、日夜饗宴に列して三鞭酒と詠謔とを恣にせり。然れども彼はかゝる歡樂の境に身を安きつゝ、一面には觀察と經驗の眼を以て植物發育の過程を探り

ヴァイ  
マルの  
新居

ゲーテの修養

骨格を學び腮骨を發見し、顯微鏡によりて類同グライシエンの研究を勉め、以て後年科學界發現者の素地を爲すを捨てざりき。

無謀墮落の生活はヴァイマルに住すること、年多きに從ひて漸く良心の苛責を受け、暗澹たる情慾に眼昏み、人生の半は何等の善をも爲さずして賣されたるを覺り、夢想の世界を逃れて現實の世界に入らんとするの煩悶は刻々として堪へ難く、「神よ更に我を助け給へ、而して我に光明を與へ給へ」と叫ぶに至り、思想正に一變せんとするの傾向を示したりき。

久しく翹望せし伊太利亞の旅行はゲーテの所謂新誕生なりき。桂の綠深きネーブルの市、霧立ち罩むるカンパニアの野、傳奇藝術の興趣に滿てる古への羅馬は、道永久の市に近づくにつれて何人をも之を化せずんば止まざりけん、ヴァイマルに於て其嫩芽を萌しし彼の自覺は終に羅馬に於て熟せり。彼が羅馬を去りし時ヴァイマル侯に呈せし書に曰はく、「この旅行の目的は予をして無用の人物ならしめし形骸上、道德上の不安より蟬脱し、眞の美術に對する渴仰を癒さんとしてなりき、而して前者は未だ全からずと雖ども後者は成功せり」と。

伊太利亞より還り來りしゲーテは當年のウエルテルが隻影を止めず「イフイゲニア」を公にして、古典女詩人が意志の弱かりしに萬斛の同情を濺ぐと共に、科學の研鑽益々精緻の域に達し、假令ニュートンに對する辯駁は其前提に於て誤謬に陥りたりとは雖ども、「植物化醇論」

伊太利  
の旅行

シルレ

は近世植物學の曙光となり、「色學」は後素家に偉大なる刺激を與へ、解剖學上に腮骨の發見より自然の一致を歸納し、あらゆる不同をば最高の一致に歸着せしめんと企畫せりき。

この頃よりして彼はシルレルを友とし常に相砥礪して同一詩神に仕へ、史上稀に見る美はしき交情を結び、彼が最後の傑作「ファウスト」の如きも若しシルレルの刺激なかりしならんには或は終に之を完結せざりしやも知るべからざるなり。彼が史上に不朽の名を残しし一半の名譽は蓋しシルレルとの交情に由れるには非ざるか。即ち彼が最後の修養は實にシルレルとの交際にありき。

翻つて思ふにゲーテ一生の事業は彼自分の言の如く生命の源泉、眞理の礎を發見體得せんとするの努力にあり。而して屢々論ぜし如く彼は堅實なる意志を有せず、恰かも白雲の徂徠するが如く一より他に移り、他を去つて又他に赴き、而も至る所に満足を得ざりしことファウストの如かりしなり。彼の詩を以て長き彼が懺悔と云へるを眞とすれば、ファウストが眞理の探求に渾身を捧げて終に之を得ず、惡魔に身を任せ肉慾を恣にし、希臘に遊んで一たびヘレナを得、又之を失ひ、某王侯に請うて不毛の地を得、荒蕪を開墾し、以て地上に一新都市を現出せしめんとせしは、疑ひもなく堅實なる意志に由りて以て地上に己が足跡を印さんと欲したる彼が努力なり。ファウストは惡魔の爲に地を呪はれ幾度か墮いて幾度が破壊せら

ファウ  
スト

れしは、ゲーテが幾度か暗黒なる情慾の爲に繊弱なる意志を破壊せられたるを詠じたるものには非ざるが。ゲーテは終に死に至る迄満足せざりき。彼が最後の一言「もつと明くせよ」(mehr licht)と叫びしは、眞理の追求、意志の充實未だ全からずして早く既に世を謝するを悔いし深刻なる恨ならざらんや。

されどゲーテが偉大は死する迄強固なる意志を充實せんとして自ら棄てざりし所にあり、もつと生きたいと歎きたる眞摯の悔恨にあり。

三、松尾芭蕉の修養

天地も風雅なり、萬象も風雅なり、此の風雅これ佛祖の肝膽なり、衆生の心性なり、濁海の寶筏なり、闇夜の明燈なり。此の風雅を捨て、能く道に達するものなしと看破して正風の眼を開き、宇宙の妙を十七字に謳ひ、天地の玄を短詩に罩めしものは我が松尾芭蕉なり。彼れの先は平宗清に出で、後に伊賀柘植の庄に居る。幼にして藤堂新七郎に仕へ、共に北村季吟の門に遊びて國學を修む、新七郎、蟬吟子と號し、俳句に長じ、主從其の交兄弟の如し。不幸、蟬吟子、世を早くしければ、芭蕉遺髮を奉じて高野山に上り浮世の無常を觀じてより遁世の志止み難く、寛文六年の秋の末、隣の門柱に

風雅

出家

雲さへだつ友かや雁の生別れ

の一句を遺して家を出で塵世を棄て、洒脫なる文學生活に入り、身を雲水に託し東都に下りては深川に草庵を結び、一株の芭蕉にふりそぐ秋の雨のさびしさに、

芭蕉野分して盥に雨をきく夜かな

と吟じ、自ら老莊の閑寂を喜び、夙に西行の山家集を愛して其の骨髓を傳へんとし、又臨濟寺佛頂禪師に參じて必要を問ひ、造詣する所頗る深く、天和三年災に遇うて其の庵を燬きこゝに行脚を思ひたちて甲斐駿河に遊び、再び深川に歸りて復た芭蕉を植ゑ自ら風羅坊といひ桃青と號しけれど世は皆な芭蕉の名を呼びぬ。貞享三年、初夏山吹の色うつらふ頃、深川の庵に禪定靜かに觀念を凝しし時、因地一聲、水に入る蛙に大悟の眼を開き、

古池や蛙飛び込む水の音

豁然として悟得する所あり、縁を離れ、機を離れ、心を忘れ、境を忘れ、風雅萬年の祖を爲しぬ。世に古池眞傳なるものあり。其の間の消息を揣摩して、

六祖五兵衛、佛頂和尚に従ひて芭蕉の艸庵を訪ふ、六祖先づ入て「如何なるかこれ閑庭艸木中の佛法、」桃青答へて曰く、「葉々大底は大、小底は小」と、長老内に入つていふ、「近日何の有る所ぞ」桃青答へて曰く、「雨過ぎて青苔を洗ふ」と、長老、又問ふ、「如何なるか是れ

松尾芭蕉の修養

草庵

古池眞傳